リアルドリーム文庫
懺悔
挿絵／夏桜
海の上に咲いた
月下美人

「あっあっあっ、はぁんっ♡　生ちんぽ、もっとおま○こしてっ♡」

七瀬は少しでも喉から出る淫らな声を絞ろうと努力する。しかしヘブンズダストの前では全てが無意味だった。

「ひぃっ♡　ひっ、いっいっ♡　もうダメっ、溶ける……全身ドロドロで、わけわかんなくなっちゃう……」

ついには上半身を倒し、神田と抱き合う形になってしまう。メロンのような乳房がむにゅりと神田の胸板で潰れる。そんな体勢になっても七瀬の方から腰を振り、神田もそのリズムに合わせて突き上げた。

「あっ、あっ、あっ♡　ちんぽ、奥っ、刺さるっ♡」

「彼氏とじゃこんなセックスは絶対に無理だろう？」

そう言いながら神田が七瀬の唇を吸う。

七瀬はなんの抵抗もできないままそのキスを受け入れた。

Coverdesign:MCG

海の上に咲いた月下美人

懺悔
挿絵／夏桜

KTC

Contents

目次

プロローグ …… 4
第一話 「接待」 …… 21
第二話 「潜入」 …… 74
第三話 「下船」 …… 148
第四話 「リベンジ」 …… 187
第五話 「依存」 …… 230
最終話 「開花」 …… 262

登場人物 *Characters*

水倉 七瀬
(みずくら ななせ)

容姿端麗で男勝りな性格の女探偵。

町田 平蔵
(まちだ へいぞう)

七瀬の相棒であり、恋人。

神田
(かんだ)

神田重工の社長。

篠塚
(しのづか)

豪華客船の警護を一任されている男。

プロローグ

都心からは幾分と離れた、とある郊外。
入り組んだ細い道に下町情緒を残した街並みだった。
その一画になんの変哲もないアパートが建っている。築年数はまだ浅いだろう。白い塗装も小綺麗な建物だ。そこから少し離れたT字路の曲がり角から二人の男女がそのアパートを見張っていた。
「本当に出やがるんだろうな？」
女はコンビニで買っておいた炒飯（チャーハン）おにぎりを貪りながら男に問う。
「容疑者は被害者が出勤中に被害者の私物をゴミ捨て場から拾っている」
二人の視線はアパートのすぐ横にあるゴミ捨て場へと注がれた。緑のネットが張られており、まだ回収はされていない。
朝の出勤タイムから、やや経った時間。
天気はどんよりとしており、午後からは雪がちらつく予報だ。
「もしストーカー野郎が顔を出さなかったら？」

彼女は炒飯おにぎりを三口くらいで豪快に頬張ると男に聞いた。
「当たり前のことを訊くなよ。出るまで待つんだよ」
そう。彼女だってそれくらいのことはわかっている。もう新米でもないのだ。
ただ彼女は確認したかった。
「あたしらにモノを漁ってる現場を咎められたら逆上するかもしれねーよな」
「その可能性もある」
「その場合はあたしがどう振る舞おうが正当防衛だよな」
男はため息をつきながら背後の女を振り返る。
成人女性の平均よりもやや高い背丈。スーツ姿はすらりとスレンダーに見えるが、胸部だけが豊かに膨らんでいる。タイトなスーツなのでくびれも確認できる。
彼女はトレードマークの狂暴性をやや孕んだ、活発な笑みを浮かべていた。
「俺達は喧嘩屋じゃないんだぞ」
「わぁってるって。平蔵」
どこか楽しげに男の名を呼びながら平蔵の肩を叩く。
平蔵はアパートの方へと振り向き直すと一言、釘を刺した。
「過剰防衛にはなるなよ。七瀬」

「ま、女のケツを追うのに、こそこそするような奴だからな。ちゃんと優しく拘束してやるよ」
「どんな奴かわからないんだから……」
平蔵の説教を七瀬が途中で切り捨てる。
「油断はしねぇって」
平蔵は中腰で、もう一度ため息を吐いた。
七瀬の腕を信用していないわけではない。
そしてこれはあくまで仕事で、私情を挟むわけにはいかない。
（しかし、やはり彼女は俺の……）
平蔵が思い悩んでいると後ろから囁かれる。
「おい。あれじゃねーのか」
七瀬の声で我に返る。
彼の視界が捉えたのはゴミ捨て場に近づく黒いパーカーにチノパンの男。中肉中背でキャップとマスクをしているが、おそらく身なりからして若い男性だろう。
やけに周囲を気にしてキョロキョロとしており、あからさまに怪しい。
平蔵は確認のために、ここに至る経緯を頭の中で整理する。

依頼者でありストーカー被害を受けているのは、都内で働く事務職の女性。大学を卒業したのちに、上京して初めての一人暮らしをこの春から続けている。

初めて異変を感じたのは秋ごろ。

最初は視線だけ。そして暫くすると明らかに帰りの夜道で後ろをつけるような足音が続いた。

最初は単なる偶然だとタカを括っていたが、やがて被害はエスカレートする。

冬が本格的に到来したある日、自治会から身に覚えのない苦言を呈される。

出したゴミの袋が破れていたというのだ。

それも一度や二度ではない。

彼女が独自に調べた結果、ゴミ袋に入れて捨てたはずの私物がいくつか抜き取られていた。

すぐに警察に相談したが、まだ明らかな被害が出ていないためにパトロールを強化するとだけ言い渡される。ゴミの件は勘違いの可能性を諭された。

意気消沈してノイローゼ気味だった彼女がたまたま見かけたのが、繁華街に並ぶ雑居ビルにあった、とある探偵事務所の看板だった。

藁をも掴む気持ちで相談すると、即座に捜査兼警護役の調査員が二人抜擢される。

それが町田平蔵と水倉七瀬であった。
二人とも二十代半ばで、依頼者と歳が近いこともあっての選考だ。
荒事になる可能性も捨てきれない。
ともかく二人は張り込み初日にて、幸運にも犯人らしき男と邂逅した。
「どうする？　行くか？　行くか？」
七瀬が鼻息を荒くしながら前傾姿勢になる。
それを平蔵が右腕を遮断機代わりにして制した。
「もう少し待て。まだ何もしていない」
二人は焦れったさを抑えながら、怪しい男の挙動を見守る。するとついに男はカッターを取り出して、ゴミ捨て場を漁りだした。
依頼者がゴミを捨てるところを遠くから監視していたのか、最初から目星をつけていたように一つのゴミ袋に狙いを定めて開封した。
そして手早くいくつかのゴミ（個人情報が特定できそうなものや、プライベートに近い器具等）を取り出した。
「よっしゃ行くぜ！」
七瀬が我先にと飛び出す。

指の骨を鳴らしながら、怪しい男に近づいていく。
「おうおうおう。誰に断ってそんなもんに手を出してんだ兄ちゃん」
男は七瀬を一瞬振り返るや否や、すぐさまその場から走り去った。
「このやろっ！　この韋駄天の七瀬様から逃げきれると思ってんのか！」
平蔵も一歩遅れて二人を追う。
道は狭く入り組んでいた。
三人の行き先には袋小路が見える。
息を切らした様子もなく七瀬が笑う。
「はっはっはー。年貢の納め時だなオイ！」
しかしストーカーの容疑者も身軽なもので、行き止まりにあった二メートルを優に超える壁をするすると登っていき、やがて向こう側へと着地した。
「しゃらくせえっ！」
七瀬はそれ以上の身のこなしで壁によじ登った。その背中に平蔵は早口で捲し立てる。
「俺は別ルートから追う！　挟み撃ちにするぞ！」
「了解！」

平蔵を振り返らずサムズアップしながら向こう側へと飛び降りた七瀬。
すぐさま駆けていく足音が平蔵の耳に届く。
平蔵は大声で怒鳴った。
「無茶するなよ！」
その声はきちんと七瀬に届いていた。
平蔵はこの地区一帯の複雑な経路を全て前以て記憶している。
七瀬はそんな平蔵を信頼しているからこそ背中を任せることができるのだ。
ひたすらに走りながらストーカーの背中を追う。やがて男は息を切らし、大通りに出る前にその足を止めた。そして七瀬の方へと向き直る。
七瀬は汗一つかいていなかった。
「神妙にお縄につくつもりになったか？　あぁん？」
詰め寄る七瀬に対し、ストーカーは先程使用していたカッターナイフを向けた。
先ほど一緒にいた男は追ってきていない。
女一人であれば、これで十分怯ませられるだろう。
ストーカーはそう目論んだのだろう。
しかし、その計略が間違いであったことをすぐに悟った。

刃物を眼前に突き付けられても七瀬の力強い眼光には微かな恐れも滲んでいない。
むしろその鼻っ柱の強さが、より前面に押し出されたからだ。
「おいおい。そんなチャチなカッターが秘密兵器か？　せめて拳銃くらい出してくるかと思ったぜ」
七瀬の言葉は単なる挑発ではなかった。
智力の平蔵。そして武力の七瀬。
二人はそれぞれを役割分担する相棒として数年コンビを組んでいる。
七瀬は武芸百般に優れていた。
空手や柔道などはもとより、剣道や銃剣術。さらには海外の軍隊格闘技まで修めている格闘オタクである。
ぱっと見は華奢で気の強そうな美人の七瀬だが、迂闊に身体に手を伸ばせば拳が急所を突くか、もしくは合気道で投げ飛ばされる。
何故彼女がそこまで武芸に身を置いたかというと、ただの趣味としかいえない。
女の子がピアノスクールや学習塾に通うように、彼女は幼き頃から武術に興味が絶えなかったのだ。
やがて学校の不良同士の抗争にも好んで顔を出すようになった。

高校を卒業する頃には、様々な流派の武術を使いこなす実戦派の達人ができ上がっていた。

それが何故、探偵事務所に身を置くようになったのかは、高校時代に同級生だった町田平蔵の存在が大きい。

ともかく彼女はカッターナイフに対して半身を晒し構えた。

ストーカーは素人ながらも、七瀬が纏(まと)う洗練された落ち着きや隙のない構えに困惑した。カッターナイフを手に一歩も動けない。

日本刀を持っていても勝てない。瞬時に彼の本能がそう理解した。

「く、くそっ」

ストーカーはカッターナイフを投げ捨てると、再び身を翻(ひるがえ)して逃げた。

「あ、こら待てっ！」

慌てて七瀬も後を追う。

しかしその必要もなかった。

大通りに出て左右を見渡しているストーカーに、回り込んできた平蔵が真横からタックルを喰らわせた。

平蔵は自分の身体ごと地面に押し倒したストーカーに怒鳴りつける。

「観念するんだな！」
二人は道路の隅に倒れ込む。一瞬の出来事でなにが起こったか理解できないストーカーは、七瀬も到着すると観念したように脱力した。

◆◆◆◆

平蔵と七瀬はストーカー男を現行犯で警察に突き出すと、その足で探偵事務所に戻って結果を報告した。
報告書を記すのは専ら平蔵の仕事で、七瀬は隣の席で残念そうにため息を吐きながら背中を安物の椅子に預けた。
「あーあ。結局あたしはなんの活躍もできずか」
平蔵はペンを走らせながら呆れるように言う。
「刃物を持ってる犯罪者相手に何事もなく解決できたんだから百点満点だろうが」
「でも、ああいう荒事のためにあたしがいるわけじゃん？」
「だったらせめて警棒くらい使え。お前、素手でやろうとしてただろ」
「あんな手元ブルブル震えてるような奴に得物なんているかよ」

自信満々に笑みを浮かべる。
平蔵は七瀬の腕前を信頼している。彼女は自身の武芸に過剰な自信を持つような半人前ではない。彼女がそう判断したのならきっとそうだったのだろう。
それでもやはり心配はしてしまう。
何故なら……。

◆◆◆◆

定時を迎えて二人は事務所を後にする。
「お疲れ様でした」
「お疲れ様でしたー」
七瀬は意気揚々と陽が暮れた街を歩く。
平蔵も肩に並べて帰途についた。
二人の帰る方向は全く一緒だ。
「今日なに食べる？　あたし、肉が食べたいな。カツ丼とかどう？」
一緒に帰るどころか夕食の相談までする。

時折七瀬の方から腕を組んで身を寄せ合って歩いたりもした。
今朝の仕事の時とは違い、二人の笑顔は純粋に楽しそうだ。
そう。二人は交際していた。
しかも意外なことに七瀬の方から告白していたりもする。
それは高校卒業後に定職に就かず、フラフラしていた七瀬をスカウトした半年後の出来事だった。
七瀬は血の気の多い性格とは裏腹にどこか大人びた美人で、学生の頃から男の目を引いた。
しかし浮いた話も聞かなかったので恋愛には興味がないのだと平蔵は勝手に憶測していた。
とある休日に七瀬から呼び出されて食事をした後、珍しく緊張した面持ちで交際を持ち掛けられた瞬間は今も平蔵の記憶に鮮明に残っている。
どんな厳(いか)めしい男とも真っ向から睨み合う七瀬が、どこか照れ臭そうに視線を逸らしながら『付き合って欲しい』と夕暮れの川沿いで呟いたのだ。
『彼女とかいるんなら諦めるけどさ……』
そんな自信無さげな七瀬の声色は平蔵にとって、この時が最初で最後だった。

『……なんで俺なんだ？』
思わずそんなことを尋ねていた。
別に男としての自分に自信がないわけではない。
しかし存在感からして華々しい七瀬と比べると、どうしても自分は地味に思えた。
『なんでって……』
七瀬は日を逸らしたまま子供のように唇を尖らせる。
『……そりゃあ……惚れちまったんだから仕方ねーだろ』
七瀬は開き直るように平蔵に告げた。
『つうか、あたしがお前を好きになっちゃいけねーのかよ』
『別にそういうわけじゃない。ビックリしたんだよ。てっきり七瀬が好きになるような異性なんて、自分より強いとか筋骨隆々な男かと思ってたから』
平蔵の言葉に七瀬は頬を掻く。
『あー……昔はそうだったかも。でも今はなんつうか……自分に足りない部分を持ってる奴に惹かれるっつうか』
『それが俺だと？』
『実際そうじゃん。猪突猛進に突っ込むあたしを平蔵がきちんと手綱を握ってくれて

いる。だから仕事もうまくいってる。気づいたら……ただの業務上のパートナー以上の存在になっちまってた』

その感覚は平蔵もわかる。

自分にはない能力を持つ七瀬に少しずつ惹かれつつあった。

そういった経緯を経て二人は交際を始めたが、これが思った以上にウマが合った。

パズルのピースが嵌るように、お互いの魅力を染み込ませ合っている。

食事を終えると二人で肩を並べて食器洗いをした。

付き合ってみると七瀬の暮らしぶりは意外にも丁寧で、家事も得意だった。

「なぁ？　もしあたしにストーカーがいたらどうする？」

その可能性は捨てきれないなと平蔵は客観的に考えた。

「そうだなぁ。お前は見てくれは悪くないからな」

「中身に問題があるかのように言うなよ」

軽く肩をぶつけてくる。まさに恋人同士がやるような甘いスキンシップ。

七瀬なら自分で解決できるだろ。そんな一言を呑み込んで、平蔵は言う。

「俺が守るよ。なにがあってもな」

七瀬は耳まで赤くした。

「……へへ」
無邪気にそう笑うと、上機嫌に身体を揺らして鼻歌を歌う。

◆◆◆◆

夜も更けると二人は一つのベッドに同衾する。
仰向けに寝る七瀬からバスタオルを優しく剥ぎ取り、その裸体を露わにする。
その度に平蔵は欲情以上の感動を覚える。
きめ細かな白い肌。しなやかに伸びた四肢に、それでいて肉付きのいい腰回りと太もも。乳房は乳児の頭ほどはありそうなくらいにたおやかだ。
その全てが滑らかな手触り且つ、弾むような瑞々しさを有している。
何百回と抱いても飽きることのない宝石のような肉体。
平蔵は今夜もその肢体に溺れていく。
平蔵が二度射精を迎えたところで、いつ『アレ』を手渡すか迷う。
給料三ヶ月分とまではいかないが、奮発して買った婚約指輪。
七瀬は平蔵の腕枕ですっかり寝息を立てていた。その度に長い睫毛が揺れる。この

可憐な顔立ち。そして細い手足でよく大立ち回りができるなと改めて感心する。その身体つきは格闘家ではなくモデルのように繊細だ。

このような関係性になって一年経とうとしているが、二人ともまだ二十五歳。

（まだ早いかな……いやでも……）

平蔵は悶々と考える。その葛藤による緊張が伝わったのか、七瀬が薄っすらと目を開けた。

「どした？　明日の仕事のこと考えて眠れないのか？　大きい仕事だもんな」

「そんなんじゃない」

七瀬の方から素早く顔を近づけてキスをしてくる。

平蔵の唇に、七瀬のぷるんとした唇の感触が押し付けられた。

「だよな。平蔵はいつも冷静だから。そんじゃおやすみ」

半分寝ぼけていたのか、今度こそ七瀬は眠りに落ちた。

それを見届けながら平蔵は考える。

（そうだな。明日から大きな仕事だ。それが終わってからプロポーズというのも区切りがいい）

平蔵も瞼を閉じながら、思考回路を仕事モードへと切り替える。

（それにしても豪華客船への潜入任務とはな……珍しい仕事だ）

恋人の安心しきった寝顔を前に、平蔵もうつらうつらと寝入っていった。

第一話「接待」

横浜の港に浮かぶ巨大な客船があった。
グランド・プリンセス号。
普段は船旅に使われるが、年に何度か遊覧船としても使用される。
煌びやかな名前に一切負けていない豪華絢爛な外装。そしてライトアップされた装飾。
夜の海という宇宙で輝く恒星のような巨大クルーズ船。
その傍らでその船体を見上げる男女二人。
「でっけぇなオイ！」
七瀬は感心したように両腕を広げた。
「あたしら庶民には一生関係がないような船だな」
「……おい。あまりはしゃいで目立つなよ」
「わかってるっつうの。しかし仕事とはいえ、こんなのに乗れるなんて役得だな」
七瀬は無邪気に笑っている。

そんな奔放な彼女に平蔵は感心すら覚える。平蔵はその巨大建造物を前にして少し気後れしていた。

（妙な威圧感だ……まるで海に浮かぶ摩天楼だな）

乗船するのは魑魅魍魎（ちみもうりょう）などではない。自分達と同じ人間である。

しかしある観点から見れば、とても同じ人種とは思えないような客層だ。

この船に客として乗れるのは超がつくほどのＶＩＰのみ。この世の愉悦や快楽を堪能しきってきた者達。

いわゆる普通の人生に飽きた人間が集まる社交場。

そんな場所に仄暗（ほのぐら）い噂が立つようになった。

曰（いわ）く、違法ドラッグの密売所になっているのではないか。

曰く、未成年を含めた乱交パーティーの舞台になっているのではないか。

しかし客は政治家や財界人が多くを占め、正規の新聞社はおろか警察すら足を踏み込めずにいた。

そんな場所に平蔵と七瀬が潜入できたのは奇跡に近い。

当然給仕係やコンパニオンも厳重な身元調査の上に用意されるのだが、たまたま人員に穴が空いたとかで裏ルートからねじ込んでもらったのだ。

依頼者は二人には知らされていない。
ジャーナリストか、それとも警察関係か。
探偵事務所の所長にも、ガードが堅そうなら無理をしなくてもいいと忠告を受けている。
平蔵は、この大仕事から微かな危険を嗅ぎ取っていた。
隣で平然としている七瀬に囁きかける。
「気を引き締めろよ」
「了解。さてさて。鬼が出るが蛇が出るか」

◆◆◆◆

二人は乗船すると別行動へと移る。
平蔵は男性ばかりの給仕係のグループに、七瀬は女性ばかりのコンパニオンのグループに所属する。
平蔵の方は特筆すべきことは何もなかった。着替えを終えるとリーダーらしき人物から、仕事に関する諸説明を受けただけだった。

しかし七瀬の方は最初からやや、きな臭い話を聞くことになる。
コンパニオンのグループは若く、そして綺麗な女性ばかりだった。まるでグラビアアイドルかレースクイーンだけを集めたかのように容姿のレベルが高い。
この中に自分が交じっているということは、見た目が審査に通ったということで七瀬は少し面映ゆい気持ちになった。
しかしそんな浮かれた気分もすぐに打ち消される。
控え室で渡された衣装がエナメル生地の真っ赤なバニースーツだったのだ。脚部は網タイツで、ハイヒールの靴は歩き難い。そんな衣装だが七瀬には、どうしても釈然としない点が一つだけあった。
（この股間のところのチャックはなんだ？　トイレ用か？）
よくわからないままその衣装を着ようとすると、隣の女性が話し掛けてくる。彼女もまた自分と同じくらい若く、そして美しかった。
「あら、駄目よ。下着の上からバニースーツ着ちゃ」
「え？　ノーパンノーブラ？」
その女性はクスクスと笑う。
「貴女、何も知らないの？」

周りを見渡してみると、確かに皆が一旦全裸となってからバニースーツを召している。

「お客様に求められた時、すぐにお相手ができないと興醒めでしょ？」

なるほど、と七瀬はすぐに理解した。

この船の上では風俗紛いの行為が認められているのだ。

（あたしに迂闊に手を出してきたら噛みついてやるからな）

所長からは無理をする必要はないと聞いている。身体を売ってまで職務を遂行するつもりはない。

犬歯を見せて嗤う七瀬の横で、隣の女性は続ける。

「それにしても夢があるわよね。お客様全員が超お金持ちで、気に入られればそのまま愛人にだってなれるんだから。あ、これってただの噂じゃないのよ？　あたしの友達がこの前の航海でマンション買ってもらったんだって」

今更彼氏がいるとは言いづらく、曖昧な笑みを浮かべる七瀬の横で女性は独り言のように言葉を続ける。

「でも、たまに悪い噂も聞くけどね」

「悪い噂って？」

「なんだか睡眠薬みたいなの入れられて強引に犯されたって噂。ここじゃそんな話は刑事事件にもならないんだってさ。警察に駆け込んでも相手にしてもらえないらしいから、貴女も気を付けた方がいいわよ」
「ありがとう」
「それにしても貴女スタイルいいわね。特にその爆乳、どんな詰め物してるの？」
「自前だよ」
色々とタメになる話が聞けたと七瀬は立ち上がる。
下着無しで着るバニースーツは、空調が効いているとはいえスースーした。
（薬ねぇ……本当だったらそれだけでスキャンダルだけど）
後頭部を掻きながら眉間に皺を寄せた。
（さてさて。セクハラを避けつつ、どこまで上手くやれるかなっと）

◆◆◆◆

情報収集を終えて案内されるがままにラウンジへと案内される。そこで七瀬は言葉を失う。まるでお城のロビーを思わせる豪華絢爛さ。

吊り下がったシャンデリアはキラキラと眩く、床に敷き詰められた絨毯は上品な赤で染められていた。大理石の壁にはいかにもな名画が並べられ、点在するソファはきっと百万円以上するものだろうと七瀬は推測した。

サッカーができそうな程のスペースにはビリヤード台が散見され、バカラやポーカー等で遊べそうな場所もある。

給仕係の姿は見えない。基本的に彼らは裏方なのだろう。

「……金もあるところにはあるもんだな」

集合させられるとコンパニオン班のリーダーから細かい業務説明を受ける。

基本的には客に飲み物を提供するのが仕事。

食事はバイキング形式になっており、こちらからなにかをする必要はない。

（わりかし自由に動けそうだな。それでもやっぱり客から話を聞き出すのが一番か？でもセクハラされんのは嫌だなぁ……尻を触られたら反射的に手が出ちまいそうだ。何より平蔵に悪いしなぁ）

そんなことを考えていると、奥の通路からテーブルに料理を準備していく給仕係達が顔を出した。

立食式パーティーのテーブルの上には、見たこともないような料理が置かれていく。

その中に平蔵の顔を確認する。
お互い視線こそ交えないものの、視界の端で互いの位置はチェックする。その上でハンドサインで意思疎通を図る。
〈なんか目ぼしい情報は？〉
〈今のところは特に何も。ただ売春やレイプの噂は聞いた〉
〈七瀬も気をつけろよ〉
〈あたしが黙ってヤラれるとでも思ってんの？〉
〈あんまり暴れすぎるなよって言ってんだよ〉
〈それはあんまり保証できないなぁ。てかどうする？　あたしが金持ちのジジイにセクハラされたら〉
〈……仕事に私情は挟まない〉
〈んなこと言っちゃってー。結構ヤキモチ妬きなくせに〉
〈いいから仕事続けるぞ〉
〈はいはい。了解〉
ハンドサインを打ち切る。
そうこうしている間に客が乗船してきたようだ。責任者がその旨を伝えると、コン

パニオン達の間に緊張感が走った。客に気に入られたいという欲望が船内に渦巻く。
その中で七瀬だけが平常心を保っている。
クラシック音楽が流れる下を、タキシード等を着た男達が悠々と歩く。
それを迎える美しいバニーガール達。
まるでお城で開かれた舞踏会のようだ。
年齢層は中年から熟年が一番多い。若くても三十歳辺りだと七瀬は判断する。そして、その顔ぶれに平蔵は驚愕した。
（本当に政財界の大物ばかりじゃないか。この中で犯罪が行われる？　今のところ、ただの社交場というだけで、そんな雰囲気は感じ取れないが……）
平蔵は給仕係としての仕事を終え、ラウンジを退散した。
その際、七瀬に一瞬目配せをする。
七瀬もそれに応えるよう小さく頷いた。
（さてさて。とりあえずはコンパニオンとして真面目に仕事をしましょうかね）
しかし、こういう仕事は未経験だったので、一体どういう風に動けばよいかがわからず、ラウンジを右往左往してしまう。
同僚の多くは自ら客に声を掛けたり、積極的な者はソファの隣席に腰掛けて身体を

密着させたりしている。
（コスプレしてる高級クラブかなにかにしか見えねーな）
七瀬は大きく深呼吸すると、覚悟を決める。
（とにかく誰でもいいから客に飲み物をすすめりゃいいんだろ？）
心の中で啖呵を切って周りを見渡した。
すると彼女に声が掛かる。
「お嬢さん。一つ頂いてもよろしいかな」
七瀬が振り返ると、上品そうな紳士がいた。
歳は五十くらいだろうか。上背があり肩幅もがっちりとしている。その割には表情と声は優しそうだ。白髪は染めているのか一本も見えない。
「はい。なににいたしましょう」
七瀬は手にしていたトレイをゆっくりと男に差し出した。その上にはソフトドリンクも含めて酒類も載っている。
「これを頂こうかな」
男が選んだのはオレンジジュースだった。
そしてグラスを手に取ると、七瀬の顔を見て言う。

「良かったらお嬢さん。私の話し相手になってくれないかね？　こういう場所は不慣れで知人も少ないんだ」

七瀬は内心でほくそ笑んだ。

（よっしゃ。スケベオヤジが向こうから勝手に釣り上がってくれたぜ。紳士ヅラしてるが谷間への視線は隠しきれてない。あたしの爆乳が珍しく役に立ったな。いつも運動するのに邪魔だけど、今日だけは褒めてやる。あたしのおっぱい）

実際、バニースーツ姿の七瀬は明らかに他の女性よりも目立っていた。特にその、はちきれんばかりの豊満な谷間が、男の視線を絶大な引力で引き寄せていたのだ。

「はい。私でよろしければ是非」

「では、そちらのソファに座ろうか」

（まずはこのオヤジから話を聞き出そう。でもこういう場に慣れてないって言ってたな。深い情報は得られないかもしれないが……。まぁいいや。時間はたっぷりある）

空いてるソファを二人でたっぷりと余裕を持って独占する。離れて座るのもよろしくないので、軽く肩が触れる程度に座る。

（悪いな平蔵。これくらいのボディタッチは許してくれよ）

妙に甘ったるいコロンの匂いが鼻をつく。

「君もなにか飲むかね？」
「いえ。私は結構です」
先程更衣室で同僚から聞いた話を思い出す。もしここが犯罪の温床になっているのであれば、なにを入れられているのかわからない。
「申し遅れたね。私の名前は神田という」
そこで七瀬はピンと来た。
（なんか見覚えがある顔と思ったら、神田重工の社長じゃねーか。こりゃまた大物が釣れたな。でもそうなるとこういう場所に不慣れっていうのは嘘なんじゃ？　あたしを安心させるための方便か？）
「良かったら君の名前を教えてくれないか？」
「私は『七海』といいます」
当然偽名を使って潜入している。
「七海さんか。見た目だけでなく名前も非常に美しい」
「いえ。そんな……」
謙虚な演技を見せる七瀬。その内心では喉を掻きむしっていた。
（うおおお！　あたしはこんなキャラじゃねーんだ！　面倒くせえ!!!）

胸中では悶え苦しみながらも、愛想のいい笑顔を崩さない。
「少し君に興味が湧いてきたな。色々尋ねても？」
「ええ、勿論です」
「普段からこういう仕事を？」
「いえ。普段は商社に勤務しております」
「なるほど。お小遣い稼ぎというわけだ」
神田は周囲をぐるりと見渡した。
「七海さんはこういう世界をどう思うかね？」
七瀬は一呼吸置いて答えた。
「……素敵だと思います」
（んなわけねーだろ。どこもかしこもキラキラしすぎて落ち着かねーわ。こちとら休日は平蔵と百均巡りが日課だっつうの）
神田は物憂げな笑みを浮かべる。
「そうか。私にとっては少々騒々しくてね。良ければ、もっと落ち着いて話せる個室があるのだけれどどうかな？」
（来た！）

二人きりになれば、より深い情報を得るにはまたとない好機。
しかし身体を売るような気は更々ない。
（情報を聞き出すだけ聞き出して何とか逃げるか。別に監禁されるわけでもねーし。最悪このオヤジを気絶させて寝かせておけばいいだろ。そんで起きたら『急にご気分が優れなくなったようなので』とか何とか言っておこう。よし決まり）
大雑把に段取りを決めると七瀬は甲斐甲斐しく頷く。
「それでは、こちらにどうぞ」
神田は若干気色ばむと、席を立って七瀬に手を差し出した。
七瀬はその手を握り、素直にエスコートされる。
歩きながら七瀬は少しだけ胸が痛んだ。
（平蔵以外の男の手なんて仕事でもなきゃ絶対握らねーな……なんか気色悪いぜ）
そう思いながら、ラウンジから抜け出して広い廊下に出る。
その様子を食事の取り換えでラウンジに顔を出していた平蔵がたまたま見かけた。
（早速誰かを釣ったか。用心しろよ七瀬）
そう警告を送りながらも、胸が微かに痛むのを感じた。
恋人が他の男と手を繋いで歩いている。それだけでも非常に不快を感じた。

（……これくらいの展開、仕事前に覚悟してただろう？　別にこれから七瀬が不貞を働くわけでもないんだから）

自身の胸に渦巻く私情を払いのけると、平蔵もまた仕事に戻っていった。

◆◆◆◆

廊下もまるで一流ホテルのように広く豪華だった。

「私達ゲスト一人一人に専用の個室が与えられているんだ」

「はぁ……」

最早（もはや）七瀬は感嘆を通り越して呆れの声を漏らした。

「私の部屋は……ここだね」

神田がポケットからカードキーを取り出して、重厚な扉を開ける。その際に自分から入らずに七瀬から入るようにエスコートする。

「ありがとうございます」

七瀬は会釈しながら中に入った。

内装は予想通りではあった。

スウィートルームのような広々とした空間。天蓋つきのベッド。
「わぁ、広い！」
そこで無知なコンパニオンを装う演技をしてみせる。
「特に面白みのない部屋だが、君と二人で語り合うには及第点だな」
神田はそう言うと、内線を使ってルームサービスを頼んだ。
それを見届けると七瀬は心の中で舌打ちした。
（まずいな。なにか仕込まれたものを持ってこられちゃ、たまんねえぞ）
「こちらに座らないか？」
神田はキングサイズのベッドの縁に座った。その隣へと誘うとは、もう神田も下心を隠そうとはしていない。七瀬を女として狙っている。
「失礼します」
七瀬も、ここぞとばかりに妖艶に振る舞う。
神田の紳士然としていた視線が、肉欲を伴ったものへと変化する。七瀬のグラマラスな肢体を舐めるようにしげしげと見つめた。
七瀬はそれを弾き返すように堂々と脚を組んで座る。
いざとなれば自分の武芸でなんとでもできるという自信があるからだ。

神田は明らかに素人。そして人目もない。物理的に『落とす』ことは容易だ。
それでも安心はできない。ここは、あくまでもアウェイなのだ。
やがて扉がノックされ、他のコンパニオンがシャンパンを持ってきた。それが七瀬達の前に差し出される。
（このコンパニオンが向こうの手の内の者でなにか異物を混入していたら？）
七瀬のその懸念をよそに、神田はまず七瀬にどちらのグラスがいいかを選ばせた。
そして神田は残ったグラスを手に取り、コンパニオンが退室するとスマートに乾杯を済ませて一口飲んでみせた。
（先にあたしにグラスを選ばせて、飲むのは自分から？　ということはこのグラスとシャンパンに小細工はないか）
七瀬は胸を撫で下ろすとシャンパンに口をつけた。変な味はしない。彼女は酒豪なのでこの程度の量なら一気飲みしても問題無いだろう。
「それじゃあ早速もっと君のことを聞かせてもらおうか」
そう言いながら神田は七瀬の太ももを撫でた。
七瀬のこめかみに青筋が浮かんだが、彼女は神田に気づかれないよう深呼吸をして怒りを逃がした。

（結局酒に酔わせてどうにかしたいだけのエロジジイか？）
七瀬は普段の調子とは真逆のかわい子ぶった仕草と口調を演じる。
「私も神田さんのこと、もっとよく知りたいです」
「ははは。なんでも聞いてごらん」
「私こんな船は初めてで緊張しちゃって……神田さんは何度か乗られてるんですか？」
「まだ数回といったところだね」
（数回、か……もしここが犯罪の温床になってるなら、関わっている可能性はあるな）
七瀬は慎重に言葉を選んで情報を探っていく。
「他にも有名な方が乗ってるんですよね？」
「そうだね。私なんかが足元にも及ばないようなＶＩＰも乗っているね。失礼がないように私も毎回緊張しているよ。だからこうして個室に閉じこもってしまうのさ。ははは」
（女の子を連れ込みたいだけだろうが）
心の中で突っ込む。
不意に神田の手が七瀬の肩を抱いてその身を引き寄せた。

今すぐにでも神田を絞め落としたい気持ちを七瀬は必死に堪える。
神田の指がバニースーツと肌の間を掻い潜って、七瀬の乳首をそろりと触った。
ビクッと七瀬の肩が震えた。耳も赤くなる。
七瀬はいよいよ堪忍袋の緒が切れそうになるがそれでも奥歯を噛み締めて耐える。
乳首を触られながらも背筋を伸ばし、引きつった笑みを浮かべながら何とか情報を集めようとする。
「きっと私の知らないような楽しいことが沢山あるんだろうなって期待してたんです」
「そりゃあ勿論。期待外れにはさせないよ」
「例えばどんなことがあるんですか？」
ようやく核心を突いた質問に至る。
「ふふ。好奇心は猫を殺すよ。それでも知りたいのかな？　子猫ちゃん」
（うるせー、さっさと喋れ）
神田が顔を寄せてくる。明らかに性行為の雰囲気作りに努めていた。
七瀬は顔を背けてそれを避けようとする。
（思ったより早く手を出してきやがったな。仕方ねえ。まだ何も聞き出せてないけど、

こいつにはお眠りになってもらうか）

当て身による気絶を試みようとする。

しかし立ち眩みのような無気力感を覚えて、七瀬は動くことができなかった。

（っ⁉　なんだこれ⁉）

七瀬は瞬時に神田を撥ねのけようとするがそれも叶わない。

いつの間にか全身の筋肉が弛緩していた。

しかし意識は鮮明で、どこか心地よい酩酊感すらある。

身体の芯が熱く汗ばみ、フワフワと雲のベッドに寝そべっているかのような浮遊感。

明らかに素面ではない。ただのアルコールとも違う。

合法か違法かはわからないが、何かしらのドラッグを使われている。

（馬鹿なっ！　一体どこで？）

七瀬をそっと仰向けに寝かせながら神田は穏やかな微笑みを浮かべる。

「心配は要らないよ。ただ気持ち良くなるだけだからね」

「これ……って……」

「身体に害はないよ。安心しなさい」

神田は用心深いのか必要以上のことを言わない。

七瀬は視線だけで周りを見渡した。しかし特に目新しいモノは見つからない。
そんな中で神田が確認するように首を捻って視線を飛ばした。
視線を追うと、その先には加湿器があった。
（無臭で霧状のなにかを散布したのか⁉　でもそれならなんで神田は動いていられる？）
わからないことばかりだが、一つはっきりしているのは自分が罠に嵌ったということだけだ。
しかし悔しさを覚える余裕もない。
何しろ七瀬は既に全身が汗ばむ程に熱くなっている。その熱気と高揚感は性的絶頂を目前に控えたそれである。
意識をはっきり保とうとしなければ、あっという間に快楽の坩堝に持っていかれそうな程の甘い誘惑。
気が付けば七瀬は熱病に冒されたように息を切らして涎を垂らしていた。
眼光には抵抗はおろか、なんのためにここにいるのかさえ曖昧だ。
彼女の身体が欲しているものはただ一つ。男の身体だけ。
「ぼおっとするだろう？　そのまま蕩けていけばいい」

神田はそう言いながら服を脱いでいき、そして全裸となった。
固太りの体型だが、七瀬の視線はその出っ張った腹よりも下に向けられる。
それこそ中年には似つかわしくない激しい勃起。
長さはそれほどでもないが太く、そして力強そうな男根。
ビキビキと音を鳴らしそうな陰茎は血管も太く浮き上がっている。
意識とは無関係に七瀬はその男性器を食い入るように見つめた。
ゴクリと生唾を呑み込む。
（なんで……あたし、こんな奴のちんこ……くそ……なんで目が離せねえ……）
細胞が余すことなく発情している自分に困惑する。
そんな彼女を慰めるように神田は言う。
「君の雌の部分が火照って仕方ないだろう？　誰でもそうなるんだ。気にすることはない。そして、じきに今までのセックスが全ておままごとのように感じさせてやろう」
（馬鹿言ってんじゃねえクソオヤジ！）
悪態をつけるのも心の中だけ。
ガチガチに硬くなった男根が近づいてくる度に、七瀬の心臓は心拍数を上げる。心の中の期待が大きく膨らんでいるという事実から目を背けられない。

（欲しがってる？　あたしが？　平蔵以外のちんこを？）
拳を握ろうと思ってもうまくいかない。
舌を噛んで気付けにしようとしても、それすら叶わない。
「まずはその麗しい唇から頂くとするか」
神田が七瀬に覆い被さる。
そのグロスを塗られた艶（あで）やかな唇を吸うために。
「ふぅっ、ふぅっ！」
七瀬は身を捩（よじ）ろうとするが身体が言うことを聞かない。
彼女の意識はただただ肉欲だけに支配されていた。
キスをしたい。
男に唇を奪われたい。
力強く抱きしめられて、思いっきり抱かれたい。
自意識とは無関係に頭の中でそんな情欲が風船のように膨れ上がっていく。
七瀬はその欲望の膨張が、何らかの化学物質で作られたものだと確信している。
「さて。君の唇はどんな味がするのかな」
二人の鼻息が混じり合う距離。

もう逃げられない。
そう覚悟した瞬間、頭の片隅に平蔵の顔が映り込む。
七瀬は奥歯を噛み締めて今一度気力を振り絞った。
（舐めんじゃ……ねぇぇぇっ！）
気合だけで首を背けて一先ずキスを回避した。
神田はその表情に驚きの色を示す。
「ほう。随分と気丈夫なお嬢さんだ」
七瀬の回避行動は風前の灯（ともしび）であり、強引にキスをしようと思えばそれは容易（たやす）いはずだった。
しかし神田はその抵抗をむしろ愉しむように身を引いた。
「その気骨がどこまで続くか。見届けるのもまた一興」
そう言って身を起こすと、七瀬のすらりと長い両脚を左右に広げた。
そして股間部のジッパーを下ろす。
七瀬は自分が下着を着用していないことを思い出した。
こんな昂（たかぶ）った状態で陰部を触られてはどうなるかわかったものではない。
しかしそんな心配もご無用だとばかりに神田の口端が持ち上がる。

「心意気だけは威勢がいいが、身体はもうトロトロだよ？」
なにを言っているんだと七瀬は文句の一つも言いたくなったが、次の瞬間に神田の言葉の意味がわかった。
股間部のジッパーを開けた瞬間、どろりと愛液が零れ落ちたのだ。
薬の影響か七瀬の神経は極限まで研ぎ澄まされていた。
内腿を滴る愛液は勿論のこと、パックリと開いた陰唇まで手に取るようにわかる。
ビンビンに勃起した乳首と陰核は風に触れるだけで頭に電流が昇りそうだ。
神田はジッパーを開けて、さらに濡れそぼった陰唇を両手の親指で外に開いた。
ヒクつく膣壁を奥の方まで見通しながら感嘆の声を上げる。
「すばらしい。まるで処女のように汚れ一つない見事な赤貝だ」
視姦され、言葉でも羞恥を煽られ七瀬はそれだけで背中が仰け反った。
（あたし……こんな奴にま○こ見られて……感じちゃってる……？）
七瀬の息遣いは益々浅くなり、額からは大粒の汗がこめかみの方へ流れていく。
しかしそれは不安や不快感ではなく、あくまで高揚感によるものだった。
神田は七瀬の秘められた肉壁を覗き込むように指で陰唇をさらに開く。
そこかしこで愛液が分泌され泡立ち、雄の挿入欲を煽るような淫靡な膣は、うねる

ようにヒクヒクと蠢(うごめ)いている。
神田は思わず生唾を呑み込んだ。
見た目も併せてこんな上物は久しぶりだ。
今すぐにでも挿入して滅茶苦茶に犯したい欲求が胸をせり上がった。
しかし彼は何とかその欲を抑えて、最初からステーキにかぶりつくのではなくゆっくりコース料理を楽しもうとする。
上半身を起こして膝立ちになり、左手で七瀬の右膝を持つと、右手を陰部に添えた。
「まずはゆっくりと君の中を観察させてもらうよ」
口を開いた陰唇に、中指と薬指を挿入していく。
「あっ……」
にゅるにゅると滑るように二本の指は呑み込まれていく。
「……んんっ！」
七瀬はそれだけで背中を浮かせて感じた。
その愛らしい反応を愉しむように神田は微笑む。
「とても熱くなっているよ」
「やめ……て」

その程度の言葉責めでも七瀬の頭に快感を生む羞恥が茹った。
「それじゃあ動かしてみようか」
七瀬のクリトリスはもうパンパンで、破裂しそうな程に隆起していた。
(やばい……こんな状態で手マンされたら……飛ぶ……)
何とか腰を捻って逃げようとするが相変わらず全身は弛緩しきったままだった。
神田の手首が前後に動く。
同時にぐちゅぐちゅと卑猥な音がスウィートルームいっぱいに広がった。
「あっ……あっ……んんっ……あぁっ……!」
七瀬は反射的に下唇を噛むが、それでも甘い吐息が漏れる。
「もっと可愛い声を聞かせてごらん」
神田の手首が徐々に前後運動を加速していく。
くちゅくちゅくちゅくちゅ。
挿入された指は、あっという間に真っ白に泡立った。
(なんだこれ……たかが指で気持ち良すぎんだろ……ざけんな……)
そう思いながらも噛み締めた唇が段々と緩んでいく。
「あっ、あっ……やっあぁ……はっん……」

（やばい……気持ちいい顔しちゃってる……こんな顔、平蔵以外に見せるなんて……でも隠そうにも両手が動かせねぇ……）

「君の気持ちいいところを探そうか」

神田は膣内で軽く指を曲げて、指の腹で肉壁の天井を優しく擦る。

「ここかな？」

「あぁっ！」

「それともここ？」

「やっ、ん♡」

一際甲高い声を上げてしまった七瀬は眉をひそめた。

（しまった……バレた……）

神田は満足そうに持っていた右膝をさらにぐいっと押し上げた。

「ここだね？　じゃあいくよ？」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ。

泡立った愛液による摩擦で、弱点を執拗に擦り上げる。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

七瀬は全身を強張らせて、少しでも嬌声が漏れないようにする。しかしどうしても

抗えない弛緩。

（くっそ……あたし、こんな声出して……平蔵……わりぃ……）

心の中で恋人に謝罪するが、さらなる快楽が七瀬に襲い掛かる。

頭の奥に溜まった電流が、背中の芯を通って下腹部に広がっていく。

なにかが爆ぜそうな、そして漏れそうで不思議な感覚。

（……あたし、こんなの……知らない……嘘、なにこれ……）

「あっあっあっ、いっいぃっ♡　いや、なにか、出るっ♡」

緩みきった筋肉でも背中だけが仰け反った。

瞬間、陰部から勢い良く噴出する透明な液体。神田が指を抜くとそれはビュー、ビュー、と放物線を描いてシーツを濡らした。

「あーっ♡　あっあっあっ、んーーーっ♡」

七瀬に抵抗の余地は一切なかった。あられもない姿で粗相させられた羞恥心は彼女の脈拍を余計に速くした。

「こんなにベッドを濡らして。いけない子だ」

まだガニ股で全身をヒクつかせている七瀬を見下ろしながら神田はほくそ笑んだ。

恥じらいで耳まで真っ赤に染まる七瀬。

そんな彼女の様子を眺めている神田の陰茎は先程よりも肥大している。それを確認した七瀬は胸中で不安を覚える。

（……まずい。媚薬かなんかを使われてるのは間違いない。このままじゃ、いいようにされるだけだ……でも指先一つ動かせねえ……）

そして最後に現在の彼女の本音を心の中で呟く。

（畜生……心じゃなくて身体がちんこを欲しがって仕方ねえ……平蔵、助けて……）

神田はサイドテーブルに手を伸ばすとコンドームを取り出した。それを装着しながら独り言のように呟く。

「いくら厳選したコンパニオンとはいえ病気の可能性はゼロではないからな」

その言い草には病気はともかく、避妊の意識はまるでないように感じ取れた。

真っ黒だったゴムは勃起した陰茎に装着すると伸びきって、ほぼ透明になる。

神田は改めて開いた七瀬の両脚の間に座り、そして男根の先端を陰唇に沿って上下に揺らす。

それは単純に潤滑油として愛液を塗りたくっているようにも見えるが、七瀬にとっては焦らされているとしか思えなかった。

潮まで吹いた陰唇は大きく口を開いて奥の方まで濡れている。あとは腰を突き出せ

ば、それで挿入は完了するだろう。
しかし神田は中々それをしない。
その意味を七瀬は確信する。
（こいつ……やっぱり焦らしてやがる……）
くく、と神田は笑いながら七瀬の痴態を見下ろしていた。
陰茎がクリトリスに当たる度に身体を震わせ、小さく喘ぐ七瀬を愛でるようにじっくりと焦らす。
七瀬の全身はもう既にぴっしょりと汗ばみ、息も絶え絶えといった様子だった。
（くそぉっ！　平蔵はそういうことしないから焦らしプレイには慣れてねーんだよ！）
心の中で吐き捨てる。
何かしら使われた薬の影響もあり、七瀬の欲求不満はまるで拷問のようだった。
責め苦めいた快楽の寸止め。
陰茎を上下に動かしながら神田は笑みを浮かべて口を開く。どことなくその口調はやや横柄な色味を帯びていた。
「どうした？　我慢できないといった顔つきだぞ？」

「くっ、うぅ……」

（うるせえカス……こちとらちんこがクリに当たる時、気持ち良すぎて頭がぼおっとして仕方ねえんだよ……！　そうじゃなくても火照って仕方ねーのに……）

「おねだりでもしてみるか？」

（誰が……こんな奴に……でも、でも……）

はぁ、はぁ、とまるで産気づいた妊婦のように七瀬の息遣いは荒い。

その間にも神田は弄ぶように男根を陰唇に擦りつける。

（これ以上我慢したら……頭おかしくなりそうだ……くそっ、くそっ……平蔵……）

七瀬の瞳が発熱した時のように光彩を失っていく。

そんな彼女の変移を神田は至上の悦びのように口角を持ち上げる。

「ほら、君が欲しいモノが、たった一言で手に入るよ」

（一々ウゼーんだよこいつ！　言えばいいんだろ言えば！　ああもう、平蔵、わりぃ……これなにかの薬の所為だから……これ以上我慢できねーんだって……浮気なんかじゃねーからな！）

何らかの薬物は七瀬の身体を芯まで冒していた。

毛穴の一つ一つまでもが男性を欲していた。

「ち……」
七瀬が悔しそうに口を開く。
「んん？」
神田はそれを聞き届けながらも陰茎を彼女の性器に押し付ける。
「おちんぽ……ください……」
神田は満足そうに頷いた。
「よく言えたね。それにしても我慢強い娘だ。本来なら一嗅ぎしただけで男にむしゃぶりつくことしか考えられなくなる代物なのに」
性的興奮が極限な状態に於いても、七瀬はその一言を聞き逃さなかった。
（やっぱり霧状のなにかを嗅がせるタイプか……空調？　アロマ？　そこまではわかんねーけど多少の情報は得たぞ）
「そんないやらしい身体をしておいて、貞操観念は随分と堅いようだね。もしかしたら恋人でもいるのかな？　それも非常に大切にしている恋人だ。そうでなければそこまで抗うことはできないからね」
その問いに七瀬は答えてやるものかと口を閉じて目を逸らした。
しかしその態度は神田の問いに対して言外に肯定してしまっているのと同じことだ

った。
神田は興が乗ったように言う。
「これは私の性癖なのかな。誰かに大切にされている女性というのは余計に美しく見える」
その言葉を証明するように、神田の逸物（いちもつ）は先程よりも荒々しくそそり勃っているように見えた。
（……変態野郎が……）
異常な浮遊感と弛緩の中、そんな憎まれ口の一つも叩くことはできない。
自慢の武芸で切り抜けることもできない。
最愛の恋人に助けを求めることもできない。
そんな絶望的な状況でも七瀬は涙一つ零さなかった。
彼女が武道で最も鍛えたのは技術や身体ではなく心だったからだ。
「んっ……あっ……」
亀頭を膣口（ちつこう）に添えると、神田は七瀬の左右の膝を持って腰を押し進めていく。
身体が欲してやまなかった硬い男根が自身を貫いていく。
ずぶずぶ。

「やっ……あぁ……」
七瀬の口から蕩けた声が漏れた。
そしてついに神田の太く逞(たくま)しい陰茎が根本まで七瀬の中に埋没する。
「あっ、ん……」
気持ちが良くて仕方がなかった。
挿入されただけでも、今までのセックスが全て過去のものになる程の快楽に包まれる。
感度が増幅されたのか、男性器の熱さや硬さ、凹凸までもが鮮明に感じ取れた。それらは七瀬を一瞬で火照らせる。
全身が満足感に包まれ、頭の奥がビリビリと痺(しび)れた。
挿入だけで軽くイってしまっているのだ。
七瀬はそれを情けなく思いながらも、決して屈しはしなかった。
蕩かされているのは身体だけ。心は常に泰然自若。
(他人にちんこ挿れられたくらいで折れる程ヤワじゃねーんだよ!)
心の中でそう啖呵を切る。
神田は神田で七瀬の挿入感を満喫していた。

「見た目通りにすばらしい抱き心地の女陰だ。まるで初めて男を知ったかのような締め付けと、ザラついた肉壁。その美しい容姿に劣らない眩美な肉付きだ」

（知るか馬鹿）

そう思いながらも、神田が一回腰を引くとそれだけで脳裏に火花が散る。

「あっ……！」

弛緩しきっているはずの全身が震える。

「さぁ。たっぷり愛し合おうじゃないか」

ゆったりとしたペースで、神田が腰を前後させていく。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

「とても可憐な音色だ。もっとよく聞かせておくれ」

そう言いながらも神田のペースは変わらない。じっくりと、先程見つけた弱点をカリで擦るような腰つきを見せる。

「そこっ、やっ、あっあっ……だめっ、そこばっかり……」

「そこ、じゃわからないよ。子供じゃないんだからちゃんと言おうね」

一々淫らな言葉を言わせたがる神田に七瀬は小さく舌打ちしながらも、その要求に応えるしか術はなかった。

「……おま○この弱いところ……おちんちんで擦り続けるのイヤ……」
「なにがイヤなんだい？　こんな全身で感じておいて」
「だめっ……これ以上は……あぁっ！」
七瀬は仕事を意識して大人しい口調を心がけている。しかしあまりの快楽に思わず素の自分が出そうになるのを時折我慢していた。
「いいっ、っく……！」
十回もピストンしない内、あっという間に絶頂に達する。
肩に力が入り、爪先がピンと伸びた。
喉が仰け反り綺麗な形の顎（あご）が天井を向く。
七瀬自身は決して感じやすい方ではない。
平蔵との夜の営みではどちらかといえば自分から責める方で、平蔵をイかせられたら満足する性質もあり、セックスでイった回数など数える程しかない。
「どうだい？　こんなの初めてだろう？」
そんな七瀬の性事情を見透かしたかのように神田は言う。
「……べ、別に……そんなこと……」
平蔵に対する罪悪感からか、嘘をついてまで強がる七瀬。

「虚勢を張らなくてもいい。七海君が普段これほどまでに燃え上がることはないはずだ」

七瀬の頭の中は快感の白い波が往来していた。それに身を委ねてしまえばどれ程楽だろうか。

しかし彼女は平蔵の恋人でありパートナーだった。

なんのためにここにいるのかを忘れることはない。

「……なにか……変な物でも飲まされちゃったとか？」

相手に警戒心を起こさせないために、雑談のようにおどけた口調でそう尋ねる。

自分を無害で無知なコンパニオンであることを装う。

「知りたいかね？」

そう尋ね返しながら腰を振る神田。

ぐちゅぐちゅと淫靡な音を奏でる結合部。

「あっ、ああっ、はっあっ、あぁっあんっ！」

甲高い声を上げながらもこくりと頷く七瀬。その際にとろりと瞼が半分落ちていたのは演出ではなかった。

ともかく七瀬の美麗を以ってしてその艶っぽい表情は男の虚栄心を満たすのに十分

だった。

この女の言うことを聞いてやりたい。

そんな願望が神田の脳裏によぎる。

「君は悪い子だね。私のような老い始めた男まで滾らせるのだから」

七瀬は下唇をぺろりと舐めた。

「じゃあ……神田様のおちんぽでお仕置きしてください」

もうここまでしてしまったのだ。

最悪なのはセックスまでしてなんの情報も得られないこと。

最低でも神田に気に入られて、何かしらの手土産は持って帰りたい。

プロとして仕事は果たしたいという矜持は薬物の前でも陰りはしない。

そのためなら多少の演技は必要だろう。

（いや、演技する必要もないか……悔しいけど、滅茶苦茶気持ちいいし……）

神田は鼻息を荒くして、マイペースを保っていたピストンに加速を掛けた。

王宮に置いてあるようなベッドがゆさゆさと揺れる。

「あんっ、あんっ、あんっ！　それ、すごいっ♡」

「君は本当に悪い子だ」

神田は七瀬に魅了されたのか、先程よりも口調に余裕が無くなっていた。全身も汗ばんでいる。

（ちんこもギンギンに勃起してやがる。上等だよ。そっちが口を割るか、あたしが気絶するまでイかされるかの勝負だ）

七瀬の方から手を伸ばし、神田の両手にそれぞれ指先でちょこんと触れる。

神田はそれに応じるように、両手ともに指を絡めて握り合う。

視線も絡み合う。

七瀬はセックスの上気がかった中で、にっこりと笑った。

それは初対面の男だろうが落とすのに十分な程、魅惑的だった。

「いっぱい……来てください」

「こんな素敵なお嬢さんにそこまで誘われたら無下（むげ）にはできないな。誠心誠意お相手させていただこう」

神田は腰つきを強める。

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ♡」

「そんな愛らしい顔と声をして……いけない子だ」

神田の息遣いも切れ切れになってきている。

それは単純に体力切れというわけでもなく、七瀬という女を抱いている男としての興奮の表れでもあった。

（やべぇ……すぐにイキそうになる……でもそれでいい……あえて相手の術中に嵌って懐に入り込んでやる……）

「あっい、いぃっ♡　イクイクイクッ♡　イック♡」

ビクンビクンと全身を痙攣させる七瀬。

仕事と割り切ったはずなのに、やはりどこか後ろめたさはつきまとう。

（……クソ……平蔵相手だとこんな簡単にイかないのに……）

悔しさで奥歯が軋む。

「どうかね？　もっともっと気持ち良くしてあげよう」

七瀬の絶頂を見て気分を良くした神田が恋人繋ぎした両手を、七瀬の顔の左右に置いた。必然的に彼の上半身の影が七瀬に落ちるように覆い被さる。

七瀬はモジモジしながら尋ねた。

「あの……なんだかすごくフワフワするんですけど……怖い薬とか使ってないですよね？」

神田は絶頂直後の七瀬を気遣うようなゆったりしたストロークをしながら答える。

その様子はすっかり七瀬という極上の美酒に酔っている。
「心配要らないよ。ヘブンズダストは合法の成分しか使われていない」
（よし！　ようやく掛かった！）
七瀬は心の中でガッツポーズしながら、何も知らないコンパニオンを装って質問を続ける。
「ヘブンズダスト？」
「気持ち良くなるアロマオイルだよ。この船の売りの一つさ」
七瀬は一つ情報を聞き出せた達成感と共に、少々の肩透かしを喰らった。
（こんなに軽々しく教えるなら本当に合法ドラッグなのか？　いや、まだわかんねーな。もう少し聞き出すか）
「なんだかすごく気持ちいいです。神田様のおちんぽもガチガチで……」
「私は単純に君に魅了されたからだよ。それと普段からのトレーニングの賜物（たまもの）かな」
その言葉を七瀬は吟味する。
（つまり女にしか効かない薬ってことか？　そんな都合の良いものが作れるのか？　でも実際筋肉まで弛緩するほどに、異常な興奮をしているのは私だけだ……）
「七海君もヘブンズダストの虜になったかな？」

「……はい。でもそれ以上に神田様の勃起ちんぽが素敵で……」
（あ～もうダメだ。ヘブンズダストとかいう薬の所為で頭回んね。頭の中セックス塗れにされてるわ……でもヤラレ損にならなくてよかった。神田の言うことが本当なら依存性とかもそんなないだろうし）
七瀬の上辺の言葉に神田は上機嫌になる。
「そうかそうか」
するとさらにピストンの加速が増した。
七瀬は悪態交じりに覚悟を決める。
（ああクソ。思いっきりイかされまくるんだろうな……畜生！）
ズンッ、ズンッ、ズンッ！
一回一回が亀頭から根本まで深く突くようなピストン。
「あんっ、あんっ、あぁっ、はんっ♡」
七瀬はあられもない声を上げる。
一突きごとに絶頂に達するような他に類を見ない悦楽。
「すごいっ、おま○こ、イクのとまらないっ……！」
それは演技ではない。

「あいっ、いっいっ♡　いいっ、あぁっ、はぁっん♡　イクイクイクイってる♡」
ここまで理性を保ち、神田の腹を探ろうとしていた精神力が驚嘆に値する。
それに七瀬が抱える打算はもう一つ。
どうせここまで身体を許したのであれば、神田にもっと気に入られて別のなにかを聞き出せるかもしれない。
「やっ、あっ、そこ、好きっ♡　そこにガチガチちんぽ当たるのきもちっ♡」
しかしそんな建前が揃っていても、七瀬の胸は一々とチクチク痛む。
平蔵とのセックスでこんな狂ったように切羽詰まった嬌声を聞かせたことなどあっただろうか。
いくら薬の所為にしても、七瀬はそれだけがやりきれなかった。
そんな彼女の懸念を感じ取ったのか、いくらジム通いをしていても中年を隠しきれない身体の神田が独り言ちる。
「まだ心までは溶けきっていないようだね」
「……そんなことは……」
「君の瞳の奥に大切にしているモノが映っているよ」
神田の顔が鼻先まで近づく。

相手は、ただの中年男ではない。
海千山千の経験を経て、おそらくは裏の世界とも通ずる上流階級の人間。
七瀬は思わず顔を逸らしそうになったが、持ち前の胆力で真っすぐとその視線を受け止める。
そしてとろんとした表情と口調を見せた。
「だったら神田様のおちんぽで何も考えられなくしてください」
勿論その裏では七瀬は舌を出していた。
（やれるもんならやってみやがれ）
神田は腰を振りながら満足気に笑う。
ベッドがギシギシと揺れていた。
「羨ましい君の想い人とやらは、なにをしている人なのかな？」
下手な嘘は矛盾を呼ぶ。
「んっ、あっ……ど、同僚、です」
「どんな人なんだい？」
ただでさえ他の男とセックスしているだけでも腹立たしいのに、その最中に平蔵のことを訊かれるのは余計に癇に障った。

しかし答えないわけにはいかない。
「……私にはないものを……沢山持ってる人です」
「そうかそうか」
神田はピストンを速めた。
「あっあっあっ♡　いっあぁっ、ひっ、ひっ、ひぃっ、いっ♡」
恋人への惚気を口にしつつも、蕩ける七瀬を肴に神田は愉悦に浸る。
そしてそんな下衆な行為に七瀬は益々苛立ちながらも、薬物による快楽から逃れることができなかった。
「だめっ、だめっ、イク……イクイクイク……あぁっ！」
七瀬が達しても神田はピストンを止めない。
「ひっひっ、ひぃっ♡　だめっ、イってる……イってるからぁっ！」
「大丈夫。もっと蕩かせてあげるから。もっと身を任せて」
「いっ、いいっ、ひっいっ、あぁっ、ひっ、いっ、いん♡」
「気持ち良くなればなるほど薬の効果が上がるからね」
「やっ、やぁっ……こんなの、おま○こ壊れる……ちんぽに壊される♡」
脱力したはずの七瀬の手が、神田に縋りつくように握る。

（やばい……意識飛ぶ……平……蔵……）

「あああぁっ！　イクイクイクっ、イってる……イってるからぁっ♡」

「まだまだ気持ち良くなれるだろ？　おじさんが射精するまでイキ続けなさい」

「無理、無理っ！　早く出して……おじ様ちんぽから早くザーメン出して！」

そう口走った直後、七瀬の視界がブラックアウトする。

連続絶頂で意識が一瞬だけ途切れた。

その一瞬の隙を狙われる。

ブラックアウトから戻った七瀬の視界には、目の前に神田の顔が広がっていた。

それだけではない。唇を吸われる感覚。

キスを奪われた。

そのことを認識すると七瀬は大きな罪の意識に苛（さいな）まれた。

（キスだけは……キスだけは絶対守ろうと思ったのに……！　このクソオヤジっ！）

そんな悪態とは裏腹に、男を求める身体は心と逆の反応を示してしまう。

男根を締め付け絡みつく膣壁と同様に、七瀬の舌は勝手に神田のそれに巻きつく。

（くそっ、やめろ……なにやってんだあたし……）

神田は無駄な抵抗は止めろと言わんばかりに攻勢を強め、七瀬の舌を吸い、歯茎を

舐めた。
上下の口から、くちゅくちゅと淫らな水音が鳴る。
（くそっ、くそっ、くそぉっ!!!）
七瀬の心は必死に抵抗しようとしたが、それが身体に及ぶことはなかった。
ヘブンズダストの意のままにセックスに興じてしまう。
神田との舌を巻きつかせ合うキスで深い幸福感を感じてしまう。
長いキスだった。
ようやく神田の唇が七瀬から離れると、二人の舌の先端同士はべっとりと唾液の橋が架かっていた。
「君は余すところなく甘美な女性だな。非常に気に入ったよ」
七瀬は睨み返すか、もしくは皮肉の一言でも口にしたかったがどちらも叶わない。
（……ここまで来て、全部無駄にはできねぇ……）
両腕を神田の腕に巻きつけ妖しく囁く。
「……神田様……勃起ちんぽ、ザーメンでパンパンですよ……早く楽になられては？」
「そうだな。君という女神の抱擁の前では、これ以上の我慢も限界というものだ」
神田は腰を引きながら言う。その額には大きな汗粒がいくつか光っていた。

「しかし一度抱いただけで終わるとは思わないで欲しい。君は非常に魅力的で興味深い女性だ」

七瀬は接客用の微笑みを浮かべながらも心の中で答える。

（上等だ。何度でも相手して情報を引き出してやる）

神田はそのまま陰茎を取り出すと、ゴムを外した。

「君ほどの宝石を前に病気だなんだと疑うのは馬鹿らしい。射精の時くらいは君を直接感じさせてもらうよ」

七瀬としては当然抵抗感があった。しかし身体は相変わらず言うことを聞かない。陰鬱とした感情を押し殺しながらも笑顔で言った。

「……どうぞお好きに抱いてください」

神田は嬉しそうに、ふふ、と笑うと今度は生の陰茎を挿入する。

「あぁぁっ♡」

ビクンビクンと七瀬の身体が震える。

挿入だけで達してしまった。

敏感になっている彼女の身体では、生の男性器はあまりに快楽的だった。

その硬さ、熱さ、カリの形、浮き上がった血管。

それら全てを事細かに膣壁で感じ取ると、彼女の頭は真っ白に爆ぜた。
（……すごい……生ちんぽがこんな気持ちいいなんて……これも薬の影響かよ……厄介だな……意識だけは落とさねーようにしねーと）
その後の神田のピストンは、そう覚悟を決めた七瀬に壮絶な快感を打ち込む。
「あっ、あっ、あっ、ひっ、ひぃっ♡」
幾度となく襲い掛かる絶頂。
「生ちんぽ、すごっ♡　こんなの、知らないっ♡」
ただセックスに興じに来た女性ならば前後不覚になるほどの刺激。
「カリがっ、おま○こ擦ってっ♡　あんっ、あんっ、そこ、ゴシゴシするの、だめっ、あっあっあっ♡　それ、好きっ♡」
実際は神田がピストンを続けたのは一分程度。
彼にとっても七瀬の生の膣は非常に蠱惑的（こわくてき）で、長時間の挿入やピストンに耐えられない程に心地良かった。
しかし七瀬にとっては一時間以上にも思える過剰な悦楽だった。
途中何度も気を失いそうになったが、その度に持ち前の精神力で意識を保持した。
（……なんのために……ここに来たか忘れんなよ！）

しかしそれでも身体は快事に抗えない。
「おちんぽっ、膨らんでる……♡　ザーメンをびゅーびゅーしたくてパンパンの射精ちんぽ、気持ち良すぎるっ♡」
神田の腰遣いは最高潮へと向かっていく。
「あっ、あっ、あっ♡　イクイクイク♡　またイクっ♡」
七瀬が一際甲高い声を上げると同時に腰を引き抜くと、バニースーツを着たままの彼女の全身に精液をぶちまけた。
やはり中年とは思えない量。
七瀬は肩で息をしながら朦朧（もうろう）とした意識の中、それを見届けた。
神田は射精による小休憩も無しに、ベッドから降りてサイドテーブルからアナルプラグや浣腸器を取り出した。
「ヘブンズダストはアナルセックスとも相性が良くてね。おや、その顔はもしかして初めてかい？　大丈夫。優しく抱いてあげよう」
七瀬は唇まで飛び散った精液を舌で舐め取りながら、心の中で気丈に呟いた。
（……いいぜ。いくらでもお遊戯に付き合ってやる）

第二話　「潜入」

七瀬が奮闘している最中、平蔵もまた情報収集に精を出していた。
しかし、出してはいたのだが、給仕の仕事が忙しすぎてろくに話も聞けないでいた。
ラウンジの様子を注視することもできず、炊事場のフォローやら空いた食器の後片付けに翻弄される。
「これじゃあレストランにバイトに来たのと変わらないぞ……」
料理を持ち運びながら愚痴を吐く。
自分はＶＩＰと絡む機会が皆無に等しい。
その点コンパニオンに扮する七瀬はターゲット達との接触が易しいだろう。
（うまくやってるといいんだが……）
そう思いつつも、平蔵は少し胸がザワつくのを感じた。
コンパニオンはその職業柄、客である男性との距離が近くなりがちだ。
こんな場所なら尚更で、時にはセクハラ紛いのことも起こるだろう。
だが、平蔵は七瀬が暴れるといったことは心配していなかった。

ああ見えて七瀬は非常にプロ意識が高い。きっと我慢して愛想笑いをするだろう。
しかし、それで自分はいいのかと自問自答する。
ラウンジを流し目で見れば、コンパニオンは皆一様に肌の露出が多いバニースーツを着ている。そんな装いの恋人が、中年男性のお酌をしているのだ。
私情を絡めるなと言っても無理がある。ついつい嫉妬心が芽生えてしまう。
やはりこんな仕事断れば良かったと今更ながらに後悔する。
事務所の所長からは破格の依頼料に加えてボーナスも出すと言われ、ついつい欲が出てしまった。
ただでさえ安月給なのだから七瀬との結婚資金の足しになればいいと引き受けてしまったが、どうにも身の丈に合っていない仕事のような気がしてならない。
とはいっても今のところは特に怪しい点は見られない。
非合法なことが行われているパーティーというよりは、ただのゲストが豪華な社交場だ。
「まぁ何事もなければ、それが一番いいんだが」
従業員用の通路をモップで拭きながら独り言ちる。
そんな彼に、通りすがった同僚達の噂話が耳に入った。

「いいよな。お偉いさん達はあんな美人とよろしくやれて」
「噂ではドラッグ使ってるって話だぜ」
同僚達は平蔵に目を向けることなく通り過ぎていく。
一人になってから平蔵はモップ掛けの手を止めて考える。
「……あくまで噂に過ぎない」
そう思いながらも七瀬が心配でならなかった。
七瀬のことは相棒として完璧に信頼している。
しかし同時に彼女は恋人でもあるのだ。
仕事とはいえ他の男に媚びへつらう姿など見たくはない。それが薬を使った性行為ともなれば尚更だ。
とはいえ今の自分には何もできない。
給仕係が用もなくウロウロしていては不審極まりない。
そんな彼に鶴の一声が掛かる。
「おい、そこの！　手が空いてるならこのルームサービスを五〇二号室に届けてくれ」
色んな意味でチャンスだった。こんな場所よりもよほど内情を調査できる。
勿論ハキハキと快諾する。

料理や酒の載ったワゴンを丁寧に押していく。
目的地へと向かうため、大広間を通り抜けた。
そこでは普通の社交場のように政財界の大物同士が歓談したりもしていたが、奥の方のやや薄暗いソファが並ぶエリアには、気に入ったコンパニオンを複数侍らせているＶＩＰもいる。
ちらりと見た限りでは七瀬の姿が見えない。少し不安になる。
しかし、ここで心配していても仕方がない。
大広間を抜けると長く広い廊下に抜ける。
そこはホテルのように個室への扉が並んでいた。
「五〇三……五〇三……」
よく見ると扉の札は二種類あり、部屋番号と共に苗字らしき名前も掛けられていた。
「……誰がどこを使うかは予め決められているということか」
なるべく色々な箇所をチェックしようとゆっくり歩く平蔵だったが、とある部屋の前でその足取りはさらに遅くなった。
『神田』と名札が掛けられた部屋。
重厚そうな扉から女の嬌声が漏れ聞こえてきたのだ。

「ひっ、いぃ♡　これ以上アナルにおちんぽずぽずぽしちゃだめっ、お尻がおま○こになるっ♡」

うっすらとしか聞こえないほど不明瞭な声量に加え、元の声質がわからないほど相当に切羽詰まっているような声だった。

（やはり中ではコンパニオンとよろしくやってんだな。それにしても半狂乱に近い乱れ方だ。やはり何かしらの薬を使ってるのか？）

平蔵は推測を重ねながら歩を進める。

やがて目的地の五〇三号室に到着するとノックをした。

「ルームサービスです」

「うむ。入りたまえ」

中に入ると熱気がむわっと鼻をつく。男女が激しく交わった香りだ。

白髪の老人が天蓋つきのベッドに腰掛け、その傍らに裸の女性が二人寝そべっている。

女性は息も絶え絶えで身を起こすことも叶わないといった様子だ。

白髪の男は汗を掻いているものの、上半身を起こしている。

「ご注文の品です」

「そこに置いておいてくれ」
指示通りの仕事をすると、平蔵は一礼して部屋を出た。
廊下に出るやいなや、先程見た光景の違和感を咀嚼する。
おそらくセックスの後だろう。
だが、あんな老人が若い女性二人を、足腰が立たない程にやりこめられるだろうか。
電動バイブなどの道具を使った痕跡も見られなかった。やはり何かしらの薬物を使っているのかもしれない。とはいえ、それが合法なのか違法なのかもわからない。また、違法売春なのか、性サービスの一環なのかもわからない。
この船の秘密に一歩だけ踏み込めたが、結局はわからないことだらけだ。
平蔵はどうしたものかと考えた結果、元の給仕場には戻らずにこのまま船内を調べることにした。
虎穴に入らずんば虎子を得ず。
しかしそこまで危険を冒す価値のある仕事なのか。
平蔵は自問自答する。
彼はどうしても七瀬が心配だった。
先程見た光景がフラッシュバックし、それが最悪の想像と重なる。

どこかの中年や初老の男の横で、ベッドに裸で寝そべる七瀬。
そんな妄想を振り払うように頭を振る。
（……あいつは怪しいものを口にするような馬鹿じゃないし、なにかあったら男を絞め落としてでも脱出するに違いない）
そう思っていても、平蔵は彼女を捜したくて仕方がなかった。
もう仕事を放棄して、下船の時間までどこかに二人で隠れていたかった。
どうしようもなく悪い予感が渦巻いて、胸を不気味な焦燥感が叩く。
気が付けば早足になっており――。
「どこへ行く」
人の気配に対しても、おろそかになってしまっていた。
曲がり角でうっかり男と対面してしまう。
「あの、道に迷っちゃって……」
男は給仕係の制服でもなければ、ＶＩＰのようなタキシード姿でもなかった。それほど高価そうではない黒いスーツを着ている。
金色の短髪で、こちらを見る目は番犬のようだった。
平蔵の嫌な予感が加速する。

こいつと長く会話をしていては駄目だ。ここからすぐに撤退しないと。
そんな警戒音が夥しく平蔵の脳裏で響く。
「給仕場はどこですか？」
その質問をした瞬間、男の上段回し蹴りが平蔵の顎を揺らした。
目にも留まらぬ早業。
（こいつ……七瀬と同じくらい強い……）
平蔵は膝を折りながらそれだけ考えると意識が途絶えた。
倒れた平蔵を前に、男が携帯を取り出す。
「俺だ。篠塚だ。客室通路Ａで怪しい男を捕まえた。軟禁用の部屋を用意して尋問しろ」
電話の通話口から野太い声が返ってくる。
『怪しい男ですか？　どういう風に？』
「俺の勘だ」
野太い声は大きくため息をついた。
『まぁ、篠塚主任の勘は当たりますけど……』
「いいからさっさとしろ。ゲスト用の通路に気絶させた人間をいつまでも放置できん」

『はい。わかりました』
篠塚は電話を切ると、しゃがみこんで平蔵の顔をじっと見つめた。
「ジャーナリストか、探偵か……そんな面構えしてやがる。仲間も交じっていると考えた方がいいな」
そう言うと長い舌で口端を舐めた。
まるで退屈を持て余した獰猛な肉食獣のようだった。
篠塚は立ち上がると、スーツの襟を正してなにかの匂いを追うように鼻をひくつかせた。
「さて。お仲間はどこにいるのやら」

◆◆◆◆

神田がバスローブを羽織って葉巻を吸っている。
その表情はすっかりと満たされていた。
その後ろで全裸の七瀬がうつ伏せで倒れている。
肩で息をして、背中まで汗をびっしょりと掻いていた。

彼女が深い呼吸をする度に、ぷりんと盛り上がった豊満な臀部が揺れる。
尻の谷間の無垢な肛門はパックリと開き、そこから精液がとろりと垂れていた。
神田は自分の横まですらりと伸びた七瀬の脚を踵まで優しく撫でる。
「ゆっくり休むといい。私も少々疲れた」
「……ふぁい……」
七瀬は呂律も回らない程に朦朧としていた。
しかしそんな彼女を神田は笑いながら賞賛する。
「ヘブンズダストを使ったセックスで最後まで意識を保っていたのは君が初めてだよ。すごい精神力だ」
武芸の修練がこんな風に役に立つとは思いもよらなかったが、今までの日々に感謝する七瀬だった。
「……他の女の子は、気を失っちゃうんですか？」
よれよれの声で尋ねる。
「そうだな。未成年の処女でも破瓜の痛みよりも快楽に抗えず失神する子が殆どだ。それがヘブンズダストの効能だよ」
ふらふらの状態でも七瀬は内心、ほくそ笑む。

（未成年淫行ね。一つネタをゲットだ）
大きく葉巻の煙を吐く神田の背中を見ながら問う。
「神田様もすごく逞しかったです」
要はそっちもなにか薬を使っているんだろう？　という意味を込めた質問だった。
神田の年齢を考えるとその精力と体力は鍛えてどうにかなるものではないと感じたのだ。
アナルセックスまでした二人は、仮初（かりそ）めでも心の距離が近づき神田の警戒心は緩んでいた。
「私は私で薬を使っているからね」
七瀬は筋力が戻りつつある右手で拳を作った。
（よっしゃ。言質（げんち）取ったぞ。やっぱり覚せい剤の温床か？）
しかしそんな思惑も一瞬で砕く神田の一言。
「薬といってもヘブンズダストと同様に合法の強壮剤だがね。こんな快楽を法的リスク無しで味わえるとは。すばらしいドラッグを作ってもらったものだよ」
七瀬はあからさまにガッカリする。
しかしヘブンズダストを味わった身としては、本当にこれが合法なのか怪しいとは

思う。それほどに強烈な性的興奮と快楽だった。
しかしやはり神田は違法性を否定する。
「ヘブンズダストも依存性や有害性はないからね。安心していいよ」
にわかには信じ難いが、嘘を言っているようにも見えなかった。
七瀬が頭を悩ませていると、部屋の内線電話が鳴った。
「やれやれ。せっかく美女との時間を過ごしているのに。誰だ、野暮な人間は」
神田が緩慢な動きで立ち上がると壁際まで歩き、受話器を取った。
「私だ。どうした？　……ふむ、ふむ……わかった。処置はそちらに任せておくよ。身柄はいつもの一〇三号室に頼む」
よろよろと七瀬が上半身を起こすと、神田がその隣に肩を並べるように腰を下ろした。
「どうかされたんですか？」
何となく嫌な予感を伴いながら聞く。
神田は葉巻に火をつけながら言う。
「ネズミが一匹見つかったようでね……」
「え？」

「稀にあるのさ。なにかスキャンダルがないかと乗務員に化けて探りに来るゴシップ雑誌の記者などがね」

「え～、やだこわーい」

などと言いつつ、七瀬の心拍数が微かに上がった。

（平蔵のこと……だよな？　他に記者や同業者がいた可能性もあるけど、流石（さすが）にそれは都合が良すぎる考えか？　くそ、せめて男か女かだけでも聞きてえ）

しかし自分の身分で侵入者のことを深入りして聞くのはあまりに不自然に思え、ぐっと堪えた。

「大丈夫だよ。特に悪いことはしていないんだからね」

（未成年淫行と売春もどきは横行してんだろうが！）

そう思いながらも同調する。

「ですよねー」

侵入者の情報は慎重に聞き出さなければならない。幸い神田は七瀬のことを大層気に入ったようで、このままピロートークに持ち込むようだった。事が済めばさっさと退室させられているようでは七瀬も身体を張った意味がない。

「それにしても今日は僥倖（ぎょうこう）だったね。七海君のようなすばらしい女性と出会えたのだ

から」
「そんなお言葉頂けるなんて、身に余る光栄です」
「はっはっは。そうかしこまる必要はない」
神田はその言葉通り、七瀬とはもう少し心の距離をフランクに詰めたがっているように見える。
「大切なゲスト様ですから」
あえてここで少し突き離すようなことを言う。
すると神田は咳払いをして少し神妙な雰囲気で口を開いた。
「む。七海というのは源氏名であろう？　もし良ければ本名を教えてくれないか？」
源氏名というか偽名なのだが、七瀬はこの申し出には悩んだ。
神田はまだ数回の乗船と言っていたが、不審者の報告が回ってくるくらいだ。この社交界で歴の浅いゲストというのはありえない。
下手に嘘をつくよりも、ある程度身分を明かして懐に入った方が有益な情報が得られるだろう。
「えっと……七瀬といいます」
この名前を神田が他のメンバー、それこそ人事部のような人員に言いふらすとは考

え難い。
「いい名前だ」
「ありがとうございます」
「はじめに尋ねたが、一般企業に勤めているんだね？」
「はい」
ここは嘘をつく。
「恋人は居る、と」
「……はい」
「ふむ……ならば無理強いはしないが、今後も秘密で会うような仲になってもらえると嬉しいのだがね」
「今後、と言いますと？」
「船を下りてからも、だ。勿論タダでとは言わない。マンションの一つや二つくらいはあてがうし、生活費の方の都合もするよ」
（おっと本格的な愛人勧誘。随分と気に入られてるみたいだな。これは利用できるか？）
「本当ですか？　嬉しい」

猫なで声でそう言う。本来なら肩も寄せるべきだったが、どうしても平蔵への貞操観念が勝ってしまう。薬が醒めてきたなら尚更だ。

（探偵失格だな。でもやっぱり平蔵が一番だし）

そう思いながらも、アナルからぬるりと精液が漏れ出てくる感触は七瀬の表情を苦々しくさせた。

「どうかね？　悪い話じゃないだろう？」

代わりに神田の方から肩を抱いて、そしてキスを求めて顔を寄せてきた。

これは受け入れるしかないと諦める。

ちゅっ。

眉間に皺を寄せながら唇を重ねた。

雰囲気が甘々になったところで、七瀬は神田に肩を抱かれた状態で囁く。

「ね、もっとお話聞かせて」

「なんの話を聞きたい？」

「じゃあ……この船の話」

「特に話すことはないよ。豪華絢爛ではあるものの、そこまで珍しいクルーズ船でもないさ」

「さっき捕まった人の話してたけど、拷問とかされちゃうの？」
無知で、好奇心旺盛なコンパニオンを演じる。
それにしても少し焦りすぎかもしれないと危惧した。
しかしそれは杞憂に終わり、神田が七瀬を怪しんでいる素振りは全く見えない。
「ははは。まさか。我々はギャングでもなんでもない。ただ下船するまで大人しくしていてもらうだけだよ。ただ……いや、これは……」
神田がなにか言い淀むのを聞き逃さない。
「なんですか？」
ここぞとばかりに苦渋に耐えながら、自ら身体を摺り寄せる。
神田も悪い気がしなかったのか、「うーむ」と唸った後に口を開いた。
「君に話すようなことでもないのだが、警護を一任されている篠塚という男が少々野蛮な性癖を持っていてね。捕らえた人間をいたぶるんだ。優秀な人間ではあるのだが困った奴でね。まぁ殺したりはしないので揉み消しは簡単なんだがね。この船には警視総監だって乗っているし」
平蔵が拷問されているかもしれない。
それだけで七瀬の行動方針は決定づけられた。

そうと決まればいつまでもこんなところでエロオヤジと仲良くやってる暇はない。
「本当にすごい人達が乗ってるんですね」
身を寄せ合っていちゃつくような素振りをしながら神田の背後に回り込む。
そして冗談交じりに肩を揉みだした。
「神田様もその一人だと思うと今更ながら緊張してきました」
そう笑いながら、七瀬は神田の頸動脈を狙う。
しかし失神させる必要はなかった。
七瀬が神田を落とそうとした瞬間、再び内線電話が鳴る。
七瀬は心の中で舌打ちをしながら、神田がそれに応答するのを歯痒い気持ちで見届けていた。
(早く落とさせろや!)
しかし事態は七瀬の手を煩わせることなく好転する。
通話を終えた神田は申し訳なさそうに七瀬に振り向いた。
「すまないね。取引先企業の重役がどうしても私に挨拶をしたいらしい」
「そうですか。残念ですが仕方ありませんね」
舌打ちはガッツポーズに変わる。

（これで好き勝手動き回れる！）
しかしそんな皮算用は一言で打ち砕かれた。
「申し訳ないがここで待っていてもらっても構わないかね？」
「え？」
「本来なら君を通常業務に戻さないといけないのだろうが、私以外の男に君を見初められては堪らんからな」
「……わかりました。ここでお待ちしてます。お時間はどれくらい掛かりそうですか？」
「こればかりはなんとも言えんな。一時間以内には戻ってこれると思うが」
少々最適の展開からは逸れたものの、自由な時間が与えられたことには変わりはない。
神田が戻ってきた時にいなかったとしても、トイレに行っていたとでも言えばいい。
何より平蔵を救出したらそのままどこかの片隅で下船の時間まで隠れていてもいいのだ。
神田が部屋を出ていったのを確認すると、七瀬は服（といってもバニースーツだが）を着て身支度を整えた。

そして一通りの体操をして、運動能力に問題がないことを確認する。
「すげえなヘブンズダストとかいう薬。効能があるの最初の一時間くらいで何事もなかったかのように消えてるじゃん。マジで合法なのかアレ。ま、そんなことより平蔵の救出だな。つっても平蔵じゃなかったら笑い話だけど。それでも動かないわけにはいかないっしょ」
そう言いながら小さくゆっくりと扉を開けて、周囲を確認してから廊下に出た。

◆◆◆◆

平蔵が目を覚ますと見たことのない簡素な客室に眠らされていた。まるで平均的なビジネスホテルのような佇(たたず)まいだ。船員の休憩室なのかもしれない。
身を起こして所持品をチェックすると、ペンに偽装させた小型のカメラや録音機は全て没収されていた。
これで単なる一般の給仕係というベールは剥がされてしまったわけだ。
平蔵はシングルのベッドに仰向けで倒れ込む。
「やれやれ。任務失敗か」

平蔵が呑気にそんな風に言ってられるのも、現状は決して悪くないと考えたからだ。
手錠が嵌められているわけでも簀巻きにされているわけでもない。それどころかベッドまであてがってくれている。
おそらくは部屋の扉も開いていて、外に見張りが立っている程度の軟禁だろう。
侵入者に対しての拘束が緩すぎる。
それはこの船が大した秘密を持っていないことをも意味していた。
結局のところ、この船は金持ちのための美女斡旋所に過ぎないのかもしれない。
念の為と立ち上がり、ドアノブが回るかを確かめた。
推測通りにドアが開き、廊下に顔を覗かせる。
そして、やはり扉の前にいた黒服の男に声を掛けられた。
「起きたか。そのまま下船までそこで大人しくしてろ。騒ぐと痛い目にあうぞ」
平蔵は黙ってドアを閉め、部屋に戻る。
扉に背中をもたれかけて、平蔵は天井を見つめて大きく息を吐く。
それは安堵のため息。
もしこの船が当初懸念されていた人身売買までしているような非合法の船なら、自分は今頃、海に沈められていただろう。

それどころか平蔵の軟禁の扱いは、むしろ紳士的とまで言える。
いきなり蹴られたくらいか。
蹴られた顎を摩りながらあの黒服を思い出す。今廊下にいるのとは別の人間だった。
平蔵は七瀬がどうしているかを考える。
まだ仕事を全うしているのだろうか。
もし自分が軟禁されていると知ったら、きっと助けに来るだろう。しかしそれは止めたい。このまま事を荒立てなければ二人とも五体満足で船を下りられる可能性が高い。
しかし携帯も没収されているこの状況では連絡の取りようもない。
運悪く自分が拘束されたという情報を七瀬が得ていないといいが。
そう思いながら平蔵はベッドに寝転んだ。

◆◆◆◆

平蔵が捕らえられたかもしれないという情報を神田から得られたのは幸運だった。
もし何も知らないまま任務を終えていたら、平蔵がこの船に拘束されたまま自分だけ

下船していたかもしれない。
七瀬はまず、神田に見つからないように控え室に戻った。携帯をロッカーから取り出し、平蔵の電話を鳴らす。しかし電源が切れていた。
七瀬は小さくため息をついた。
「これで侵入者ってのは平蔵で確定だな」
となれば為すべきことは一つ。
『身柄はいつもの一〇三号室に頼む』
神田が内線で話していた部屋を探す。
しかし焦らず、コンパニオンとして悠々と廊下を歩く。
部屋の見取り図は乗船前に既に記憶していた。
一〇三号室はこのフロアから二つ階を下りた部屋のはず。
人目につかないように歩く。格闘術を買われて雇われていたとしても、それくらいの基礎技術は探偵として会得していた。
やがて階段を見つけると、何食わぬ顔でバニースーツのまま下りていく。
到着したフロアは上の階と違って随分と簡素だった。客ではなく従業員が使用するフロアなのだろう。廊下は狭く、曲がり角には掃除用具一式が入ったロッカーが置い

てある。
先の通路から足音が聞こえた。
七瀬は急いでロッカーに身を隠す。
歩いてきたのは黒服の男二人。
「それにしても、よくあいつが侵入者なんてわかりましたね。篠塚主任」
「……ただの勘だ」
篠塚。その名には聞き覚えがある。神田が言っていた男だ。優秀だが拷問癖があるとも言っていた。
中肉中背でやや猫背の男だった。
歩き方だけでも身体を鍛えているのが七瀬にはわかる。
蛇のような鋭い目つきで、そして声は刃物のように冷たかった。
七瀬は気配を押し殺して二人が通り過ぎるのを待つ。
するとどういうわけか、七瀬の隠れたロッカーを通り過ぎた直後に突然篠塚が足を止めた。
「？　どうかしましたか？」
「いや……」

篠塚は天井を見上げて、鼻をすんすんと鳴らす。
「またなにかの勘ですか？」
部下らしき男が笑うが篠塚は無視してそのまま匂いを嗅ぎ続けた。
七瀬は慌てない。
こんな時に揺れ動く心を持っていては武道を習得した意味がない。
静かな水面のような落ち着きを保持する。
すると篠塚は何事もなかったかのように歩みを再開させた。
「なにか匂いがしたんだがな」
「ここは上と違ってカビ臭いですからね。上は上で酒の匂いで充満してますが。ところでさっき捕らえた男ですが、いつもみたいに痛めつけたりしないんですか？」
「その内にな。本名と所属組織くらいは吐かせるさ」
コツコツと二人分の足音が遠ざかっていく。
それが完全に聞こえなくなると七瀬は小さく息を吐いた。
七瀬は無意識に拳を握ったり開いたりを繰り返す。
万が一あの篠塚と手合わせする場合、ヘブンズダストの影響が残っているとまずいことになると直感した。

とりあえず筋肉は完全に元通りに戻っているようで安堵する。
外に出るとそのまま一〇三号室へと直行した。
「確かこの先だったはず……」
七瀬は曲がり角から慎重に顔を覗かせると、数メートル先の部屋のプレートが一〇三であることを確認する。
しかし扉の前に一人黒服が立っていた。
改めて周囲に人がいないかを確認する。
すると彼女は堂々と姿を現して部屋へと近づいて行った。
「あの～、すみません～」
黒服が訝しげに七瀬を見た。
本来ならば上階のラウンジにいるコンパニオンが、突然声を掛けてきたからだ。
しかし所詮はバニーガール姿。
警戒心は緩む。
「道に迷っちゃったんですけど」
見張りの黒服もその言葉を鵜呑みにするほどアマチュアではない。
しかし頭ごなしに否定することもできず、七瀬に距離を詰められる。

七瀬が黒服の身体に触れられる間合いまで近づいた。
「せっかくだし二人でいいことしませんか？」
七瀬が両手で黒服の襟を掴んだ瞬間に勝負はあった。
黒服も警護班として一通りの武芸は嗜んでいたのだろう。
しかしその程度では七瀬の敵ではない。
電光石火で小内刈りが決まると黒服は受け身も取れずに地面に叩きつけられる。そしてわけもわからないまま三角絞めで意識を落とされた。
「どんなもんだい」
得意気に七瀬が立ち上がる。
あとは手足を縛って猿轡をしておけばいい。
しかし安心している暇はなかった。
足音がこちらに近づいてくる。
「ちっ」
舌打ちをしながらプランを変更する。
落とした男を介抱する振りをして、新手も落とそうとする。
数秒後に現場に現れたのは、先程ロッカーの中でやり過ごしたはずの篠塚だった。

篠塚は倒れている黒服とそれに心配そうに寄り添う七瀬を見下ろすと首を傾げた。
「おいおいおい。嫌な予感がしたから戻ってきたら、なんだこれは」
そう言いながら近づいてくる。
「あの……この人いきなり倒れちゃって……」
中腰の七瀬はもう少し篠塚が近づくのを待つ。
あと一歩でタックルの間合いに入る。
引き倒してやればいくらでも寝技で落とせる。
しかしそのあと一歩を踏み出した瞬間、七瀬の背中に悪寒が走る。
気が付いたら黒い革靴の爪先が目の前に飛び込んできた。
七瀬は上体を後ろに逸らしてそれをギリギリ避ける。
掠った前髪が翻って舞う。
篠塚は歩いてきた勢いそのままに、部下に目もくれず七瀬の顔面を蹴り上げようとしたのだ。
「お前が誰かは後で聞き出す。少なくとも普通のバニーガールは俺の前蹴りを避けられん」
「ただのいたいけなコンパニオンだったら、どうすんだテメェ」

「生憎と俺の勘はよく当たる」
会話を交わしながらも七瀬は立ち上がりつつ、お返しと言わんばかりに相手の顔面を狙った蹴り。
しかし少し間合いが遠い。
いくら七瀬の脚が長くても届きそうにない。
篠塚が手練れであればあるほどそれは明白だった。
しかし七瀬はそれを逆手に取る。
届くはずがない。
そんな先入観を持たせておいて、半脱ぎにしておいたハイヒールを投げるように飛ばす。
ピンヒールが篠塚の額目掛けて飛んでいく。
それを首を捻り何とかギリギリ回避する篠塚。
七瀬は畳みかける。
もう片方の脚で上段後ろ回し蹴りを敢行。
やはり間合いからは外れている蹴り。
もう一度ハイヒールが飛んでくる。

篠塚はそう思って身構えた。
しかし襲い来る七瀬の足は既にハイヒールを脱いでいた。
篠塚の顔面直前を素通りする回し蹴り。
それと同時に七瀬の右手がチョップの要領で篠塚の脳天を狙う。
もう一つのハイヒールは七瀬が右手で持っていた。
斧を振るうようにヒールの部分で頭を狙ったが、篠塚は右手で薙ぎ払うように防御。
しかし完全には防ぎきれなかったようで、篠塚の額からは血が一筋流れた。
「ちっ。今ので仕留められねーのかよ」
相当できる。おそらく今まで対峙した何者よりも強い。七瀬はそう直感した。
当の篠塚はうすら笑いを浮かべている。
「お楽しみはこれからだ」
七瀬にとって最悪なのは内線を使って応援を呼ばれること。
もしくは懐に拳銃でも忍ばせているかもしれない。
なので常に間合いは取らずに、接近戦を仕掛け続けるしかない。
身を寄せるとゼロ距離からショートアッパーを放つ。
それを篠塚はスウェーバックで避ける。そこに余裕はない。どちらも全力だ。

七瀬の猛攻は止まらない。
さらに身を寄せて左フックが脇腹を狙う。
篠塚はその拳を受け流すように受け止めて腕を取った。
二人の間に伯仲した力関係による間が生まれた。
「驚いたな。こんなバニーガールがいるとは」
「後で言い訳していいぜ。女だから油断してたってな」
合気道の要領で掴まれた腕を外し、逆に四方投げへと移る。
それを阻止しようと篠塚は踵で裸足である七瀬の足を踏んだ。
これには堪らず七瀬は手を放す。
しかし日は相手から離さない。
再び二人は近距離で相対する。
一通りの攻防を終えて七瀬は分析する。
(重心から見てもこれといった格闘技の型はない。いかにも実戦で鍛えた喧嘩殺法って感じだ)
大きく深呼吸する。
一つ。

二つ。
アドバンテージはこちらにある。焦る必要はない。
篠塚が額から流す血。
それが片目に垂れようとしている。
その瞬間を狙う。
篠塚は右脚を微かに引いた。
（得意技は蹴りか？　上等だ。捌いて投げる）
血が瞼に到達した。
篠塚が片目を瞑る。
その瞬間を狙って一気に間合いを詰める。
そんな七瀬を迎撃するように前蹴りが放たれる。
平蔵が反応すらできずに意識を刈り取られた蹴り。
しかし七瀬はしっかりと対応する。前進を急停止して蹴りをやり過ごしたのだ。
あとは一本足でバランスの悪い篠塚を好きなように投げるだけ。
勝利を確信した刹那、篠塚が飛び上がった。
気が付けば、七瀬は飛びつき腕十字を極められていた。

鍛えている七瀬でも腕一本で成人男性を支えることはできない。
そのまま引き倒され、腕を極められる。
ギリギリと軋む腕の痛みに身体が硬直する。
その隙を突かれて背後を取られると、スリーパーホールドで絞められた。
徐々に薄暗くなる視界の中、耳元で囁かれる。
「誇っていいぞ女。俺に血を流させたのは、お前が初めてだ」
その言葉を最後に七瀬は意識が途絶えた。

◆◆◆◆

なにやら廊下でドタバタと音が聞こえる。
平蔵はもしかしたら七瀬が来たのではないかと思い、ゆっくりとドアを開けて顔を覗かせた。
すると自分を気絶させた男が七瀬を羽交い絞めにしている。
平蔵は何も考えずに男に突進した。
「七瀬を放せ！」

しかしするりと回避されると顎に掌底を喰らい、その場に倒れ込んだ。
篠塚は一息つくと内ポケットから通信機を取り出した。
「篠塚だ。一〇三号室に鎮静剤を持ってこい」
やがて廊下は静けさを取り戻した。

◆◆◆◆

七瀬の目が覚める。
見たことのない壁や地面が両目に映る。
その広い空間は倉庫のようであり、照明こそついているものの薄暗かった。
後ろ手には手錠が嵌められている。
さらに、やたら肌寒いと思ったら全裸であった。
「こ、ここは……平蔵？」
まだ頭がぼんやりとする。そんな彼女にどこからか声が掛かった。
「君のパートナーなら、こっちだよ」
声に従い首を振ると、項垂（うなだ）れて地面に座っている平蔵が目に入った。

意識は失っているようだが呼吸はしている。
こちらも後ろ手で手錠を嵌められていた。それだけではなく、背後を通るパイプを絡めており、七瀬よりもさらに強固に拘束されている。
そして、その隣には篠塚が立っていた。額には絆創膏が貼られている。
何より篠塚の隣でパイプ椅子に座っている人物に目がいく。
「残念だったよ七瀬君。君もネズミだったなんてね」
タキシードの中年。
七瀬にとっては忘れられるはずもない相手。
つい先程まで滅茶苦茶になる程に抱かれていた男。神田だった。
「あら社長。これはどうも……」
もうこうなってしまっては弁解の余地もない。
「私は本気で君を気に入っていたのだがね」
「すいません。こちらも仕事でして」
肝の据わった七瀬は飄々と返す。
「お互い大変だな」
神田は立ち上がると七瀬の近くまで寄る。

「まさか女性に拷問なんてしませんよね？」
「勿論だ。それは私の信念に反する。しかし、この男は別だ」
神田は気を失ったままの平蔵を見る。
「安心したまえ。眠っているだけだ。君より多量の薬を使った。ちょっとやそっとじゃ起きはしない。まぁその平穏な眠りも、七瀬君次第なのだがね」
自分が自白しなければ平蔵が痛めつけられる。
最悪殺されるかもしれない。
それを裏付けるように篠塚が重苦しく言う。
「お前ら二人が船から消えて海の底に沈もうが捜しようがない」
それを諫めるように神田が苦々しく口を開く。
「こらこら。滅多なことを言うものじゃない。私は手荒なことは苦手だよ」
神田は肩を竦めると七瀬に再度視線を落とした。
「……それで、君は何処の何者かね？」
「しがない探偵事務所の調査員よ」
自分が口を割らないと危害が平蔵に及ぶ。その前に素直に自白しておく。
「探偵？　てっきりどこかの新聞か雑誌の記者かと。まぁいい。どちらにしても肩透

かしだっただろう？　特にスクープのネタも見つからないだろうし」
「……あのヘブンズダストとかいうのは本当に合法なわけ？」
「おっと。急に目つきと口調が鋭くなったな。それが本来の君の姿か。それも凛々しくて素敵だよ」
「返事になってないんだけど」
神田は大袈裟に両腕を広げて笑みを浮かべる。
「残念ながら合法だよ」
「君が暴れなければパートナーの彼も下船時に下ろす予定だったのだがね。まぁ多少の取り調べはするが」
もしかしたら本当にそうだったかもしれない。
しかしなんの情報も持たない七瀬にとっては、平蔵が捕らえられたのであれば救出するしか選択肢になかった。
「彼のことが大切かね？」
「そりゃ……仕事の相棒だしね」
「それ以上の関係ではないと？」
「なんでもないさ」

「ほう。なら、こういうのはどうかな」
神田が指を鳴らす。
すると篠塚が服を脱ぎだして全裸となった。
しかも男性器はどういうわけか勃起しており、その強固な筋肉の塊が持つ威圧感は彼の喧嘩の強さと正比例しているようだった。
「……いきなりおっ勃ててやがるんじゃねーよ」
「生憎だが俺は強い女で興奮する。お前はとても強かった」
「どうせならこのナイスバディで興奮しろや」
「そんなものは二の次だ」
二人のやりとりに神田がくつくつと笑う。
「七瀬君は実に面白いな。取り繕っていた姿も愛らしかったが、素の君の方がとても好感を持てるよ」
「そりゃどうも……てか、なにをするつもりだよ」
篠塚が七瀬の背後に回り、腰を掴んで持ち上げた。
七瀬は抵抗しようにも後ろ手に手錠をされているため、芋虫のようにもぞもぞとしか動けない。

突き上がった陰部に、天を衝くような勃起をしている先端をあてがう。
神田はあくまで上品に笑う。
「彼が起きた時、一体どう思うかな」
「……てめぇ」
「そんな怖い顔で睨んでも可憐だな」
「ていうか……」
七瀬がなにかを言いかけた時、そんなことはお構いなしと篠塚が挿入する。
「んんっ……！」
それも一度に奥まで。その一撃は熱く重く、彼の打撃のようだった。
ヘブンズダストの効果こそ切れていたものの、彼女の膣や身体全体は熱いセックスの味をまだ覚えていた。
乾ききっていない膣肉は、にゅるりと篠塚の陰茎を受け入れる。
「くっ、うぅ……」
調査の名目があった神田の時とは明らかに状況が違う。
生まれて初めての強姦。
力ずくで男に犯されている感覚に彼女は圧倒的な敗北感を覚えた。

その苦悶の表情を愉しむように神田が微笑む。
七瀬はドスの利いた低い声で威圧する。
「てめぇ……なに笑ってやがる」
「いやなに。今でも君のことはお気に入りなんだ。そんな娘が他の男に犯されている姿を目にするのもまた一興なものだなと思ってね」
「……この変態オヤジがっ！」
口の悪い七瀬を躾けるように篠塚がパァンッと下腹部ごと七瀬の豊満な尻肉を叩いた。
その結果当然のように、エラの張ったカリが彼女の胎内を引っ掻く。
「あぁっ、んっ……！」
それを快楽とは思いたくなかった。
七瀬にとってはこれは屈辱でしかない。
しかしヘブンズダストの残り香と、若く凶悪なフォルムの肉棒が彼女の雌の本能を呼び起こす。
「中々いい声を出すじゃないか。レイプ願望でもあったのかね？」
「ふざけろっ！」

神田に悪態をつくと、篠塚が無言でパァンッ、パァンッと力強くピストンする。
「ぐっ……うぅっ……」
七瀬は呻いたが、それは苦痛によるものではない。
気を抜いたら甲高い声で喘いでしまいそうな予感があった。
七瀬にとってそれは恐怖だった。
猛犬のような気質の彼女だが、その貞操観念は非常に堅い。
平蔵以外の男にそんな声を上げるなど切腹ものだと考える。
ただでさえ寝ているとはいえ平蔵が目の前にいる。
威勢の良さを保ってはいるが、彼女の羞恥心は最高潮に達していた。
「くそがっ……殺すなら殺せよ！」
その遠吠えは半ば本気だった。こんな姿を恋人に晒すくらいなら死んだ方がマシだと彼女は思った。
「やれやれ。若い人は血の気が多い。我々はヤクザやマフィアじゃないんだ。そんな野蛮なことはしたくないと言っているだろう」
神田は肩を竦めながら言う。
しかしその目に宿る愉悦はどこまでも濁っている。

「どうせなら楽しんだらどうだ？」
篠塚が安産型のたっぷり横幅のある腰を掴んで言った。
「うるせえっ！　無駄にちんぽガチガチにしやがって」
篠塚が腰を振る。
それもただ強引にではなく、自分の逸物の形状と七瀬の性感ポイントを意識した上での動き。
反り返った肉棒と釣り針のように張ったエラを丁寧に使い七瀬を突く。
「くっ、ぐぅ……んっ、く」
七瀬としては、ただ乱暴に扱われ、痛みを与えられた方がマシだった。
それならただ耐えるだけだった。
（平蔵の目の前で……こんな奴のちんぽに感じてられっかよ……！）
しかし付与されるのは手厚い快楽。
優れた男根の形状とツボを突くようなピストンに、膣肉はいつの間にかだらだらと涎を垂らすように愛液で濡れていた。
篠塚が腰を振る度、ニチャ、ニチャ、と粘り気のある音が広い空間に響く。
裸で少し肌寒いと思っていたはずなのに、汗が浮かぶ程の熱気を全身に帯び始めて

いる。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
絶対に媚びへつらうような声は出さないと喉を引き締めていたが、強く噛んだ奥歯からは微かに甘味を帯びた声が出始めている。
「くそ……やめろ……」
その声に篠塚は反応しない。
一定のペースで腰を振るだけだ。
その代わりに神田が七瀬に声を掛ける。
「篠塚君と交友を深めている中で悪いが、いくつか質問をいいかな？」
七瀬は無言で神田を睨み上げた。
悪態をつこうと口を開いたら喘いでしまいそうだったから口は噤(つぐ)んだままだ。
「まず一つ。君達の依頼者は誰だ？」
七瀬は引き続き口を開かない。
「多少は頑固な方が可愛いがね」
神田が指を鳴らすと篠塚の抽送(ちゅうそう)が速くなる。
仄暗い倉庫にパンパンパンと乾いた音が鳴った。

「んっ、んっ、んっ……」
「君には守秘義務があるのだろうが、私達も何も聞き出さずに帰すわけにはいかないのでね」
「くっ、ふぅ……んっぐ……」
七瀬は全身がより熱くなってくるのを感じる。
（やばい……こいつのちんこ気持ちいい……くそ……平蔵の前なのに……）
このままでは淫らな声を上げてしまうという焦燥感に押し出され、七瀬は質問に答えてしまう。といっても正直に答えてもなんの問題もない質疑だったからだ。
「し、知らねーよ」
「あくまでそういう態度を取ると」
「……ちげーよ……本当に聞かされてねーんだよ」
「なるほどなるほど。末端の構成員ならそういうこともあるか」
神田は妙に余裕を帯びた態度を取る。
七瀬にとってそれは余裕というよりも無関心という風にも映った。
というかそもそも疑問なのが、こんな尋問めいたことをするのに神田が同席していることだ。

篠塚はわかるが、神田はあくまでゲストの一人のはず。
その割には人数も少ない。
護衛は篠塚しかおらず、他には誰もいない。
七瀬はピンときた。
神田は七瀬が辱められる姿を観察したいだけなのだ。
(益々苛ついてきたぜ……このクソオヤジ……)
その怒りで奥歯を噛み締めるが、その力を緩めさせるように篠塚が絶妙の腰遣いを見せる。
「んっ、んっ、あっ、んっ……」
心の隙ができたのか、掠れてはいるが甲高い声が漏れた。
それが嬉しいのか神田は喜悦が漏れだすような笑みを浮かべた。
「可愛い声が漏れだしたねぇ」
「……うるせぇ……黙ってろ」
「私が黙っていても、篠塚のピストンは止まらないよ」
パンパンパンッ。
「あっ、あっ、あっ、あっ」

「ん～。相変わらずいい声だ。私としていた時よりかは随分と大人しめだが」
手錠を嵌められ、文字通り手も足も出ない状態で七瀬は鼻で笑う。
「女一人相手……んっ……薬を使わないとイかせられない奴が……あっん……よく言うぜ……はっ、あぁっ……」
なにを言おうが、神田の前で部下に後背位で犯されていては負け犬の遠吠えにしかならなかった。
それでも七瀬の気勢は衰えない。
持ち前の気性の荒さはいくら強靭な肉棒で刺し穿(うが)たれ、白く泡立った愛液を太ももに垂れさせても衰えることはない。
そして精神面の強さで言えば神田も同様だった。
強さというよりかは強(したた)かさ。
大人の余裕で挑発を優雅にスルーする。
「ヘブンズダストは君も随分と気に入っていたではないか。私の一挙手一投足に感じ、繰り返し果てていた」
無表情の篠塚だが、七瀬の臀部側面を持つ手に力が入る。そして下腹部を叩きつける勢いが増した。

「んっ、んっ、んっ、んっ」
それに比例して七瀬の声が決壊前のダムのような危うさを見せる。
「あっ、あっ……あんなもん……ズルだズル……やっ、ん……あたしは認めねえ」
「お行儀のいい君も良かったが、威勢のいい君も好きだよ」
「んっ、あっあっ……き、きもいんだよっ」
「それにしても篠塚。どうだ彼女の具合は。雄として思わず鼻息も荒くなるだろう」
篠塚は一旦ピストンを止めて答える。
「そうですね。程好いキツめの締め付けに、細かくザラザラとした触感が絡みついてきます。俺は強い女が好きですが、単純にこの女性器は心地がいいですね」
そう言うと、ぎゅうっと下腹部を押し付ける。
肉棒が陰唇を広げつつその全てを膣内に押し込んだ。
たっぷりとした尻肉が柔らかそうにむにゅりと潰れる。
「あぁっ、あっあっ♡」
その動作で七瀬は完全に喘いでしまった。
ぐうっと肩を強張らせ、全身をヒクつかせる。
無機質な床にはポタポタと愛液が垂れては濡らしていく。

「七瀬君は奥がお好きなようだ。じっくりと可愛がってやりなさい」
「了解しました」
篠塚の応答はまるでロボットのようだったが、握られている七瀬の臀部は彼の手の温もりを感じていた。そしてそれ以上に膣内で陰茎の豪壮さを感じさせられていた。とにかく硬いのだ。鍛え上げられた筋肉のよう。浮かび上がった血管の一つ一つまで詳細にわかる。
七瀬はその力強さに舌を巻いた。
（こいつ……喧嘩だけじゃなくてちんこまでクソ強え……）
そんな雄々しさがメーターを振り切ったような陰茎で、奥をキスするようにぎゅうぎゅうと押し込まれては七瀬も堪らない。
「あっ♡　あっ♡　あんっ♡」
七瀬はもう普通に喘いでしまっていた。
その声は普段の男勝りの彼女のそれではなく、男に屈した雌の音色。
神田が愉快そうにくつくつ笑う。
「そら、もっと押し込んでやれ」
「はい」

篠塚がより一層強く七瀬の尻肉を掴むと、石のような男根をぎゅうっと根本から押し込む。
「はぁっ、あぁぁん♡」
七瀬は堪らず倉庫中に響くような声を上げる。
「いけないなぁ七瀬君。大切なパートナーの前でそんな声を上げたら」
七瀬と平蔵が恋仲とはまだ公然とは知られていないはずだった。
しかし神田はどこか察するようにそう言った。
「べ、別に平蔵はそんなんじゃ……」
そんな風に言うことは七瀬の胸も痛んだが、これ以上弱みを握られるわけにはいかないと否定する。
「どうなんだ篠塚？　お前は勘が鋭いだろう？」
「勘を働かせるまでもありません。こいつの恋人はその男でしょう」
篠塚にそう断言されて七瀬はドキンと鼓動を鳴らした。
「ほう。どうしてそう思う？」
「神田様がその男の話題を出す度に、こいつの膣肉がぎゅうぎゅうに締め付けてくるからです」

神田は手を叩いて笑った。
七瀬は耳まで真っ赤にする。
「くっく。いかんなぁ七瀬君。探偵ともあろうものがそんな風に顔に出したら」
そうは言っても七瀬にとってこんなことは初体験である。
羞恥が顔色に出るのも仕方ない。
そこには怒りも混じっている。
自分の平蔵への想いが余興にされている。
玩具にされている。
しかしこの状況で反抗はできない。
上半身は手錠で、下半身は手錠よりも手強い肉棒で拘束されている。
「どうした？　急に無口になったな？」
篠塚がそう言いながら、ぐっ、ぐっと腰をねじ込む。
「んっ、んっ」
声を上げたらこいつらを悦ばせるだけだ。
そうわかっていても口から漏れる甲高い声は止められない。
それほどまでに篠塚の陰茎は滾っていた。

（畜生……ガチガチに勃起しやがって……それに……）
黙った七瀬を前に、篠塚はピストンに変化を与えた。
ぱちんっ、ぱちんっ、ぱちんっ。
軽快なリズムで下腹部を尻肉に叩きつける。
「あっあっ、あぁん♡」
予期せぬ変化に、思わず高らかに喘いでしまう。
それればかりか心に押し留めていた言葉を発してしまう。
「あっ、熱いっ……♡」
神田はわざとらしく周りを見渡す。
「ここはひんやりとしている方だがな」
「……っく」
思わずしてしまった失言を悔いる。
「なにが熱かったのか聞かせてもらってもいいかな？」
神田の問いを無視する。
すると篠塚は答えろと言わんばかりに強いストロークを見せる。
パァンッ！　パァンッ！

「あんっ！　あんっ！」
それでも七瀬は下唇を噛んで耐える。
すると篠塚は七瀬の腰肉を掴み直した。七瀬の肌は既にじっとりと汗ばんでいる。
それから始まったのは、篠塚の体力をひけらかすようなピストンだった。
ペース、強さ、共にあまりに激しい抽送。
パンパンパンパンパン。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」
ここぞとばかりに神田が口角を上げる。
「そんなに大きな声を出しては彼氏が起きてしまうよ？」
七瀬は思わず平蔵に視線を向けてしまう。
意識を取り戻した様子はない。
しかし、いつ起きるかはわからない。
その時にこんな状況を見せつけるわけにはいかない。
早くこの時間が終わってくれと祈るしかなかった。
「ほら、なにが熱いんだい？」
神田が喜悦を隠そうともせずに言う。その表情は自ら抱くこともなく、七瀬を羞恥

させることで快楽を得ていた。
篠塚のピストンは荒々しさを増すばかりだった。
「あんっ、あんっ、あんっ♡　やっ、あぁっ♡」
このままでは自分の声で平蔵を起こしてしまう。
それだけは避けたい七瀬は一度奥歯をギリっと噛み締めると呟いた。
「……ち、ちんぽが……」
「聞こえないな」
「……ちんぽが、熱い……」
神田が満足そうに目を細める。同時に篠塚の腰の回転が少々緩まる。
「……こんの……クソちんぽがぁ……」
悪態をつきながらも、篠塚の肉棒に貫かれる度に彼女の頭の芯は快感で痺れた。
悔しいのはその刺激が明らかに平蔵よりも大きく鋭いこと。
（くそっ……こんな奴に……平蔵よりも……）
心の中でもそれ以上は考えるのを止める。
しかしその先を篠塚が指摘してくる。
「どうした？　彼氏のよりも俺のがいいのか？　突く度に絡みついてくるじゃない

か」

神田も興味深そうに乗っかる。

「ほう。そうなのかね？」

七瀬は即答した。

「……んなわけねーだろ！　ボケどもがっ！」

篠塚はその無表情のまま鼻を鳴らした。

「強がっていても身体は正直だな」

彼は少し前傾姿勢を取り、挿入の角度を少々変えた。

「やっあっ♡　そこは……」

七瀬が弱々しい声で喘ぐ。

対照的に低く重い声で篠塚が囁く。

「さっきまでの威勢はどうした」

七瀬は既に肩で息をするようになっていた。

背中にもじっとりと大粒の汗が浮かんでいる。

「……上等だよ。てめぇの勃起ちんぽなんか屁でもねぇんだよ」

篠塚がニヤリと口端を歪める。

「その意気だ。精々彼氏を起こさないようにアクメ声は抑えるんだな」
七瀬は先程のような激しいピストンを予想して心身を強張らせた。しかし実際には篠塚はテクニカルな動きを見せる。
カリを使って丁寧に膣壁を引っ掻く。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」
「ここもいいんだな？」
「うる、せぇ……一々聞くんじゃねーよ……やっ、あっ♡」
「お前の口がどう足掻こうと、身体が答えてくれる」
「あっ、いっ♡　いっいっ♡　そこ、やめっ……あっあっあっ」
篠塚は執拗に同じ場所を擦り続ける。
「やめっ、あっあっ、そこばっかり、ちんぽ、ゴシゴシすんじゃ……ねー……」
七瀬の息遣いが浅くなっていく。
「あっあっあっ、いっ、いぃっ♡　それ、だめっ、あぁ、いいっ、ちんぽ……硬い……」
「硬くて熱いのが好きか？」
「……別に……好きじゃ……んっんっ……好きじゃない……」

「なら、どんな男性器が好きか言ってみろ」
篠塚の声に加虐嗜好（しこう）の色味が浮かび上がる。
湯気が出そうな程に熱気が深まる二人の後背位を、神田は横でどこか楽しそうに見届けていた。
「……彼氏の、ちんこだよ……馬鹿野郎」
「ほう。これよりもか？」
浅めのところを擦り続けていた中、不意にぐうっと奥に押し込む。
「あぁっん♡」
篠塚はもう一度聞く。
「これよりも彼氏の方がいいのか？」
「……当たり前だ……クソ野郎」
手錠を嵌められた右手の中指を立てて意志を表示する七瀬。
「強情だな。しかし嫌いじゃないぜ。その可愛げのなさは」
気が付けば篠塚も全身に汗を浮かばせている。
最初はただの拷問めいた性行為だったが、いつの間にか七瀬の肉体を貪ることに夢中になっていた。

「お前との格闘は久々に血湧き肉躍った。セックスでも俺を楽しませてくれるとはイイ女だ」

半分皮肉。半分本気の口調で言い放たれた。

「そいつぁどうも。てめぇもまぁまぁのちんぽしてるよ。そこそこのな」

あくまで大した評価はつけないといった姿勢の七瀬。

そんな彼女と生で粘膜を擦り合わせることが、まるで先程の戦闘の続きだと言わんばかりに篠塚は闘気を放つ。

「お前が彼氏の前で謝るまで俺は腰を止めない」

そう宣言する。

七瀬も負けじと気勢を発する。

「……上等だ。次は負けっかよ」

息遣いを浅くしながらもそう答える。

先手を取るのは当然篠塚。

先程の続きで七瀬の弱点と思わしき浅めの場所を優しめに擦る。

「んっ、んっ、んっ、んっ……」

「ここが弱いのはもう露呈している」

「うるせぇ……黙って腰振ってろ……」
「彼氏はここで満足させてくれるのか？」
格闘戦と同様に、嫌な場所を突いてくる篠塚。
七瀬は嫌でも思い返してしまう。
（……そういや……平蔵のは、ここにこんなゴリゴリ当たらないよな……）
陰茎の形をついつい比較してしまう。
その上で相性の良さがどちらに軍配が上がるかは明白だった。
七瀬は思わず返事に詰まってしまう。
「ふん。どうやら彼氏ではろくに満たされていないようだな」
「だ、誰もそんなこと言ってねーだろ！」
実際に七瀬は平蔵との性行為に不満を覚えたことはない。
しかしそれは愛情というスパイスがあってのことだ。
このように暴力的なまでの快楽を与えられたことは記憶にない。
「まぁいいさ。今度は俺の拳ではなく、こいつをじっくり味わえ」
篠塚が再び動きだす。
「くっ……うぅ……」

七瀬の脳裏に苦い記憶が蘇った。
自分がそもそも篠塚に負けなければこんな目にもあっていなかったのだ。
今まで喧嘩の腕は男にだって引けを取らなかった。
なのにこのザマだ。
大きな敗北感が重く伸し掛かる。
七瀬は思わず涙ぐむが、それを流して堪るものかとぐっと我慢した。
しかし自分が敗北した男に後ろから無理やり犯され湧き起こるのは、ただの悔しさや不快感だけではなかった。
強い雄。
強い男根。
それらに膣壺を押し広げられ、ぐちょぐちょと淫靡な音を晒している自分にどこか酩酊のようなものを感じる。
「はぁ、はぁ……んんっ、あぁ……」
篠塚は引き続き同じ場所を同じペースで擦り続ける。
「あっ……ん……やっあ……」
手錠に拘束された両手が拳を握る。

（頭、ジンジンする……ちんぽにゴシゴシされる度……わけわかんなくなってく……）
篠塚が言葉責めをするような口調で言う。
「どこが気持ちいい？　言ってみろ」
「……言わねーし」
「言え」
腰つきの角度を微かに変える。
新鮮な刺激が七瀬を襲った。
「……あっ、あっ、それっ♡」
「これも好きか？」
「……好、き……」
そう答えてしまった七瀬は自分の失態にハッと気づく。
（あたし……なんで答えて……）
快感によって心の隙を作られる。
格闘のセンスはほぼ互角だったが、セックスに於いては大きな広がりがあった。
「どこが気持ちいいか言え」
有無を言わさぬ言葉責め。

男にも負けるものかと鍛え続けてきた七瀬の鋼の精神が揺らぐ。
「……お、おま○こ……」
「おま○こがなんだ？」
強く、虐めるように腰を振る。
「あっあっあっ♡　おま○こ、気持ち良いっ……」
言ってしまった。
七瀬の胸が後悔で締め付けられる。
しかし同時になにかが腹部の奥で疼いた。
その疼きの正体もわからぬまま、頭がビリビリと痺れて何も考えられなくなっていく。
（くっ……なんであたし、平蔵の前でこんなこと言っちまったんだ……）
そんな彼女の葛藤を見透かしたかのように篠塚はさらに攻勢に出る。
生の肉棒によるカリで、より一層深く膣壁を抉る。
「あんっあんっあんっ♡　やぁっ、あっ、いいっ♡　そこっ、来るっ♡」
膣から背骨を昇って頭をクラクラと眩ませる。
頭の中のあちこちで火花が散り、意識が閉じていくような感覚。

絶頂が近い。
「いや……やだ……平蔵の前で……」
七瀬は唇を噛んだ。
「……平蔵の前で……イキたくない……」
しかし篠塚は無慈悲に判決を言い渡す。
「駄目だ。恋人の前で無様にイケ」
神田も頬を綻ばせて軽く手を叩いた。
「やっ、やっ……あっ、あぁっ♡　イク、イクッ……おま○こ、昇ってくる……気持ちいいのが昇ってくる……」
普段は勝気な七瀬の声が気弱になる。
「ちんぽ駄目……これ以上、そこ、おちんぽで突かないで……あっあっ♡　イク……イクイクイク……」
七瀬の全身がぎゅうっと縮まる。
七瀬は平蔵の方を見ることができなかった。申し訳なさや不甲斐なさで、色んな感情が胸の中を駆け巡る。
そしてついにその時が訪れた。

「平蔵……ごめんっ……」
絞り出すような声で謝罪した瞬間、彼女の肩がビクビクっと震えた。
「イックっ……!!!」
続いて肩甲骨がぎゅっと引き締まり、そのまま痙攣が背中を伝っていく。
それが数秒続き、彼女は大きく息を吐くと小さく叫んだ。
「……畜生……！」
神田は彼女の様子に非常に満足気だった。
そして同時に篠塚も眉をひそめていた。それは快楽によるものだった。
神田が察して言う。
「ただでさえ具合のいい締め付けなのに、果てる時のそれはなんとも言えない心地良さに包まれるだろう？」
「……はい」
篠塚の声は若干上擦っていた。
ヒクつく全身と同期するように、膣壁もぐねぐねと蠢きながらキツく抱擁してくる。
それに得られる恍惚（こうこつ）は中々体験できるものではない。
篠塚は七瀬に一目置いていた。

自分とそれなりにわたり合った女など今までいるはずもなかったし、この状況に於いても怯えることのない気骨は賞賛に値した。
そんな女の胆力に興奮し、そして肉体に酔いしれる。
今まで抱いたどんな女よりも抱き甲斐があると確信する。
この女をもっと隅々まで味わいたい。
そんな気持ちが、彼女が無防備に晒している肛門に視線をフォーカスする。
まるでまだ男を知らなそうな無垢な程綺麗な肛門は、何故か少し開いてヒクついていた。
「神田様。この女。後ろの穴は？」
神田は得意気に言う。
「勿論調教済みだ」
「私が味わっても？」
「ふふ。独り占めしたいところだが、当然の権利だな。君が捕らえた獲物だ」
篠塚は七瀬の汗塗れの臀部を優しく撫でながら言う。
「聞いていたか？　今からお前のアナルに俺の男根をぶち込む。お前が許しを乞うまで貪ってやる」

その言葉に嘘はないと七瀬は感じた。
絶頂の余韻の中、膣内を貫く陰茎はまだまだ狩りに満足していない虎の牙のようだった。あまりに硬く、そして獰猛。
恋人の前でイかされた敗北感の中でも、七瀬は勝気に悪態をつく。
「……勝手に言ってろ」
「随分と強気だな。こっちの穴もそれくらい負けん気が強ければいいんだが」
篠塚が腰を引いて一旦陰茎を引き抜く。
白く泡立った愛液だらけの男根は、再び挿入するのに十分すぎる程の潤滑油を纏っているように見えた。
それを膣口ではなく肛門へと狙いを定める。
まるで鍛え抜かれたかのように頑強な肉竿をゆっくりと肛門の中に埋めていく。
「うっ、くぅ……ふぅ……ふっ……」
処女は喪失しているとはいえ、その違和感にはまだ不慣れな七瀬は身体を硬直させた。
しかしそれでもつい先程まで調教を受けていた肛門は、にゅるにゅると勃起した男根を受け止めていく。

むにゅりと亀頭の大きさに広がり、そして滑り込んでくる竿を呑み込む。
「はぅっ、うぅ……」
苦痛とも快楽とも取れないような声を出した。
肛門を押し広げて肉棒が入っていく様子を見下ろしながら、篠塚が口を開く。
「膣と同じくお前の性質を映したかのような挿入感」
七瀬は息苦しそうに答えた。
「……てめぇが、あたしのなにを知ってんだよ」
「わかるさ。一度手合わせした相手だからな」
そして一呼吸置いて言葉を続ける。
「情熱的な締め付け。その上で丁寧な挿れ心地だ」
「……知るかボケ……」
強気を維持する七瀬だったが、その心中はグラグラと揺れている。
神田が相手の時のような、媚薬で意識が朦朧としていた時とは違い今は鮮明だ。
そして何より実戦で負けた相手に後背位で肛姦されている。
耐え難い屈辱と敗北感が七瀬の心の柱を激しく傷つける。
しかし涙は流さない。

反抗的な態度も崩さない。
それが平蔵に対するせめてもの誠意だと思った。
情けない自分を少しでも奮い立たせるために彼女は奥歯を噛み締める。
「ケツの穴犯されたくらいでへこたれると思うんじゃねーぞ！」
篠塚の口元が獲物を前にした蛇のように緩んだ。
（うぅ……肛門がガチガチのちんぽに押し広げられてる感じ……やっぱり気持ち悪い……さっきはヘブンズダストの所為でわけわかんなくなってたけど……素面だと熱いのが奥まで刺さってて……なんかヒリヒリする）
男根の根本までみっちりと入った肛門の周りを親指の腹で優しく撫でると篠塚は言った。
「いくぞ」
七瀬は下唇を噛んで身構える。
ズン。
「んっ」
ズン。
「あぁっ」

ズン。
「やっ、あんっ」
神田にねっとりと仕込まれたアナルは、すっかり男の性処理用の肉穴に生まれ変わっていた。
ただ男を悦ばすためだけではなく、自らも昂り、男を欲する雌穴。
「あっ、いぃ……くそっ……ちょっと待って……やっあっ」
「どうした？　もう降参か？」
篠塚はピストンを止めない。
「あっあっあっ♡　そうじゃ、ない……けど……やっあ、熱い……火傷（やけど）する……」
「どこが？」
その問いに対して、七瀬はつい「おま○こ」と答えそうになってしまった。
そんな自分を恥じて耳まで真っ赤にする。
篠塚は七瀬の胸中を察したのか意地の悪い言い方で責める。
「こっちのま○こも気持ちいいぞ。お前は優秀だな」
「……ふざけろ」
七瀬の悪態とは裏腹に、彼女の肛門は篠塚が腰を引くと吸盤のように吸い付いてい

く。

それでいて膣とは比べ物にならない締め付けによる摩擦も味わわせる。

「んっ……んん……」

生殖器でもない箇所で、ただ男を悦ばせるためだけに挿入されている。

しかも初めて喧嘩で負けた男に。

（くそ！　くそ！　くそ！）

その想いが重なる度に、どういうわけか身体が火照っていく。

太い亀頭のカリに肛門をめくられる度に、彼女の臀部はヒリつき甘い声を上げる。

「あっ、あっ、あっ♡」

七瀬の脳裏によぎる一つの疑念。

自分より強い男に肉便器扱いされる恥辱。

それが心身を燃え上がらせているのではないか。

こうして額から背中まで汗だくになるほど熱気を放ち、男根を抜き差しされる度に甲高い声を上げてしまうのではないか。

七瀬は必死にその考えを否定する。

「やっ、あっあっ、だめっ、お尻、熱い……」

平蔵の前でこんな辱めを受けて、無念さ以外の感情を抱くわけがない。
「ちんぽ、おっきぃっ♡　お尻の穴、めくれる……」
なんでこんな奴に。
なんでこんな状況で。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、いっ、いっ♡」
こんな甘ったるい声を出してしまっているのだ。
もう媚薬の効果は消えているはずだ。
「お尻の中の勃起ちんぽ、硬すぎ……♡」
なのに豪壮に屹立（きつりつ）した男性器に蕩けた声を上げてしまう。
「あっ、あっひっ、激しっ……いっいっ、ひぃっ」
あられもない声を上げては身体をくねらせる。
「……おま○こ、壊れる……」
とうとう排泄器官を生殖器と認めてしまう有様。
「ガチガチちんぽで、ケツ穴ま○こ壊れちゃう……」
肛門がさらに押し広げられる。
男根がより硬く、そして膨張するのをその身を以て感じる。

射精の予感がした。
どういうわけか全身の細胞が歓喜しているような気がした。
ヘブンズダストが効いている時のような、自分がどうしようもなく女なんだと自覚させられる時と同じ感覚。
自分の肉穴で男性を頂まで導いたという満足感。
それらが恋人を想う貞操観念を波のように押し流していく。
七瀬はもう自分がわからなくなって、両目をキツく瞑って呟いた。
「……もう嫌だ……勘弁してくれ……」
しかし篠塚は容赦しない。
「駄目だ。俺がイクまで付き合ってもらうぞ」
そう言うと彼は引き締まった七瀬の腰を掴むと、獣のように腰を振りだした。
バンッ、バンッ、バンッ、バンッ。
射精に向かうための激しいピストン。
肉棒を乱暴なまでに肛門で摩擦させる。
「あいっ、いっ、ひぃっ♡　ひっひっ、いっん♡　だめっ、だめっ、そんな強くされたらケツマ○コで、イクっ♡　こんな強いちんぽ、肛門で勝てないっ！」

じゅっぽ、じゅっぽと独特の挿入音が倉庫に鳴り響く。
「出すぞ女」
「やっあっあっ、いっいっ♡　イクっ、イクイクイク……やだお尻の穴が、おちんぽを気持ち良く射精させるための穴になってる……あぁっ、イク、きもちいっ、イクイク……あああああっ♡　平蔵っ！」
最後に恋人の名を呼ぶが彼はまだ眠りの中だった。助けてくれるはずもない。
膣とは違うもどかしい快感の中、七瀬は自分が膨張しきった水風船のように破裂した。
真っ白に染まった意識と浮遊感。
ドクドクと胎内に注入される精液があまりに熱く、そしてビクビクと震える男根も力強く、七瀬はただただそれを甘受するしかなかった。
たった一度の敗北。
その代償はあまりに大きく、そして激しかった。
せめてもの救いは、平蔵が意識を取り戻す様子がないところ。
そこだけは安堵しながら、排泄器官で射精を受け止める。
冷たい倉庫の床に、熱い七瀬の汗が滴り落ちていった。

慣れないその行為は七瀬の肩を震わせたが、それが快楽によるものではないと彼女はただ自分に言い聞かせるだけだった。

第三話「下船」

肛姦とはいえ眠る恋人の横で中出しされた七瀬は口惜しさで目尻に涙が溜まった。
眉間に皺を寄せて歯を食いしばり、何とか涙を流すことだけは堪えた。
喧嘩で負けたこと。
平蔵を助けられなかったこと。
一度ならず二度までも肛門を犯されたこと。
それら全てが無性に悔しかった。
今すぐ暴れて神田と篠塚をコテンパンに拳を振るってやりたかった。
しかし手錠に繋がれてそれも叶わない。
それどころか今も尚、男根を根本まで肛門にねじ込まれ、ドクドクと精液を注がれている。
自分の身体を好き勝手に陵辱され、男の身勝手な快楽のために使われている。
男が相手だろうが身を守れるように、そして大切な人を守れるように鍛えてきた自負が傷つけられる。

（……畜生……こいつら、ぶっとばしてやる……！）

心の中でそう思いながらも、現実の彼女は四つん這いで肉穴を使い篠塚の射精を満足させてやる肉便器だった。

肛門の中で脈打つ男根がようやく収まりを見せると、篠塚は満足したかのように一息ついて腰を引いた。

男性器が引き抜かれた肛門はパックリと口を開き、そしてそこからどろりと精液が太い糸を引いて地面に滴り落ちた。

「こっちの方でも強敵だったな」

篠塚に冗談交じりでそう言われたのが余計に屈辱を煽られる。

気が付けば目の前に神田が片膝をついて腰を下ろしていた。

「どうだったかな？　たまにはこういう余興めいたセックスも乙なものだろう？」

七瀬は不自由な体勢で神田を見上げて睨みつけた。

「ふざけんなボケナス。船を下りたら覚えてろよ」

「ふふ。君達がこのまま無事に船を下りられると思うのかい？」

微笑で語られたその言葉に七瀬は多少なりとも危機感を覚えた。

神田が続ける。

「冗談だよ。君達には傷一つつけずに船から下ろす。約束しよう。私達は決して暴力団ではないのだから」

「よく言うぜ。たとえ合法ドラッグでも同意も無しに酩酊させてヤってんなら準強姦罪だし、その中に未成年がいたら尚更ヤベーだろ」

神田は取り乱した様子もなく答える。

「逆に言えばその程度の違法性しかないということだ」

その口ぶりからは、容易に揉み消せるという自信が窺えた。

「自分達で言うのもなんだが、この船には黒い噂が尽きなくてね。やれ人身売買や違法薬物の温床になっているだの。そんな事実は無いのだが……火のないところに煙を立てたがる輩もいる。君達の依頼者もそういう類いだったのだろう。不運だったと諦めるんだな」

「今あたしのこの状況はどうなんだ？　正当な拘束か？」

全裸に手錠。そして合意なき性行為。

「随分と楽しませてもらったよ。君は自分で抱くだけでなく鑑賞するだけでも十分に価値のある女だ」

「ふざけんじゃねぇっ！　船を下りたらどうなるかわかってんだろうな！」

「どうにもならんよ。繰り返すが私達は暴力団でもなんでもない。君達を海に沈めたりなどしない。五体満足で船を下りてもらう。しかしそれで終わりだ。君が泣こうが喚こうが警察は動かない」

神田の背後には揺るがない絶対的な自信が見える。

きっと同じようなケースが今までに何度もあったのだろうと七瀬は推測する。

「……あたしをそんじょそこらの腰抜けと一緒にすんじゃねえぜ」

「勿論だ。私は君を過小評価していない。それどころか心酔すらしている」

「その割にはその余裕が気に入らねえな」

「君はまず警察に駆け込むことすらできないだろうからね」

「はぁ？　一体なにを言ってやがる……」

訝しむ七瀬に対して神田は自分の携帯画面を見せる。

そこには七瀬が篠塚に犯されている動画が再生されていた。

「っ！」

七瀬は言葉を失う。

「実を言うと先程私の個室での蜜月の時間。あれも録画されている」

神田が言葉を続ける。

「君は強く、そして情け深い女性だ。自分が傷つくことは耐えられても、愛しい恋人を傷つけることは許せないのではないかね？　君が騒ごうとすればこの動画達はたちまちインターネットの広大な海に流出して君の恋人の目にも映るだろう。勿論私はそんなことはしたくはないがね」

表向きはそう口にしながらも、七瀬の絶望を愉しんでいるのは隠しきれていなかった。

「……クソ外道が」

「心外だな。不当な侵入者に対して寛大な処置だと思うのだが」

「職務規約に反していても、ケツの穴まで犯されるなんて書いてなかったぜ変態野郎が」

スーツを着直した篠塚が七瀬の傍に足を運ぶ。

無表情で彼女を見下ろした。

「よく喚く雌犬だな。どなたを前にしていると思っている。口の利き方から躾けてやろうか」

足を振り上げた。

しかしその瞬間、神田が制止する。

「やめたまえ。彼女は私のお気に入りだ。痛めつけることは一切許可しない」
篠塚は素直に足を下ろした。
「了解しました」
そんな篠塚を七瀬は鼻で笑う。
「従順な飼い犬で結構」
篠塚の表情は変わらなかったが、彼が苛立ちを覚えたことは七瀬にも伝わった。
「無様な格好を晒して減らず口だけは達者だな」
「鎖で首を繋がれているよりかはマシだよ」
「肛門から精液を垂れ流している精液便所がなにを言う」
「あ？　そういえばさっきまでなにか入ってたな。存在感が薄くて気づかなかったけどよ」
そのやりとりを聞いて神田は喜色満面で手を叩く。
「その美貌に似つかわしくない気の強さ。珍しい色の宝石だ。是非とも大切に磨きたい」
「部下にケツ掘らせてるのを見学して興奮するような変態オヤジに磨かれる場所はあたしの身体には一つもねーよ」

「そうかもしれんな。しかし心はどうかな」
「尚更ねーよ」
即答する七瀬とは対照的に、神田はゆっくりとした動きで内ポケットに手を伸ばした。
取り出したのはアトマイザー。いわゆる香水噴霧器。
「これの中身は……まぁ今更言うまでもないね」
中には透明の液体。
七瀬は険しい表情でそれを睨みながら呟く。
「……ヘブンズダスト」
「これの効能は君も知っての通りだ」
神田は身を屈めて七瀬の顎を持つと、彼女の鼻先にヘブンズダストを何度か噴射した。
七瀬は首を捩じって息を止め、少しでもそれを吸入することから抵抗する。
「ふふ。無駄だよ」
神田の言葉通り、七瀬の努力が通じることはなかった。
待つこと数分。

七瀬の身体をあの酩酊感が再び襲う。
「熱くなってきた頃合いかな？」
神田の目に映るのは、篠塚に犯された余韻が醒めたはずの七瀬の肌。そこに汗粒が浮かび始めている。
そして触ってもいないのに腰をくねらせ、内腿に愛液を垂らしていた。
呼吸も浅い。
「……くそ……ぜってーこれ、合法じゃねーだろ……」
「何度も繰り返すが合法だよ」
「……こんなの……信じられるかよ……」
喋れば喋る程、息苦しそうになっていく。
しかしどこか物欲しそうだ。
「まぁ君が信じようが信じまいがどちらでも構わないがね」
神田はそう言いながら上着を脱ぐと篠塚に預けた。シャツ等もそれに続いて脱いでいき全裸となる。
七瀬の瞳は薬の影響で潤んでいた。
そして見つめるのは、今一番欲しいもの。

勃起した神田の陰茎。
篠塚程には反り返ってはいないものの、その強靭さと何より野太さは引けを取っていない。
「そんな熱く見つめられると私も気恥ずかしさを覚えるよ」
くつくつと神田が笑う。
七瀬は、ふっと正気に戻って視線を陰茎から逸らした。
（今あたし……無意識にあいつのちんこ見てた……）
「理性を保っているだけでも立派なものだ」
神田の言う通り、七瀬の頭の中はグルグルと回り始める。
欲するのは男の身体だけ。
雄と交わりたい。
その欲望が脳天から爪先まで支配する。
ひんやりとした倉庫の中で蒸気機関車のような熱を持つ。大粒の汗が浮かんでは滴った。
（……くそっ……鎮まれ……鎮まれ！）
七瀬は必死に下唇を噛んで邪念を抑え込もうとする。

しかし沸き起こる性欲はマグマのように煮え立っていた。
「強い女性が困難に立ち向かう姿というのは美しいものだ」
神田は小瓶から錠剤を一粒取り出してそれを口に放り込む。
「これは男性版のヘブンズダストのようなものだよ。とても優れた滋養強壮剤だ。といっても、もう聞こえていないかな？」
その言葉が示す通り七瀬の視界が揺れる。
耳に入る言葉もどこか胡乱（うろん）だ。
「この短時間で二度目のヘブンズダストを吸入したわけだからな。その効果は倍増される」
そんな簡単な説明も乱雑な暗号のように聞こえる。
「さて、お楽しみはこれからだ。せっかく恋人という観客がいるのだから、一回戦で終わっていては勿体（もったい）ない」
神田はそう言いながら仰向けに寝た。
「何よりやはり君のような女性は、鑑賞だけでなく自ら抱くことに価値がある」
神田の目配せで篠塚が動く。
四つん這いになっている七瀬の脇を持つと、そのまま立ち上がらせた。

その無抵抗ぶりはまるで発熱した幼児のよう。
そして神田の腰の上に座らせる。
その際に挿入できるよう、神田は陰茎の根本を持って肉槍を真上に向けた。
筋肉が弛緩した状態の彼女を、騎乗位で挿入させるのはそれほど手間が掛かる行為ではなかった。
「あぁっ、あっ！」
全体重を神田に預けると、肉棒が根本まで刺さる。
それだけで七瀬の全身はビクビクと打ち震えた。
神田が言う。
「篠塚。手錠を外してやれ」
「手錠をですか？　しかし……」
「お前もヘブンズダストの効果は知っているだろう。もう何もできんさ」
命令に一瞬戸惑うことで難色を示す。
そんな篠塚に神田が言う。
「それともなにかな。万が一でも次に彼女と立ち合う機会があれば、今度は負けるとでも？」

「いいえ。それはありえません」
篠塚は即答すると七瀬に嵌められていた手錠を外した。
「ようやく楽にしてあげられたね。その代わり身体の自由は奪ってしまっているが」
神田の言う通り、七瀬は上体を起こすのだけで精一杯だった。
「どうした？　身を起こしているのも辛いだろう？　ほら、倒れ込んできなさい。受け止めてあげよう」
神田は両腕を開いて七瀬を抱きとめる体勢になる。
しかし七瀬はそれを拒否。
意地でも背筋を反り返すように伸ばす。
薬によって渦巻く性欲。
真っ当な精神力では抗うことのできない肉欲。
そんな濁流（だくりゅう）に呑み込まれながらも、朧気（おぼろげ）な意識の中で彼女は誓う。
（……意地でも……平蔵の前で……こいつとは……）
その意図を神田は察する。
「なるほどなるほど。恋人の前で他の誰かとキスはしたくないということかな？」
「……ったりめぇ、だろが」

「健気な姿だ。涙すら誘う。彼の目の前でアナルセックスと、今こうして普通に騎乗位で挿入しているのにキスだけは抗うか」

その口調はどこか小馬鹿にしているようにも聞こえた。

それでも七瀬は譲れない想いがあると言わんばかりに奥歯を食いしばる。

「君の唇と舌は先程味わったが極上の口当たりがした。是非君の恋人の前でもう一度満喫したかったのだが……」

ヘブンズダストの効能で七瀬の体温は高い。

こめかみから汗を流し、膣内の柔肉はトロトロに蕩けて肉棒を温めるように抱擁する。

そんな中でも七瀬は無理やり口端を持ち上げた。

「……残念だったな……テメェとキスなんざ二度とごめんだよ」

「ふふ。そういう意地っ張りなところも惹かれるよ」

神田はそう言うと七瀬の両手を掴んだ。それだけで七瀬の肩が震える。

七瀬の全身は性感帯と化している。

（こんな奴に手を握られただけで……頭がおかしくなりそうだ……）

改めてヘブンズダストの効能に戦慄する。

対照的に神田の目は好色に濡れた。
「先程はバニースーツを着用していたからゆっくりと目にする機会がなかったが、随分と綺麗な色をしている」
その視線は七瀬の乳輪に向けられている。
桜色の乳輪に、ぷっくりと愛らしい乳首が勃起している。
そしてたわわな乳房が深い谷間を作り、それがやけに見事な張りとツヤを強調させている。
（勝手に見てんじゃねえよ！）
心の中で怒号を吠えるが、口に出す余裕はない。
色々と口に出す割には、神田の方からそれ以上なにかを仕掛けてくる様子はない。
腰すら振らない。
それがなにを意味するか七瀬は察した。
（こいつ……あたしから腰を振るのを待ってやがる……確かに身体はちんこが欲しくて疼いて仕方ねーけど……）
七瀬は平蔵の方をちらりと見て、少しでも理性を保とうとする。
その有様を見て神田が笑う。

「恥じることはない。ヘブンズダストを吸った女性は皆、狂ったように男根を求めて腰を振る」

七瀬が必死に堪えているのが手に取るようにわかる。

「そんなに恋人の存在が気になるかい？　大丈夫だ。あと数時間は起きんよ。ただし君があられもない大声を上げたらわからんがね」

「……誰が……そんな声」

「先程私の個室では可憐な声で鳴いていたではないか」

「そ、それは……くぅ……」

七瀬はやたらと腰をモジモジさせた。

（やべぇ……腰振りたくて仕方ねぇ……ちんぽ欲しくて頭がどうにかなっちまいそうだ）

「あまり我慢をするのは、身体に毒だよ？」

（平蔵の前で……だらしねーことできるかよぉ……）

強い意志を固める七瀬に対して、神田が僅（わず）かに腰を揺らす。

「あぁっ、あっ！」

それだけで絶頂に匹敵する快楽が頭の中で響いた。

身体は七瀬に腰を振れと命令する。
しかし彼女は歯を食いしばった。
（この……程度ぉ……）
多少の粘膜の擦れだけで目の前が真っ白になる。
薄れる自意識の中で七瀬は、とあることに気づいた。初めてこの薬を使われた時と条件が一つ違う。
それは恋人の存在の有無ではなく……。
（……こいつも生ちんぽじゃねぇかクソ野郎っ！）
敏感になった膣肉は挿入された男性器が、なんの避妊具も装着していないことを教えてくれる。
熱さ。硬さ。脈打つ血管。
それら全てをダイレクトに伝えてくる。
一瞬でも気を抜けば意識を失いそうな程の桃源郷に身を晒しながらも七瀬は口を開く。
「……てめぇ……さっきは病気がどうとかで……ゴムしてたろうが……」
「いやなに。篠塚が羨ましくなってね。それにやはり生で君を抱かないのはあまりに

勿体なさすぎる」
神田が喋る度に横隔膜が上下する。
それはほんの微かではあるが、神田に跨った七瀬への振動を意味する。
ヘブンズダストの前ではそれだけでも致命傷。
「あっ、あっ♡」
ビクン、ビクンと肩や背中を震わせる。
その震えは多少なりとも腰に伝わり結合部を摩擦させる。
「やっ、あぁっ、あつい♡」
それはまるで焼けた鉄板の上で躍っているかのようだった。
幸い痛みではなく快楽ではあるが、逃げ場所がなく際限なく連鎖する。
一度その快楽に手を掴まれれば、もうその誘惑には逆らえない。
(腰、振りたい……思いっきり生ちんぽをおま○こで擦りたい……!)
薬によって生み出された欲望が理性を押し潰していく。
恋人の前でそんなはしたないことはしたくない。
そんな微々たる願い。
欲望と願望がせめぎ合う。

その度に恋人の方をチラ見する。
そんな七瀬を優しく誘惑する神田。
「大丈夫。彼なら見ていないよ。だからほら。君がしたいようにすればいい。全身の筋肉が弛緩していても、腰を前後させるくらいはできるだろう？」
「余計なこと……くっちゃべってんじゃねーよ……」
「ふふ。本当に愛らしいな君は」
そう言いながら軽く腰で七瀬の身体を上下させる。
「ああんっ♡」
それだけで全神経に快楽が行き巡る。それはまるで電流のようで、頭の思考回路をショートさせようとする。
「ほら、もっと自分に素直になりなさい」
続けて二度、神田の腰が七瀬を揺らす。
「あっ♡　あぁっ♡」
その度に彼女は達した。
しかし満たされることはない。
もっともっと欲しい。

薬によって作られたそんな声が頭の奥から聞こえる。
神田の腰はそこで止まる。
だからといって七瀬に安穏が訪れるわけではない。
余計に呼吸が荒々しくなる。
（もっと……もっとおちんちんが欲しい……）
無意識にそんな肉欲が頭の中を満たす。
七瀬は緩慢に首を横に振り、そんな欲情を振り払おうとする。
しかし化学物質によって作られた性的興奮は七瀬の貞操観念など嘲笑うかのように吹き荒れる。
「さぁ、私はもう動かないよ。どうする？」
浅い息遣いの七瀬はもう全身を汗で濡らしている。
「どうも……こうも……しねぇよ……カスが」
そんな憎まれ口も声色は死にかけの羽虫のように弱々しい。
「そんなに我慢をして。もう発狂寸前だろう？」
神田の言葉は正しかった。
ヘブンズダストの効能は尋常ではない。

その誘引にいつまでも我慢などできるはずもなかった。
七瀬の視界が揺れる。
思考も定まらなくなってきていた。
（……あれ……あたしなにやってんだっけ……なんだか気持ちいいな……）
瞬時にハッと気が付き自戒する。
（……馬鹿野郎。きちんと気合入れ続けろ……）
しかしどんな堅固な精神であろうが、やがてはヘブンズダストに溶かされる。
神田がくつくつと笑っている。
「……なに……笑ってやがる……」
七瀬にとってその笑みがあまりに不愉快で尋ねる。
「もうそろそろ我慢の限界といったところかな。やはりこの瞬間が一番愉しく、そして美しくもある。鋼鉄のような意志が極度の高温で知らず知らずのうちに固体を失っていくその様子がな」
「一体……なにを……」
そう言いかけて、七瀬は信じられないものを見た。
自分の腰が、非常にゆっくりではあるが前後に揺れている。

「な、なんで……」
七瀬は驚愕する。
自分の身体が勝手に動いている。
その腹の内を探って神田が言う。
「勝手に身体が動いているわけじゃないさ。頭が命令をしているんだよ。耳を傾けてみてはどうかね」
七瀬は耳を澄ますまでもなかった。
脳内でスピーカーを大音量でガンガンと鳴らされている。
(思いっきり腰を振りたい！　ちんぽが欲しい！)
ぎり、と奥歯を歯噛みする。
「うる、さい……黙れ」
それは神田ではなく、自分自身への言葉。
「さぁ。もう恋人への操(みさお)は十分捧げただろう。私が証人だ。だからその身体を解放させてやりなさい」
汗が首筋を流れる。それだけでイキそうになる。乳首とクリトリスはもう今すぐオナニーしたいくらいにパンパンに膨張している。

「それ以上の我慢は本当に精神に支障をきたすぞ？」
神田の言葉に七瀬は無理やり不敵な笑みを浮かべた。
「彼氏の前で猿みたいに腰振るくらいならなぁ……ぶっこわれちまった方がマシだっつうの」
「その心配は要らない。君はきっと男を貪る」
七瀬は歯を食いしばりながら答える。
「あたしが……平蔵以外のちんぽなんて……」
欲しがるものか。
そう続けたかった。
しかし腰の前後運動は徐々にその幅を大きくしていく。
「やめ……ろっ！」
自分の身体に睨みを利かせるが効果はない。
やがてそれは言い訳しようもない程のグラインドに変化していく。
「くそっ、くそっ、くそっ！」
悔しがる七瀬とは対照的に神田は愉悦で笑う。
「ははは。随分といやらしい腰つきだな」

事実、七瀬の腰つきはまるで娼婦のような騎乗位だった。
「あっ、あっ、あっ、あっ♡　く、くそぉっ……」
「どうだ？　ずっと欲しかったんだろう？」
七瀬は心の中で反抗する。
（うるせえっ！　うるせぇっ!!!）
しかし口から零れる言葉はそんな憤りとは裏腹に、身体が求めてやまない快楽に正直だった。
「欲しいっ♡　生ちんぽ、ずっと欲しかった♡」
息を切らしながらそう言い、腰を艶(なま)めかしく前後に振る。
「ああっ、すごっ♡　ずっとイってる……おま○こ、イキっぱなしになる♡」
ダムが決壊したように七瀬の欲情が溢(あふ)れ出す。
「硬いおちんぽ、気持ちいい♡　ごりごりって、奥まで擦れるっ♡」
「正直になったご褒美をあげよう」
神田は得意気に腰を突き上げる。
「あんっ♡　あんっ♡　あんっ♡」
七瀬は豊乳を派手に揺らしながら、あられもない声を上げる。

「すごいっ♡　勃起ちんぽ♡　ズンズンって突き上げられるっ♡」
七瀬の肩から背中は絶え間なくビクビクと痙攣している。
絶頂が止まらない。
口端から涎が垂れ、目の焦点が合わない。
手足が自由なのに暴れることもできない。
それでも時折平蔵の方を窺い、そして心の中で謝罪した。
（まただ……結局この薬には勝てねぇのか……悪ぃ平蔵……）
幸いにも平蔵が起きる気配はない。
神田と両手とも恋人繋ぎをしながら、その神田の腰の上で腰を前後する七瀬のすぐ横で目を閉じている。
どんなに七瀬が激しい喘ぎ声を上げようとも、その瞼が上がることはない。
「あっあっあっ、はぁんっ♡　生ちんぽ、もっとおま○こしてっ♡」
七瀬は少しでも喉から出るその淫らな声を絞ろうと努力する。
しかしヘブンズダストの前では全てが無意味だった。
「ひぃっ♡　ひっ、いっいっ♡　もうダメっ、溶ける……全身ドロドロで、わけわかんなくなっちゃう……」

ついには上半身を倒して、神田と抱き合う形になってしまう。
メロンのような乳房がむにゅりと神田の胸板で潰れる。
そんな体勢になっても七瀬の方から腰を振り、神田もそのリズムに合わせて突き上げた。
「あっ、あっ、あっ♡　ちんぽ、奥っ、刺さるっ♡」
「彼氏とじゃこんなセックスは絶対に無理だろう？」
そう言いながら神田が七瀬の唇を吸う。
七瀬はなんの抵抗もできないままそのキスを受け入れた。
神田と舌を絡ませ、そして唾液を交換した。
神田に歯茎を舐められる度に絶頂し、お返しと言わんばかりに神田の歯を舐めた。
七瀬の方から神田の唇を甘噛(あまが)みする。
丁寧に、ねっとりと。まるで恋人にするかのようだった。
七瀬は自分がなにをやっているのか一瞬理解できなかった。
快楽で融解したはずの理性は、ほんの少しだけ残っていた。
それが憤怒を覚える。
自分への怒りだ。

（このままこいつの唇を噛み千切ってやる……）
そう思ったのも束の間だった。
途切れない絶頂の白い波がそんな反骨心を粉々に打ち砕く。
それでも彼女は一矢報いたいと願い、その結果少し強めに神田の唇を噛むことに成功した。
それは痛みを与える程ではないが、ヘブンズダストに奪われた意識と身体の自由を彼女が取り戻した故の一撃だった。
神田はそれを嬉しそうに笑う。
「君は本当に楽しませてくれるな」
神田は両手で七瀬の桃尻を掴んだ。
指先が弾力のある尻肉に食い込む。
そして怒涛の勢いで腰を突き上げた。
「あいっ、いっ、ひっ♡　ひぃっひっ、あひっ♡」
もう七瀬に反撃の余力はない。
「ちんぽっ、膨らんでる♡　ザーメンでパンパンになってる♡　あっあっあっ、射精ちんぽきもちっ♡」

もう恋人の様子を窺う余裕すらない。
「来る、来る……中出し来る♡　イキっぱなしのだらしないおま○こに中出し射精来る♡」
ただ男に抱かれる悦びを甘受する雌となる。
「いくぞ。七瀬君」
「あっ♡　あっ♡　来て、来てっ♡　おちんぽがザー汁出したくてビクビクしてる♡　あたしのおま○こに全部ビュービューって出してっ♡」
「ああ……すばらしい抱き心地だ……出るっ！」
「あああっ♡　来た♡　あたしも中出しアクメ来る♡　はぅっ、おちんぽ汁、熱い♡　おま○こ火傷するっ♡　イクイクイっちゃうっ♡」
七瀬の意識が数秒ヘブンズダストに呑み込まれる。
自分が誰で、なんのためにここにいて、誰に抱かれているのか。
そんなことは全て気にならない。
ただただ真っ白な雲の上でぷかぷかと浮かんでいる。
普通ならそのまま浮遊感に身を任せて快楽の虜になり続ける。
しかし七瀬は違った。

彼女には使命感があり、さらには恋人を想う気持ちがあった。
すぐに自意識を取り戻すと恋人の姿を確認する。
（……平蔵……情けねぇ彼女でごめんな……）
激しく継続する絶頂の中でも、彼女は胸を痛めて自己嫌悪する。
しかしこの快楽に勝つのは不可能だとも悟る。
そんな彼女が出した妥協案。
「そら、まだまだ私の精子をプレゼントしてやるぞ」
「……し、していい……私のおま○こ……精液便所にしていいから……彼氏には手を出さないで……」
「健気だな。いいだろう。彼には傷一つつけないよう篠塚に手配しよう」
それを聞いて彼女は、ふっと肩の荷が下りた。
しかし意識を失ったわけではない。
これから始まるのは無限めいた快楽の坩堝。
そこに陥れられた七瀬はただただ平蔵の隣で盛りのついた雌犬のように鳴き続けるしかなかった。

◆◆◆◆

「……う……ん」
平蔵が目を覚ます。
見慣れた天井に見慣れた部屋だった。
軟禁されていた部屋だ。
その部屋のベッドで横になっている。
気を失う直前の記憶は残っていた。
七瀬がピンチになっていて、それを助けに行こうとしたのだ。
そしてその七瀬がバニースーツ姿でパイプ椅子に座って自分の顔を覗き込んでいた。
「よぉ。起きたか」
平蔵は肩を落とす。
「お互いバレちまったか。今回は任務失敗だったな」
「ま、こんな時もあるさ」
「お前、怪我はないのか？」
七瀬は降参するように両手を上げる。

「別にないよ。綺麗に落とされたからな」
「そうか。それならまぁいいさ。しかし、お前より強い奴がいたんだな。それは計算外だったよ」
「むかつくから今からリベンジしに行ってやろうか」
冗談めいて七瀬は笑う。
「やめとけ。このまま穏便に時間が過ぎたら普通に船から下ろしてくれる。俺の得た情報じゃ、この船では大したことをやっていない。暴れた俺達が相変わらず手錠もされていないのがその証左だ」
「ま、平蔵がそう判断したんならそれでもいいさ」
「しかし改めて見てもすごい格好だな」
「だろ？　今度コスプレやってみるか？」
そう言って笑う七瀬の笑顔は自然だった。しかしどうしても隠せない落胆が見え隠れする。
平蔵は最初にそれを喧嘩で負けた悔しさだと受け取った。
「俺は何時間くらい寝てたんだ？」
「三時間くらいかな」

「じゃあ丁度この船が港に戻る頃か」
「多分な」
二人の会話を聞いていたかのように一人の黒服がドアを開けて顔を覗かせる。
「おい。あと一〇分程でゲストの下船が完了する。その後にお前らも下りろ。用意しとけ」
平蔵が応答した。
「一応聞くけど没収された小型カメラなんかは……」
「破棄したに決まってるだろ」
「……だよな」
七瀬が口を挟む。
「ちょっと待てよ。あたしにこんな姿で船下りろってか？」
彼女はバニースーツのままだ。平蔵も給仕係のユニフォームを着ている。
すると黒服は男女一式の服をそれぞれに投げつけてきた。
「お前らの服はそれだろう？　着替えておけ」
そして乱暴にドアが閉められた。
「よく、あたしらの服がわかったな」

「もうコンパニオンも添乗員も全員着替えを終えたんだろう。残ったのが消去法で俺らのってわけだ」
「ああ。なるほど」
七瀬は納得すると背中のジッパーを下げようとする。
それをじっと見つめる平蔵の視線を感じた。
「女の子が着替えるんだからあっち向いてろ！」
そう言って軽く蹴とばす。
お互い背中合わせで着替えをしながら平蔵は少し違和感を抱いた。
もう二人はそこそこ付き合いの長い恋人で、目の前での脱衣くらいで七瀬が恥ずかしがるとは思えなかった。
（まぁこんな特殊な状況だし、衣装も衣装だしでしょうがないか）
あくまで仕事中という意識が強いのかもしれないと納得する。
平蔵は着替えながら雑談を交わす。
「なぁ。お前に勝った男。どんな奴だった？」
暫く衣擦れの音だけが聞こえる。先程までのような軽快なテンポの会話は続かない。
「……さぁね。喋ったわけでもねーし。なんで？」

「そりゃあ気になるだろ。頼りの相棒を打ち負かせる奴がいたなんて」
「上には上がいるさ。年下の女にだってあたしより強いのはいる」
その話は平蔵も聞いたことがある。
少し前の話だが、軽い気持ちで訪れた小さな町道場。
そこの師範は七瀬よりも若い女性で、しかも何度試合をしても一本も取れなかったそうだ。
それとは別に今回の敗北に関しての言葉は、やけに苦味が濃いと平蔵は感じた。そしてそれをどうも無理やり隠しているようにも思える。
平蔵は着替えながら言う。
「別にお前が負けたから言うわけじゃないんだけどさ」
「うん」
「二人でこの仕事、もう終わりにしないか？」
「転職しようってこと？」
「そういうこと」
「急だな」
「結構前から考えてたんだぜ」

「そうなんだ」
「やっぱり危ない場面にもよく遭遇するしさ。これからのことを考えると、もっと安定した仕事に就きたいというか」
「これからのことって？」
平蔵の頭の中には『結婚』の二文字しかなかった。
勿論七瀬も勘づいている。その上で茶化すように聞いた。
「そ、それはまぁ……追い追い話すけど」
七瀬はくすくすと笑う。
そして軽やかに言った。
「いいよ」
その間髪容れない返事に思わず平蔵は聞き返す。
「え？」
「一緒に転職してもいいよっつってんの」
「……意外だな。もっとごねられるかと思った。こんなエキサイティングな仕事はないとか」
「ま、そういうのはジム通いで、ある程度発散させられるしな」

「そうか。じゃ、じゃあいいんだ。うん」
思いもよらず、話がトントンと進んだ平蔵は話題を変える。
「しかし肩透かしな船だったな。巨悪が潜んでそうな雰囲気だったのに」
「まぁそのおかげで潜入トチっても五体満足で帰れるわけだし」
「それもそうだな」
平蔵はやはり何となく七瀬の言葉が気になった。
どこか萎縮しているような気がしたのだ。
「あのさ。俺が気絶している間になにかあったか？」
「あ？　別に何もねーよ。ていうか、あたしも同じくらい気絶してたし」
即答だった。
しかし、どこか嘘くささも感じる。
なんだか喉にモノがつっかえたような気分で着替えを続けた。
やがて二人が着替えを終えると黒服が再度顔を出した。
「出ろ」
二人は黒服の前を歩かされる。しかしなんの拘束もない。
思わず平蔵が口に出す。

「随分と不用心なんだな。俺達が逃げ出すとか考えないのか」
「逃げたければ逃げればいい。何度も言うがこの船で見られたらまずい場所などないんだからな。なんなら俺に残業手当が出るならこのまま見学ツアーに付き合ってやってもいいくらいだ」
「あ、そう」
平蔵は乗船前の嫌な予感はなんだったんだろうかと自分の力量不足を恥じる。そういう意味でもこの仕事から身を引くいいチャンスなのかもしれない。
もう船の中は静かだった。
あちらこちらで添乗員が掃除をしているくらいだ。
「ちなみにお前らは規約違反で日給は出ないからな」
「へいへい」
七瀬が肩を竦めながら答える。
外に出ると冷たい夜風が吹いていた。
二人は思わず身を縮こませる。
港に停泊中のグランド・プリンセス号はやはり間近で見ると圧倒的な存在感を誇っていた。

照明を落としていても、その豪華絢爛な雰囲気は失っていない。
相変わらず不吉な予感を平蔵にもたらす。
しかし彼はその胸のザワつきを無視するしかなかった。
事実として、彼ら二人は傷の一つもなく船を下りたのだから。
「二度と来るなよ」
背中に黒服のそんな声を受けて二人は身柄を解放される。
港には他に人気（ひとけ）は感じられなかった。
「……冷えるな」
「ああ」
平蔵の一言に七瀬が簡易的に答える。
任務失敗の責任感と同時に、怪我なく下りられた安堵感で余計に寒々しく感じられた。
二人は真っ暗な港をゆっくりと歩く。
「帰ったら報告書と一緒に辞表も提出しないとな」
そう呟く平蔵に七瀬が尋ねる。
「なぁ。探偵辞めて安定した仕事探すのってさ、あたしと結婚も考えてるってことで

いいの？」

七瀬があっさりとした口調でそう言いのける。

平蔵はどきりと心臓が跳ね上がり、瞬時にうまく返事ができなかった。

そんな恋人の様子がおかしかったのか、七瀬は声を上げて笑う。

「あはは。わかりやすいな。平蔵は」

彼の背中を七瀬は嬉しそうにバンバンと叩きながら言葉を続けた。

「格好良いプロポーズ、期待して待ってるからな」

「あんまプレッシャー掛けんなよ」

くすくすと笑いながら二人は港を離れていく。

巨大な船が纏う凶兆などなかったかのように。

第四話　「リベンジ」

雪がちらほらと舞い散っていた。
雪の結晶に夕焼けが乱反射して天然のイルミネーションのように輝いている。
七瀬はマフラーを巻き直して、一段と増す寒さにぐっと身体を強張らせた。
街行く人々の吐く息はどれも白く染まっている。誰もが寒さに首を窄めていた。
七瀬は街灯に背中を預けて空を見上げた。
それほど雲は見えない。
明日は晴れるだろうか、などと考えていると慌てた足音が近づいてくる。
「七瀬〜。悪い。待たせた」
ビジネススーツを着た平蔵だ。
探偵を辞めた二人は現在別々の職に就いている。
平蔵は製造業での営業。
七瀬は中小商社にて事務職。
「そろそろ新しい仕事慣れてきた？」

暖を取るように平蔵の脇に寄り添って腕を組む。
「どうだろうな。まぁ不倫現場を抑えるために一晩中車の中で張り込むよりかは楽だ。そっちは？」
七瀬はつまらなさそうに肩を竦める。
「極めて平和だよ。セクハラしてくる上司とかいたら蹴っ飛ばしてやろうかと思ってたけどさ。皆いい人ばかり」
「そりゃあ良かった」
そんな会話を挟みながら二人は歩きだす。
平蔵が予約していた鍋モノ屋で二人が話題にするのは新しい住居のこと。
結婚のプロポーズはまだだが、とりあえずは同棲をしようということで話を進めている。
お互いの職場の中間辺りの地域で探しているが中々見つからない。
特に平蔵が頭を悩ませているのは部屋の数だ。
結婚を前提とした同棲なのは七瀬もわかっているはず。
だとしたら子供は欲しいのか否か。
それを踏み込んで聞けずにいたが、覚悟を決めて訊いた。

「七瀬はさ。子供って欲しい？」
そう聞かれた七瀬は煮えた白菜を口に咥えてポカンとしていた。
そして当然だと言わんばかりに返答する。
「平蔵の子供？　欲しいに決まってんじゃん」
真正面からストレートのパンチを顔面に喰らったような気持ちになる。
「お、おう。そうか」
「なに照れてんのさ」
七瀬が呆れたように笑う。
「別に照れてねーよ」
「嘘。頬が引きつってるし耳が赤い」
平蔵は苦虫を噛み潰したような表情になる。
（こりゃ結婚したら尻に敷かれるかな……。いや、今の時点で、もうそうなってるか）
そんなことを考えながら、二人で温かい鍋を囲んだ。

◆◆◆◆

幸せな時間を過ごすと二人は地下鉄の駅まで一緒に歩いていく。
今まではデートのついでにそのままどちらかの家に泊まることが多くあったが、最近はそれがあまりない。
同棲が目の前に迫っているのだから、無理に一緒の時間を作ろうという意識が希薄になっているのだ。
「それじゃあな」
「うん」
真逆の方向にある駅のホームにそれぞれ足を向けた。
七瀬は向かいのホームから平蔵の背中が電車に乗るのを見送ると再び地下鉄の駅から地上へと戻る。
ただでさえ慣れない仕事に就いて心身共に疲れている。なのに七瀬の目つきは平蔵と別れてからどこか尖鋭だった。
それは今から狩りに出かける肉食獣を思わせる相貌。
もうすっかりと陽は暮れて、雪の勢いは増していた。
しかし鍋のおかげもあってか、七瀬は寒さを感じていなかった。
これは七瀬の心身が戦闘モードに切り替わっている証拠だ。

もう探偵は辞めた。
しかし一つだけ残してきたものがある。それを奪い返しに行く。
夜の街を歩いた先にはラブホテルがあった。
七瀬は視線や尾行がないのを確認するとそのホテルへと入っていく。
ロビーで一度携帯を開いて、指定された部屋を確認する。
エレベーターの中では腕を伸ばすなどして、軽くウォーミングアップをした。
廊下を歩いて指定された部屋の前に立つ。
一度大きく息を吸って、そして吐いた。
ノックもせずに部屋に入る。
一見するとなんの変哲もないラブホテルの一室だった。
ベッドには金色の短髪で、黒いスーツを着た男が腰掛けている。
「お待たせしたかな。篠塚さんよぉ」
玄関で靴を脱ぎながら剣呑な声を発した。
篠塚は目つきの悪い細い目をさらに細くすると立ち上がった。
「いや。時間通りだ。俺は待ち合わせの五分前には到着していないと気が済まないタチでね」

ラブホテルに男女が二人。
何も珍しい光景ではない。
しかしその場の空気は到底愛を育みに来たカップルとは思えない。
息苦しい程の殺気が部屋に充満する。
「まさかタイマンでリベンジをそちらからお誘いしてくれるなんて思ってもいなかったぜ。しかも景品つきとはな」
「神田様のご要望だからな。あの方はこういう余興がお好きなんだ」
「それにしてもラブホに呼び出されるとはな」
「嫌いか？　こういう場所は」
「いいや。喧嘩をするには丁度いい。せまっ苦しくて、物がゴチャゴチャと置いてある。それよりも約束は守ってくれるんだろうな」
「ああ」
篠塚はそれだけ言うと、ポケットから携帯を取り出した。
「動画は全て、この中に入っている。お前が勝ったら好きにしろ」
船の中で七瀬が犯された動画。
勿論データが複製されていないわけがない。

しかし七瀬の立場からはその存在を無視することは不可能だった。
何よりリベンジの機会をみすみす逃す手はなかった。
「お前は信じないだろうが、動画のデータは『まだ』複製していない。今日消去してしまえば、あの痴態を無しにできる」
「『まだ』、ね」
「そうだ。神田様のご要望があればその時にする」
「時間も守るし律儀で正直なんだな」
「俺はただの番犬だからな。御主人様に命令されたことを遂行するだけだ」
「その割には楽しそうに見えるぜ」
七瀬が構える。
もうゴングは鳴っていた。
対峙する篠塚はだらんと両腕を下げたままだが隙がない。
「言っただろう？　俺は強い女が好きだ。もう一度お前を犯したい」
「だから場所を手間暇掛からないラブホにしたってか。合理的だな」
じり、と半歩だけ七瀬が間合いを詰めた。
互いの距離は二メートル。まだ少し遠い。

「あの船から下りて何人かの女を抱いたがどれもつまらなかった」
「あたしに惚れたか？」
「さあな。ただベッドの上でだらしなく喘ぐお前を想像すると勃起する」
「ド変態野郎！」
先手を仕掛けたのは七瀬だった。
一気に距離を詰めると右脚の上段回し蹴りで側頭部を狙う。
篠塚は屈んでそれをやり過ごす。狙うは七瀬の軸足。しかしその軸足が消えていた。
七瀬は回し蹴りの回転を利用して、そのまま左脚での後ろ回し蹴りを放っていた。
足刀が今度こそ篠塚の頭部を捉えた。
回避は不能。堪らず腕を上げてガードする。
七瀬の連撃は止まらない。
半身の状態でさらに距離を詰めて肘鉄で三度顔面を狙う。
篠塚はその肘を取って背負い投げの要領で七瀬を投げ飛ばした。
七瀬がまるで猫のように空中でくるりと回ってみせて、ベッドの上に着地した。
一連の攻防を終えて一息つく二人。
篠塚が獲物を前にした蛇のように笑う。

「やはり、お前はいい」
「イイ女かい？」
「ああ。技の鋭さ。重さ。全てが合格点だ」
「女を褒める時は容姿や性格を褒めろや！」
七瀬は足の指でベッドのシーツを摘まんで蹴り上げる。それは煙幕代わりとなって篠塚の視界を封じた。
ベッドの上から飛び蹴りを敢行する。
しかしその攻撃はフェイク。
今までの執拗な顔面狙いは全て布石。
実際に篠塚は顔面にガードを固めている。
七瀬は何もせずに篠塚の目の前に着地すると、シーツ越しに金的へと蹴り上げた。
絶対に決まった。
七瀬にそう確信させる一撃。
しかし蹴り上げた七瀬の膝を篠塚の右手が押さえている。
そして左手でシーツを取り払うと篠塚は無表情で言った。
「俺は勘がいい」

そして無作法に歩み寄る。
「どうした。もっと楽しませてみせろ」
七瀬が左の掌打で顎を狙うも軽くいなされる。
「その懐に隠してあるものは、いつ使うんだ？」
七瀬は思わず笑みを浮かべてしまう。強がりと、そして相手に対する感嘆の表情。
「本当に勘がいいんだな」
七瀬は懐に手を入れるとスタンガンを取り出した。
しかし篠塚が怯んだ様子もない。
「いいぞ。好きなだけ使え。俺達はアスリートでもなければ格闘家でもない」
しかし七瀬はスタンガンを床に落とす。
「気が変わった。素手でやらなきゃ気が済まねえ」
「お前のそういう勝気がすぎるところも嫌いじゃない」
七瀬は息を整えながら考える。
（畜生。思ってたよりも実力差があるな。しかし罠は撒いた……）
一旦間合いを取りながら七瀬が尋ねる。
「おい、気づかないと思ってんのか？」

「なにをだ」
「しらばっくれんなよ。明らかに打撃技を封印してんじゃねーか。投げか絞めか極めだけであたしを倒すつもりかよ」
「……神田様からのご指示だからな。みだりにお前の身体を傷つけるなと」
「悲しいぜ。こうまで露骨に手加減されちゃな」
「なら本気にさせてみろ」
篠塚が自身の懐を親指でトントンと叩いた。
「お前が破壊したいデータはここだ」
間髪容れずに七瀬から突進する。
(それで攻撃対象を誘導したつもりかよ！　いいぜ！　乗ってやる！)
ジャブを連打して篠塚の顔を狙う。
クリーンヒットこそないものの、完全に防ぎきることは不可能。
堪らず篠塚はガードを上げた。
がら空きになる懐。
(服の上から携帯をぶち壊して……)
強烈な前蹴りを携帯をしまった場所に仕掛ける。

篠塚がガードを下げる。
（……なんて都合のいいことは考えねーよ！）
前蹴りが中空で軌道を変える。
（お前を倒してから携帯はゆっくり破壊する！　これで寝てろ！）
必殺のブラジリアンキックが篠塚の顎にヒットした。
篠塚の膝が折れる。
（ここで決める！）
さらに追い打ちの飛び膝蹴りを顔面にぶち込んだ。
ガツンと鈍い衝撃音が響く。
（手応えあり！　やったか⁉）
トドメにもう一発。左のストレートを打ち込もうとした刹那だった。それは音もなく忍び込んでいた。
篠塚の右手が七瀬のみぞおちに密着していた。
拳を作ってはいるがそれだけで、なんの衝撃もなかった。
なのに七瀬の背中に悪寒が走る。
次の瞬間、七瀬は後ろに吹き飛んでいた。

膝をついていた篠塚がゆっくりと立ち上がる。
「……本気にさせたな」
七瀬は酸欠になったかのようにうずくまる。
極度の苦痛の中、自分が喰らった攻撃を反芻する。
（……ワンインチパンチかよ……）
篠塚が七瀬の前に立つ。
「俺に打撃を使わせた。やはりお前は強い。敗因は一つだけだ。お前が女だったというだけ。お前が男ならブラジリアンキックで俺はノックアウトされていた。性差による僅かな軽さ。それが勝敗を分けた」
「うる、せえ……まだ勝負は、ついて……」
「大した根性だ」
立ち上がろうとする七瀬。
篠塚は掌底で彼女の顎を殴打すると、今度こそ七瀬は糸が切れた人形のようにその場に倒れた。
（ちく……しょう）
勝負は決した。

「恥じることはない。紙一重の勝負だった」
そう言いながらドカッと勢い良くベッドの縁に座る。
「強い女を十分すぎる程に堪能した。これがその証拠だ」
篠塚の股間は勃起していた。
「この……変態野郎が」
「熱が冷めやらぬ内に鎮めろ。お前の口でな」
「……くっ」
「どうした？　お前が勝てば映像データ。負ければもう一度俺に犯されるという話だったはずだが」
「……わぁってるよ……足腰がまだ立たねーんだよ」
七瀬は剣呑な口調で負けを認めながらも、まだ映像データ奪取に向けて最後の手段を残していた。
（まだだ……まだ撒いた罠は残ってる……でも今じゃ駄目だ……こいつが完全に油断するまで……）
そんな企みを篠塚の勘は看破する。
「まだなにか企んでいるな」

「なぁに……ちんこ食い千切ってやろうと思ってただけさ」
「はっ。それは敵わんな。なら舌と手だけでまずは性処理してみろ」
いつ下剋上が行われるかわからない緊張感を伴うセックス。篠塚はそれを楽しげに笑ってみせた。
「へっ。ビビってんじゃねーよ」
七瀬はようやくダメージが抜けだした身体を四つん這いで篠塚の股間の前まで移動して、そして腰を下ろした。
そして無言のまま篠塚のベルトを取り、スラックスと一緒に下着を下ろしていく。
目の前の勃起した陰茎と睾丸が目に映る。
（下着を膝辺りの位置まで下ろして下半身を拘束して、せっかく目の前にある金玉をぶん殴るってのはどうだ？）
七瀬がそんなことを考えていると、篠塚が七瀬の脳天に手刀をトンと置く。
「先に言っておくが、俺の手刀はレンガを軽く割る」
「……へいへい」
（生半可な奇襲じゃ駄目だな。こいつの勘の良さを掻い潜るにはやっぱり確実な隙を作るしかない）

七瀬は一旦服従を演じることにする。
篠塚の下半身を完全に露出させると、呆れるように言い放った。
「相変わらず立派なモノをお持ちで」
「覚えていてくれたのか」
「忘れられるかよ。こんなもんケツの穴にぶち込まれて」
七瀬の言う通り篠塚の男根は勝ち閧を上げるように勃起していた。戦闘民族の肉槍といった様相で、負けん気の強い七瀬にすら威圧感を与える。
血管が浮かび上がる筋肉の塊である性器を、七瀬は無造作に掴む。当たり前だが平蔵にする時と比べて愛と優しさが欠如した握り方だった。そしてそのまま上下にシコシコと擦る。
「恋人にもそんな乱暴なやり方なのか？」
「んなわけねーだろ。つうかボコられた相手にそんな優しくできるか」
「普通は屈服して萎縮するように愛でると思うがな」
「ああ、うるせえうるせえ。文句言うならやらねえぞ」
ともかくそんな無愛想な愛撫でも篠塚の男根はさらに熱を帯び、グググと膨張した。
やがて我慢汁が滲んできた。

「ゴチャゴチャ文句言う割には感じてんじゃねーか」
七瀬が篠塚を挑発するようにそう言うと、舌で我慢汁を掬い取った。
そしてそのまま尿道口を舌でほじるようにグリグリと刺激する。
七瀬は自分に言い聞かせる。
(今は我慢。今は我慢)
そして右手で男根を擦りながら、亀頭に唇を押し付ける。
ちゅっ、ちゅっ。
七瀬の艶やかな唇によるキスで、陰茎はより悦んでいるように見える。
そんな風にフェラチオを続けていると、七瀬の胸に今まで抱いたことのないような感情が生まれる。
自分を打ち負かす屈強な男に跪いて奉仕する。
そんな未経験の屈辱が、どこか心地よい。
(なに考えてんだあたしは……)
七瀬は雑念を振り払おうとするが、篠塚の男根に唇を押し当てる度に胸の中で恍惚が広がるのを感じる。
「お前が自分を鍛えるのは、それ以上に強い男に犯される悦びを得るためじゃないの

か？」

「……んなわけねえだろ」

そう言いながらも、肉竿の裏筋に唇を丁寧に這わせていく。

ちゅ、ちゅ、ちゅ。

そして根本までキスを終えると、今度は舌の腹をいっぱいに使って裏筋を舐め上げていく。

七瀬は自分の心拍数が上がっているのを感じた。

彼女にはまだ逆転の策が残されている。それを達成するための緊張感なのか、それとも性的な興奮なのか曖昧になる。

仇敵（きゅうてき）を相手に性的興奮などするわけがないと意気込んでみても、心臓の鼓動はドキドキと五月蠅（うるさ）い。

目の前の男根があまりに雄々しくて、腹の奥がキュンキュンと疼いてしまう。無意識に平蔵のそれと比べてしまっている自分がいた。

（……馬鹿野郎。なに考えてんだ……）

自己嫌悪で眉をひそめる。

そして当然のように篠塚はそんな腹の中を探った。

「彼氏と比べてどうだ？」
「……別にどうもこうもねえよ」
「俺のモノの方が逞しいと感じているだろう？」
「……大して変わりゃしねーよ、こんなモン」
「自分より強い男の、恋人よりも大きい男性器を本当はもっとしゃぶりたいと考えているはずだ」
篠塚のその言葉に七瀬の胸が図星を指されたかのように跳ね上がった。
（この力強いちんぽを咥え込んでしゃぶる……）
ゴクリと生唾を呑み込む。
「どうした？　真顔になってるぞ？」
「う、うるせえ！」
七瀬は誤魔化すように鈴口を舌で突きながら、肉竿をシコシコと右手でシコり続けた。
船の中で強引に犯された時のことを思い出す。
あの時も胸がザワついた。
（あたしが本当は男に屈服されたがってるマゾな女だっていうのかよ……そんなわけ

……そんなわけが……）

葛藤する七瀬の前髪を篠塚が掴んだ。

そして冷たく重い口調で言う。

「しゃぶれ。歯は立てるな。他意を出さずに俺を気持ち良くさせるためだけにフェラチオしてみろ」

七瀬はその高圧的な命令口調に、何故か後頭部を殴られたような衝撃を受ける。

言いなりになれば楽になれる。

そんな声が腹部の奥から聞こえる。

七瀬は誘われるように亀頭を咥え込むと、そのまま唇を滑らせていく。

当初のように食い千切ってやるなどという害意は一切ない。ただただ純粋にこの男根に奉仕したいという気持ちでいっぱいだった。

そのまま肉竿を口内に収めていくが、とてもではないが全てを咥えることなど不可能だった。

（平蔵のだったら全部咥えられるのに……）

そんなことを無意識に考えてしまう。

罪悪感で胸をちくりと刺されながらも、七瀬の唇はより吸い付くように窄められる。

さらには口腔内では舌を巻きつけていた。
首を引く。くちゅ、と卑猥な音がした。
「もっと、はしたない音を響かせてみせろ」
その上からの物言いに七瀬は何故か苛立ちと同時に、どこか胸を鷲掴みにされるような思いが沸き起こる。
七瀬は歯を立てることもせずに、むしろ頬を凹ませて陰茎を吸引しながらも首を振った。
じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ。
「やればできるじゃないか」
七瀬は困惑する。明らかに心拍数が上がり、そして膣は濡れていた。
「もっと速くしてみろ」
横柄な言い方も何故か身体を熱くする。
七瀬の身体は勝手に言うことを聞いた。
首のピストンが速まる。
じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。
両手を篠塚の太ももに乗せ、頬を凹ませて丹念に首を振る。

平蔵に愛撫をする時よりもどこか肉欲的なフェラチオだった。
（あたし……なにやって……）
思わずそんな疑問を抱いてしまう。
しかし口の中で篠塚の肉槍が益々雄々しさを増すと、七瀬の身体はゾクゾクするような悦びを感じた。
（……すごい……あたしのフェラでまだ大きくなってる……）
その事実は大きな達成感で彼女の胸を満たした。
唇で、舌で感じる篠塚の熱さや硬さは彼女の瞳に恍惚を混じらせる。
（なんで……あたし……）
困惑のままフェラチオの熱が上がっていく。
（……あたし……こいつのちんぽ……もっとしゃぶりたい……）
男根にたっぷりと唾液が塗りたくられるように咥える。
（こいつの勃起ちんぽが……おいしい）
時折口から出して舌の腹で裏筋を舐め、そして根本にキスを繰り返す。その間ずっと篠塚のことを見上げる。その視線はどこか熱っぽい。
そして再び咥えると、じゅぽじゅぽと淫らな音を出すために首を振った。

もう陰茎を噛み千切ろうなんて企みは頭のどこにもない。
この焼けた石のように熱くて硬い筋肉の塊をもっと舐めたい。頬張って唇で摩擦したい。
その一心でフェラチオを続ける。
「どうした？　随分と熱心じゃないか」
「……うるせえ。ちんぽビクビクさせてやがるくせに。もう射精してーんだろ？　わかってんだぞ」
一見反抗的な口調で応答するも、唇を窄めて亀頭のあちこちにチュッチュとキスを繰り返している。
「そうだな。最後は手でイかせてもらおうか」
「……勝手にしやがれ」
七瀬が陰茎から顔を離すと、舌と亀頭が唾液で繋がった。
そして右手で陰茎を掴むと、少し乱暴に上下に振る。
その乱暴さには彼女なりの照れ隠しが潜んでいるのが明白だった。
「もっと優しくしてくれよ」
「……こんだけガチガチなんだから大丈夫だろ」

「誰かさんが恋人さながらのフェラチオをしてくれたからな」
「ぐっ……」
七瀬は言い返せなくて頬が赤くなる。
「それにたっぷり塗られた唾液が丁度いいローション代わりになっている」
その言葉通り、七瀬の手首の動きと合わせてニチャニチャと卑猥な摩擦音が響いていた。
七瀬の手の中で肉槍の血管がドクンと脈打つ。
肉棒がさらに膨張し、硬さを増した。
根本から精液が駆け上るのを七瀬は手の平で感じる。
「……早くザーメン出しやがれ」
その言葉と同時に篠塚が呻く。
「うっ」
ドピュッ！　ビュルルル！
勢いよく射出された白濁液が、あっという間に七瀬の顔やスーツを白く染めていった。
火傷しそうと感じる程の熱い精液を顔や髪、服に掛けられるのを決して不快には思

わなかった。
むしろ恍惚すら感じながらも、七瀬はそんな雌の感情を何とか抑え込んで冷静に篠塚の様子を窺う。絶頂時に生じる隙の観察。そして撒いた罠。
しかし『それ』を使うのは、まだこの後だ。
篠塚は満足そうに一息吐くと命令する。
「咥えて綺麗にしろ」
七瀬は黙って言う通りにした。勃起が収まった陰茎なら根本まで咥えることができた。そして舌で精液を舐め取りながらも優しく吸う。
再度の勃起を促すように。
そう。
もう一度勃起してもらわないといけない。
(そうしないと『あれ』が使えない)
七瀬は丁寧にお掃除フェラを続ける。
陰茎がふやける程に舌で唾液を塗りたくり、残っていた精液が鈴口から漏れると頬を凹ませて吸った。
じゅる……じゅるるる。

程なくして陰茎は硬さを取り戻す。
血管が浮き上がった豪壮な質感は、女を貫きたくてどうしようもない肉欲が見て取れる。
篠塚は上半身も脱いで全裸になりながら言う。
「服を脱いでベッドに上がれ。抱いてやる」
これ以上ない程の上から目線の命令口調。
七瀬は今までこんな風に男から誘われたことがなかった。勿論平蔵からも。
やはり苛つきと同時に、どういうわけか下腹部がキュンキュンと疼いた。
服を脱いでベッドに上がると篠塚が七瀬の内腿を触る。しなやかでスベスベの触り心地の太ももに、愛液が垂れていた。
「フェラチオで濡れたのか。思ったより感じやすい女なんだな」
七瀬は言い返せない。
代わりに篠塚を睨んだ。
そんな彼女の顎を掴んで無理やりに顔を上げさせると、そのまま唇を奪った。七瀬は抵抗しない。
篠塚は七瀬の唇を吸いながら、彼女の綺麗なピンク色の乳首を摘まむ。

「……んっ」

彼女の甘い吐息が篠塚の鼻に直接掛かった。

篠塚はそのまま乳首を弄る。今度は少しだけ強めにグリグリと捻った。

「やっ、あっ……」

「強くされるのが好きか？」

「……べっ、別にそんなわけ……」

「恋人はさぞかし優しいんだろうな」

七瀬は言葉に詰まる。

確かに平蔵のセックスは優しい。愛情の塊のような性行為。七瀬はいつもそれで満たされている。

しかしこの前の船での一件といい、今回といい、モノのように扱われるのもなにか涙るような気がしてならない。

七瀬はそれを勘違いだと思いながらも、少し痛みを覚えるくらいに乳首を抓られては背筋をゾクゾクとさせていた。

「んっ……んっ……はぁ……」

七瀬の左手が無意識に屹立した陰茎を撫でていた。再び我慢汁を垂らして、ギチギ

チと軋むように勃起する強靭な肉槍に心拍数が上がる。
「どうした？　早く欲しくて堪らなくなったか？」
唇を重ねながら尋ねられる。
「ち、違っ……」
篠塚の左手が七瀬の陰部に伸びる。
「なにが違う？　こんなにぐっしょりと濡らしておいて」
その言葉を証明する通り、篠塚が少し弄るだけでくちゅくちゅと水音が鳴った。
「……そ、それは……」
七瀬は格闘とは違い後手後手になる。
篠塚はさらに攻めっ気を強めた。
「おねだりしてみろ」
七瀬は唇を甘噛みされ、左手は陰茎を擦りながらゴクリと喉を鳴らした。両足の爪先がぎゅっと強張る。
「おねだりしろと言っている」
ぎゅう、と七瀬の乳首を押し潰す。
「あぁんっ」

甘い声と同時に肩を縮こませた。
七瀬は俯きながら弱々しく呟いた。
「……ちんぽ……くれ」
「聞こえないな」
七瀬は激昂して吐き捨てるように言い放つ。
「だからっ！　あたしを負かしたこのデカいおちんちんをおま○こにくれって言ってんだよっ！」
「ふっ。可愛げがないな」
篠塚は七瀬を仰向けに転がすと、彼女の左右の踵を持ち上げて言葉を続ける。
「それがお前のそそるところでもある」
七瀬のくっぱりと開いた膣が天井を向いている。
篠塚はそこに向かって、腰つきだけで照準を定め貫こうとしていく。その男根にゴムの被膜はない。
「……今日は安全な日でもなんでもねーんだけど」
「俺の子を孕むのが嫌ならアフターピルでもなんでも飲むんだな」
「自分勝手な野郎だな……モテねーだろ、お前」

「お前のような強がっている女を従順にさせるのは得意だ」
そう言いながらプレスするように腰を下ろしていく。
ズプズプズプと淫らな音を上げて肉槍が陰唇を押し広げては埋没していく。
「んっ……くっ……」
「どうした。まだ半分くらいだぞ」
「……うるせえ。さっさとその粗チンを全部入れやがれ……」
「強がりもそこまで行くと可愛げがあるように感じるな」
篠塚は珍しく口端を愉悦で持ち上げると、一気に腰を振り下ろした。
「あぁぁっ！」
七瀬は喉を反り返らせ、爪先をぎゅっと握った。
「どうだ？　恋人のより強い男性器は？」
七瀬ははぁはぁと浅い息遣いの中、不機嫌そうに答える。
「彼氏のが百万倍気持ちいいね」
「いつまでそんなことを言っていられるかな」
篠塚が腰を持ち上げる。
どれだけ肉竿を引き抜いていっても亀頭は見えない。よくこれだけの長モノを納め

られたなと七瀬は感心すらした。
篠塚の最初のストロークは存外に穏やかなものだった。
挿入は七分まで。
速度もゆったりと。
それでも七瀬に快楽を与えるには十分すぎた。
「んっ、んっ、んっ……」
「声を我慢しているな。恋人を慮ってのことか？」
七瀬は口を噤んで篠塚を睨み上げる。
「いいぞ。簡単に蕩けられては、こっちもつまらんからな」
七瀬は無言のまま視線を横に逸らす。
（よし。自然に横を向けたな……ＯＫ。手が届く距離にある）
七瀬は撒いた罠の位置を確認した。まだ勝負を諦めていない。
「その目、気に入らないな」
早速篠塚に感づかれる。しかし七瀬も誤魔化す。
「このセックスはさっきの喧嘩の延長戦だからな」
「ふん。勝負は見えている」

篠塚は相変わらずのペースを保っていたが、掴んでいた左右の踵を殊更に、ぐいっと持ち上げてみせた。

そうすると二人の結合部が七瀬からもはっきりと見えるようになる。

七瀬は驚いて目を逸らした。平蔵はこんな正常位をしない。

しかし篠塚は逃避を許さない。

「駄目だ。しっかりと見ろ。俺とお前が繋がっているところをな」

そう言いながら今度は根本まで押し込むと、カリの部分まで引き抜くというのを繰り返す。速度はゆっくりと。あくまで七瀬に性器同士が交わっているのを見せつけるかのようだった。

その様子は言うまでもなく猥然としたもので、七瀬の胸はドキドキと高鳴った。

（あんな大きいのを入れられるところを見せつけられると……なんかエロイ気分になる）

そんな風に考えては駄目だと七瀬は目を瞑る。

しかしやはり篠塚がそれを許さない。

「見ろと言っている」

その冷たく高圧的な言い分に七瀬は何故か逆らえない。

そろりと目を開けて自分の秘裂が肉槍を呑み込む様を目に焼き付ける。
（……やばい……超エロイ……）
一度そう思ってしまうと、もう拒絶はできない。
精神に官能の蔦が巻きつくと、身体の芯から熱が灯る。
篠塚が腰を振る度に、肉槍が肉壺を掻き分ける生殖行為から目を離せない。
「あっ……あっ……やっ……そんな、おっきぃの……」
「大きいのがなんだ？」
「……大きいの……すごい……」
七瀬の声色がまるで無垢な乙女のように愛らしくなる。
その頃合いを見計らって篠塚はプレスの速度を速める。
ベッドが軋み、七瀬の嬌声も間隔が狭まる。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」
肉棒が膣壺に押し込まれる度ににゅるにゅると音が鳴り、白く泡立った本気汁が七瀬の臀部から糸を引いて垂れていく。
七瀬は堪らないといった様子で口にする。
「おっきぃの……きもちっ♡」

快楽に抗わないといけない。そう思いながらも七瀬には策があった。

（……こいつは勘がいい……罠の存在を気取られたら終わり……でも誤魔化すには生半可な演技じゃ駄目だ……だったらもういっそのこと快楽に流される……我慢せずに本気で感じてセックスに没頭する……悔しいけど……）

七瀬はとろんとした瞳を篠塚に向ける。

「……もっと突け……クソ野郎」

弱々しい声でそう嘆願する。演技無しのおねだり。

篠塚は満足そうに笑みを浮かべると無言でその声に応えた。

パシンッ、パシンッ、パシンッ。

「あんっ、あんっ、あんっ♡　そう、そこっ、奥、届いてるっ♡」

平蔵では届かない場所。

それは一突きごとに七瀬の頭を痺れさせる。

反抗的な七瀬が見せる完全に蕩けた表情は男を滾らせるものだった。

篠塚の目に映る豊かな乳房。腰を振る度にぷるんぷるんと揺れる肉の双丘（そうきゅう）は、揉みしだきたいという願望を雄の中で燃え上がらせる。

篠塚でさえ例外ではない。

彼は踵から手を離すと、陰茎を根本まで挿入した体位を維持したままそのたわわな乳肉を鷲掴みにした。

その豊潤な柔肉は手中に収まりきらない。仰向けでも美しい形を保つ弾力は指を優しく押し返す。まさに垂涎（すいぜん）の触り心地。

ピストンを続行しながら、乳房に指を埋める。

「あっあっあっ、待って、そんな強く握っちゃ……あぁっ」

口ではそう言いながらも、乱暴に扱われることがどこか心地よい。

粗暴に愛でられる度に自分が女なんだと自覚していく。

（……平蔵の時は……こんなことなかったのに……）

戸惑いを覚えながらも七瀬は篠塚のセンサーを掻い潜るために、セックスへとさらに没入していく。

「あぁっ、いいっ♡　おちんぽ来ると頭痺れるっ♡」

本気の喘ぎ声。

雌としての甘い鳴き声。

それに雄として応じるように篠塚の腰遣いは荒々しくなる。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ。

「あっ、あっ、いっ、いいっ♡　それっ、好き」
七瀬は思わず後頭部を浮かせる。
「いっいっ♡　そこ、カリで擦れるの、あっあっ♡　気持ち良すぎっ」
乳房は手を離したら円を描くようにぷるんぷるんと揺れた。
「自分より強い男に犯されるのは気持ちいいか？」
七瀬は下唇を噛むと、仕方なく認めるように小さく頷いた。
「……好き……このおちんぽでズンズンっておま○こされるの好き……」
これ以上ない程の蕩けた視線と声。
七瀬がごく自然に篠塚の首に両腕を巻きつけた。
そのまま二人は抱き着いていき、唇を押し付け合った。
二人の身体が密着すると、七瀬のふくよかな乳肉が篠塚の逞しい胸板でむにゅりと潰れる。
七瀬は両脚も篠塚の背中に巻きつけ、ぎゅっとしがみつくように抱き着いた。
平常時であればここから寝技にでも持っていけるだろうが、篠塚のセックスで蕩けた七瀬にはそんな力はない。
汗だくになった身体同士で抱擁し合い、唇と舌を貪り合いながら肉欲に溶けてしま

った証明として呟く。
「……この強い勃起ちんぽ、もっとおま○こに頂戴……」
その言葉で篠塚の興奮は増大する。
強い女がひれ伏す瞬間。
それこそが彼にとって最も燃え滾るひと時であった。
篠塚が射精に向けてのピストンを開始する。
冷たく無機質な雰囲気の篠塚とは違い、熱く動物的な性交だった。
重なった二人の身体からは湯気が迸り、ベッドの揺れも最高潮に達する。
「あっあっあっあっ♡　イクっ♡　イクっ♡　彼氏より大きいちんぽでイっちゃう♡」
「このまま中で出すぞ」
七瀬に残った理性は性的高揚に歯止めを利かせようとする。
(でもそれじゃ駄目だ……こいつを騙すには、本音で向き合わないと……)
七瀬はより強く篠塚の身体にしがみつくと、身体が求めるままの欲望を口にする。
「いいっ、いいっ♡　このまま一杯中に出して♡　強いザー汁でおま○こ満たして♡」
篠塚の頭は自身が認めた強くも美しい雌を孕ませることだけを考える。

ぐぐっと腰を押し付けて、陰茎を破裂させた。
「妊娠しろ！」
「あっあっ♡　射精ちんぽ、おっきくなった♡　赤ちゃん、できちゃうっ♡」
ビュルルルル！
七瀬の子宮口に押し当てられた亀頭から、大量の精液が子宮に注ぎ込まれた。
「やぁっ、あっ、すごっ♡　赤ちゃん汁、熱すぎ♡　子宮、火傷しちゃう♡」
篠塚の射精は止まらない。
極上の雌に自分の遺伝子を刻み込む至福の時間。
雄の本懐に浸るその行為は、彼の頭を真っ白にさせた。
繁殖行為に夢中になっている篠塚と抱き合いながら、七瀬は歯を食いしばって肉欲に抗った。
（……唯一できるこいつの隙……ここだ！）
七瀬は片手をベッドの脇の手を伸ばす。
無造作に投げ捨てていた改造スタンガン。
全てはこの時のために。
（……喰らえ！）

篠塚の首筋にスタンガンを当てると、その冷たさを篠塚が感じる間も無くスイッチをオンにした。

高圧の電流が篠塚を襲う。

「がぁっ！」

勿論密着していた七瀬も感電するが、直接放電を喰らった篠塚の比ではない。不意打ちで電撃を受けた者と電撃を受ける覚悟を完了していた者の違いが出る。

数秒後、篠塚の全身が弛緩する。七瀬は篠塚の全体重を受け止めて浅い息遣いをしながら、額の汗を拭った。

「……よっしゃ。勝った」

七瀬はそう勝利宣言すると自分に覆い被さっている篠塚をどかしてベッドから立ち上がる。

まずすることは篠塚の上着から映像データが入っている携帯を取り出して、それを床に放り投げた。それを踵で踏み抜いて真っ二つにし、自分の上着のポケットに入れる。

その後は部屋に隠しカメラが設置されてないかのチェックだ。

「元探偵を舐めんなよ～っと」

鼻歌交じりに怪しいところを探していく。
そんな七瀬に声が掛かる。
「……どこからが布石だった……」
ベッドで大の字になっている篠塚だった。まだ立ち上がることはできない。
「最初からだよ。テメェと普通に勝負して勝つ見込みは五分以下だった。かといってスタンガンや他の凶器も当てられる気がしなかった。だから最初から床に放棄しておいて、最悪セックスする流れになったら使おうと思ってた」
篠塚は呆れるように鼻で笑う。
七瀬は唇を尖らせた。
「なんだよ？　負けを認めねーってのか？　あたし達はアスリートでも格闘技者でもないんだろ？」
「その通りだ。最後に立っていた方が勝ちだ」
「だよな」
七瀬は鼻息荒くふんぞり返り。その太ももからは膣内射精された精液が垂れていった。
「やれやれ。本気で惚れそうだ」

「やめとけやめとけ。こんなじゃじゃ馬飼いならせるのは今の彼氏だけだから」
そう言うと七瀬は部屋のチェックを終える。
「なんだ。隠しカメラの一つもねーのか」
「ただの余興だからな。そんな無粋な真似はしない」
「あとは映像データの複製がないってのを信じたいところだけど……」
「安心しろ。本当にオリジナルのそれだけだ」
篠塚はそう言うと、凶兆を孕むような笑い方をしてみせた。
「……なに笑ってやがる？」
「必要がないのさ」
「あ？」
「データの複製も。隠しカメラも」
篠塚の不穏な物言いに七瀬は眉をひそめる。
「なにが言いたい？」
「その内わかる。予言しといてやろう。お前の方から、また俺達に連絡を取ってくることになる」
「んなわけないだろ」

七瀬は服を着ると、部屋を後にする。そんな彼女の背中に篠塚の声が掛かった。
「痺れたぜ。あんな射精は初めてだ」
「はっ。変な性癖に目覚めんなよ。じゃあな」
ドアを閉めると大きく息を吐いて、背中を壁に預けた。
「……また余計なセックスしちまったよ……平蔵ごめん。でもまぁとりあえず作戦は成功だな」
そう呟くと勝利の満足感と罪悪感を交互に足を進めた。

第五話「依存」

夜中のベッドの上で恋人が交わっている。
珍しくもなんともない光景。
平蔵と七瀬はぴったりと抱き合うように対面座位で繋がっている。
平蔵は全裸だが、七瀬は黒いセクシーランジュリーを着ている。
ブラジャーは本来乳房を隠す部分が縦に割れて乳首が丸見えで、ショーツも陰唇に沿って開いており着用したままの結合が可能となっている。
「ああヤバい……七瀬、イっていいか？」
「はぁ、はぁ、はぁ……うん……いいよ……いっぱい出して……」
七瀬は切なそうな声でそう返答すると、自らも腰を振る。
同棲を始めた二人の大きなベッドがギシギシと揺れた。
「七瀬っ！」
平蔵が七瀬の引き締まった背中を力いっぱいぎゅっと抱きしめると、身体の動き全てを硬直させた。

射精の幸福感に全神経を集中させている。
七瀬はそれを邪魔しないように、ただ優しく平蔵の後頭部を撫でた。
「……はぁ。わり。いつもより少し早かったな」
平蔵は息を切らしながらも謝罪する。
七瀬はそんなことなど気にしていないと言いたげに無邪気な笑みを浮かべる。
「このエロ下着の所為なんじゃないのか？」
「確かに……それエロすぎだろ。何処で買ってきたんだよ」
「ネット通販。平蔵が喜ぶかなって」
「超嬉しい」
「やりぃ」
そんな会話を交わすと二人は冗談っぽくキスをした。
そのまま二人で寝転び、じゃれつくようなキスを続ける。
「ね。後悔してる？」
「なにが？」
「探偵辞めたこと」
「ないよ。あれはあれで楽しかったけどな」

「じゃあ婚約したことは？」
「後悔なんてあるわけないだろ。俺から言いだしたんだし」
二人は身を寄せ合う。
疑いようもなく幸せな日常の一コマだった。
そんな最中のことだった。
いつからだろうか。
七瀬の頭に払いきれないモヤモヤが浮かぶことがあった。
日常生活にはなんの支障もなかった。ただ平蔵との性交渉中にだけ脳裏に広がるようになっていた。
やがてそれは夜の営みに対して集中力や幸福感の低下にも繋がっていった。
しかし性欲が衰えたかと言われるとむしろ逆で、胸の奥はいつも渇いた欲望で満たされている。
最初は単なる環境の変化によるバイオリズムの変調に違いないと気にも留めなかった。
しかしセックスへの渇望感は日に日に強まり、不思議なことに平蔵とはどれだけ肌を重ねてもそれが潤うことはなかった。

倦怠期も疑ったが明らかに違う。
平蔵に対する愛情は何も変わっていない。むしろ以前よりスキンシップが増えたくらいだ。
「人肌恋しいのか？」
当の平蔵にそう茶化されるくらいだった。
ある晩、七瀬は平蔵の上に跨り腰を振っていた。
「激しいな」
気持ち良さそうな平蔵にそう指摘される。
「う、うん……」
この頃、七瀬の求め方は平蔵の言葉通り激しさを増す一方だった。
しかし七瀬の渇きは余計に酷くなっていく。
なにかがおかしい。
そう考え始めた頃に、七瀬の携帯に電話が掛かってきた。
『そろそろ悶えている頃だろうと思ってね』
「……神田。てめぇ……」
もう二度と聞きたくないと思っていた声。

『薄々気づいているだろうが、実はヘブンズダストには強い依存性がある。さぞかし恋人とは砂を噛むような味気ないセックスをしているのだろう？』

ヘブンズダストの影響は可能性の一つとして頭に入れていた。

「余計なお世話だ。二度と電話してくんな！」

『私からしなくても、きっと君から連絡してくるよ。ヘブンズダストによって生まれた渇きはヘブンズダストでしか癒されない。君はきっと再び本物のセックスを求めるようになる』

七瀬は携帯を地面に叩きつけたくなるような苛つきを抑えながら通話を切った。

原因がはっきりすると余計にモヤモヤが強くなる。

「……あたしがあんな薬に負けるかよ」

そう口にすると拳を握りしめた。

◆◆◆◆

しかしどれだけ日々が経とうとも事態は好転しない。

平蔵との普通のセックスではどうしても満足ができなかった。

一回戦、もしくは二回戦の後に寝入ってしまう平蔵の横で中途半端に煩悶としてしまう夜が続く。
性欲は高まりセックスがしたくて堪らないのに、いざ営みが始まると砂利の味がした。
そこに愛情は確かに感じた。だからこそ余計に辛い。
七瀬は小さな不安が徐々に膨れつつあった。
いつか平蔵自身に不満を覚える時が来るのではないだろうか。
そう思うと気が気でなかった。
そして欲求不満も爆発寸前だった。
道具を使って自慰をしようがこれっぽっちも気は晴れない。
いつしか七瀬の脳裏にはこんな欲望がチラつくようになった。
『本物のセックスがしたい』
七瀬はその自らの声を自嘲する。
(本物？　薬を使ったセックスなんてむしろ偽物だろ)
そう強がるも、平蔵との性行為の後には異常な渇きを覚えるようになった。
もう限界は近い。

いずれ平蔵とのセックスに嫌気が差す。いや、もう既にそうなっているのかもしれない。

七瀬は何日も何日も躊躇（ちゅうちょ）し、直前で携帯を投げ捨てるのを繰り返した。

そしてついに、着信履歴から一つの番号に電話を掛けた。

◆◆◆◆

『今日は仕事で遅くなるから』

平蔵にメッセージを送った七瀬は、夜の街を歩いていた。

珍しく肩を落とし、表情は物憂げだ。

迎えはすぐに来た。

黒塗りの高級車。

後部座席が開くとその中に入る。運転手以外は無人で、車内はまるでちょっとしたクラブを思わせるように豪華で広々としていた。

「よろしければ冷蔵庫にお酒が用意してありますが」

「要らねーよ」

頬杖をついて、流れる夜景を眺めること数十分。
やがて案内されたのは超高級ホテルの一室だった。
扉の前で暫く躊躇する。
自分の判断が正しいのか否かを今一度吟味するが答えは出ない。
深いため息をついて、粗雑にノックする。
「入りたまえ」
ドアノブを回す七瀬の肩に重く伸し掛かるのは自己嫌悪と敗北感。そして……。
当然のようにスウィートルームだった。
「……船の時も思ったけど、あんたら金持ちは馬鹿みたいに広いところで生活してんだな」
神田はバスローブを着てリビングチェアーに座っていた。
「憧れるかね？」
「いいや。ちっとも」
「しかし同棲していると何かと手狭だろう？」
七瀬は舌打ちする。自分達のプライベートは全て筒抜けのようだった。
神田は対照的に得意気な顔をする。

「情報収集は探偵の専売特許ではないからね。いや、君達はもう元探偵か」
「一々腹が立つなテメーは」
「そう言わずにこちらに来なさい」
神田は立ち上がるとキングサイズのベッドの縁に腰掛けた。
七瀬の足はコンクリートで固められたかのように動かない。警戒心で全身が強張っている。
「……もう焚いてんのか？　例の薬」
「さあね」
「……クソオヤジ」
七瀬は意を決してズンズンと大股で歩くと、どすんと乱暴に腰を掛けた。
「そう苛つくこともない。その渇きを癒してやろう」
そう言うと七瀬の肩を抱く。
今にも噛みつきそうな顔で七瀬が問う。
「あたしの身体になにをした？」
「君の推測通りだ。ヘブンズダストには強い依存性がつきまとう。早くて一ヶ月。遅くとも二ヶ月から三ヶ月で禁断症状が出る」

七瀬は黙って聞き続ける。
「症状は……わざわざ私が説明しなくとも君自身が理解しているだろう。性欲は高まるばかりなのにヘブンズダスト抜きのセックスでは一切満足できなくなる」
「そして我慢できなくなった女達をこうして誘い込んでるのか。麻薬中毒にさせる悪党どもと同じじゃねーか」
「それは心外な言われ方だな。私達は君達から一切お金を取らない。むしろお小遣いをあげるくらいなのに」
「クソ喰らえだ」
「天国のような快楽を与えられ、その上金銭まで受け取れる。どこに不満がある？」
「ヘブンズダストだけを寄こせ」
「それは無理な相談だ」
「……てめぇ」
七瀬の上半身がフラつき、それを神田が受け止めた。
「おっと。頭に血が昇りすぎたかな。横になるといい」
七瀬が弱々しく呟く。
「……白々(しらじら)しい……やっぱりもう焚いてやがったな」

「君という活きのいい果実を少しでも長く楽しみたいからね。少しの時間も無駄にはしたくなかったのさ」

七瀬をベッドに仰向けで寝させると、一枚ずつ衣服を脱がしていく。

七瀬はそれをどこか朧気な目と浅い息遣いの中見届けていた。

「どうだい？　もう男が欲しくて欲しくて堪らないだろう？」

「……そんなこと……」

「この数ヶ月、恋人とのセックスはどうだった？　砂漠の中で水筒を振っても一滴も水が出てこない。歩いても歩いても見えるのは砂丘ばかり。そんなセックスだったろう？」

七瀬は黙り込む。

「それにほら、君も何だかんだで期待していたんじゃないか？」

七瀬を下着姿にすると、神田は歓喜の声を上げた。

「『一番セクシーな下着で来てくれよ』という私の要望を聞いてくれているじゃないか。よほど禁断症状が辛かったと見える」

神田の目に映ったのは黒いレースのセクシーランジェリー。

乳首が見えており、陰唇も丸見えだった。

神田が七瀬を仰向けでベッドに寝かせる。
指先にも力が込められない七瀬は抵抗もできずに横になった。
しかし、たとえ身体を動かせたとしても抵抗していただろうか？
きっとそうしなかっただろうと七瀬は無力で欲深い自分を呪う。
久しぶりに味わう心身共に火照る酩酊。
フワフワと空に浮いているような浮遊感。
男の指で肌を撫でられるだけで達してしまいそうな高揚。
この数ヶ月、一切感じられなかった快感。
脹脛（ふくらはぎ）の裏から太ももへと舌を伝っていく神田を視線だけで見下ろしながら、嫌悪感と共にどうしようもない待ち遠しさが湧き起こる。
神田が七瀬の両脚を観音開きにし、クンニをしてきた。
陰毛の薄い七瀬は陰核を舐められただけで頭に電流が走った。
ずっと欲しかった刺激。
恋人からは得られなかった快楽。
パックリと開いた陰唇からは、愛液が洪水のように溢れる。
七瀬はもう我慢ができなかった。

「……頼む……早くおちんぽ欲しい……」

◆◆◆◆

広いスウィートルームはむせかえるような熱気で包まれていた。
男と女が対面座位で抱き合い、腰をぶつけ合うように振っている。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」
「これだろう？　これが欲しかったんだろう？」
「これ♡　これ♡　このちんぽが良いっ♡」
女はあられもない声を上げ、縋りつくように男の身体にしがみつく。
舌を絡め合い、口端から唾液が滴るような深いキス。
ショーツを穿いたまま結合した、生の性器同士は擦り合う度にぐちゅぐちゅと卑猥な摩擦音を立てた。
「セックスは好きか？」
唇を触れ合わせながら男が尋ねる。
「好きっ、好きっ♡　このセックス好きっ……♡」

七瀬はずっと砂漠で遭難をしていた。
そしてついにはオアシスを見つけた。
水を浴び、喉を潤す。
そんなセックスだった。
「んっ♡　ふぅっ、ん、ちゅうっ♡」
七瀬の方から神田の舌を積極的に吸い、自ら舌を絡めてもいく。ナメクジの交尾めいた深いキス、そのやりとりだけで七瀬の背筋を痺れさせる。
終わらない絶頂。
「あっ♡　あっ♡　あっ♡　ガチガチのちんぽが刺さる度に、ま○こ溶ける♡」
そう口にする通り、神田の男根はヘブンズダストと同類の精力剤のおかげで石のように屹立している。
そして七瀬はそれに突かれる度に、まさに「溶ける」ような快楽を与えられる。
「恋人とではこういうセックスはできないだろう？」
七瀬は神田の首筋に両腕を巻きつけながら、その長い睫毛を物憂げに下げながら言う。
「……でき、ない……」

否定はできなかった。
ただでさえ尋常ではない快感をもたらすヘブンズダスト。
長い間その禁断症状に苛まれ、ようやく得られた解放感の前では虚飾した言葉は持ち得なかった。
神田が七瀬の顎を取る。
二人の舌の間に唾液の糸が張った。
「君さえ良ければ私とこうしてたまに会ってくれないか？　勿論君と恋人の仲は邪魔しない。むしろ金銭面では援助すらできる」
「そ、それは……」
愛人としての勧誘。
七瀬は返答できない。
今までなら即刻拒絶していただろう。
「ゆっくり考えてくれ。どうせ今からは何も考えられなくなる」
再び神田と七瀬の舌が巻きつき合う。
同時に神田の指が七瀬の背筋を滑るように落ちていき、そして乳房と同様に豊満な尻肉を掴んだ。

その桃尻に指を押し込もうとしたら、プリンとした弾力で弾き返される。
彼女の背中も臀部も汗塗れだった。
七瀬はそれだけで身悶えする程だった。
ただ背中をなぞられ、臀部を鷲掴みにされただけ。
ビクビクと肩が痙攣する。
全身の細胞が歓喜で打ち震えていた。
（こんなに……気持ちいいなんて……）
七瀬は恐怖を覚えた。
もう二度と戻れないのではないかという危惧。
そんなこともどうでもよくなっていく。
（平蔵……助けて……）
そう思いながらも七瀬は腰を振っていた。
神田と息を合わせるようにがむしゃらに生の性器を擦れ合わせる。
「はぁっ、はぁっ、はっ、あっ♡　はぁっん♡　やっあっ、おま○こ止まらない♡」
神田と舌で唾液の交換をしながら神田の上半身に自分の身体を擦りつける。
七瀬は涙を流した。

それは止まらない絶頂に耐えかねた落涙でもあり、恋人への罪の意識の塊でもあった。

自分の弱さが恨めしい。

七瀬は堪えようとしても滴る涙の中、男根を求めては貪った。

神田はその涙を優しく指で拭い、慰めるように言う。

「先程も言った通り、ヘブンズダストの禁断症状は一ヶ月から三ヶ月程度で出る。逆に言えばヘブンズダストを使用してセックスをした直後なら、恋人とも普段通りのセックスができる」

七瀬は眉間に皺を寄せる。

「……つまり、定期的にこんなセックスしろってことかよ」

「まぁそうなるな」

「……依存を抜けるにはどれくらいの時間が掛かる？」

「さぁ。前例がないからわからんな。一年か。それ以上か」

「くそ、やろう……あいっ、いっいっ♡」

喘ぎながらも七瀬は指摘する。

「どうせ他にもこうやって薬堕ちさせて、アダルトビデオなんかに出演させたりして

んだろうが……！」
「安心したまえ。少なくとも君をそんな風に扱ったりはしないよ。何せ私のお気に入りだからね」
嬉しく無さそうに返事をする。
「そいつぁどうも……あっあっ、やばっ、ちんぽっ、そこ♡」
「恋人がそんな姿の七瀬君を見たらどう思うかな」
七瀬は四肢で神田にしがみつきながら答える。
「そんな……あいっ、いっいっ♡　い、言うなぁ……」
「恋人とは結婚の話は出てるのかね？」
お前には関係無い。
頭に浮かんだ返事とは違い、ただ事実を答える。
「……暫く同棲したら……考えようって……」
常に絶頂し、頭が真っ白な七瀬は虚偽報告ができない。
自白剤としても利用可能な薬だろうなと七瀬は考えた。
「二人が考える『理想の家庭』などについては話し合ったのかね？」
七瀬は酸欠になりそうな呼吸の中、ほぼ無理やりに答えさせられる。

「そんなの、わかんね……あひぃっ、いっ♡　ただ……」
「ただ？」
「……二人だったら、ずっと一緒に……いて楽しいに決まってるって……」
「どちらが言ったのかな？」
「二人で……言い合った」
神田を抱擁する七瀬はどこか切なそうにそう言った。
「ベッドの中で？」
「……それもあるし……ソファで、身を寄せ合いながら言ったり……」
「子供の数を妄想したりは？」
神田は興奮が増してきたのか突き上げが激しくなる。
「あんっ♡　あんっ♡　あんっ♡　す、する……するから、あぁっ生ちんぽっ、イクの止まんない♡」
「向こうは何人欲しいと」
「理想は、二人欲しいって。でも経済的に難しいかもって……あぁっ♡　あっあっ♡」
「君は？」
神田が小休止する。

七瀬は大きく肩で息をした。
「はぁ、はぁ、はぁ……あたしは……貧乏でもいいから沢山欲しいって……平蔵との子供、沢山欲しい……」
七瀬は理想の未来を語りながら、現実から目を逸らすように瞼を閉じた。
「経済的な問題ならば気にせずに、思う存分に子沢山の家庭を築くといい」
「あっ、あっ、あっ♡　おちんぽっ、おっきぃの、奥グリグリ、すごっ♡」
神田はピストンをあえて止めて、子宮口を亀頭で押し潰す。それはまるでディープキスのようだった。
「あひっ♡　ひぃっ、い♡」
七瀬の全体重を腰で感じながら神田は愉悦の笑みを浮かべる。
「子供の名前などは考えているのかな？」
「そ、それは……まだ……♡」
「習い事などは？」
「……空手とか……柔道……んあぁっ♡」
「それはいい。君のお子さんなら、きっと筋がいいだろう。篠塚も君の格闘センスを褒めていたよ」

「ひっ、ひぃ、いっいぃ♡　あひっ♡　ひぃっ、っく、あっあっあああ♡」
「この子宮ならきっと元気な赤ちゃんを産めるだろう」
亀頭を殊更にぎゅう、ぎゅうと子宮口に押し付ける。
「あいっ♡　いっひ♡　おちんぽ、そんなにキスしちゃ、駄目……変になる……♡」
「何よりこの膣壺がいい。締め付け具合といい、ザラザラとしたかずのこ天井といい。男の子種をより搾り出すのに最も適した器だ」
神田はまるでワインを評するかのように言った。
そして恍惚の波にさらわれ、蕩けた表情のままの七瀬に言葉を掛け続ける。
「わかっているかい？　君の子宮口が私の亀頭に覆い被さるようにキスをしてきているのを」
「……だ、黙れ……ふ、うぅぅ……」
「どうしてかわかるかい？」
「うぅぅ……」
七瀬は神田にしがみつき、肩に顎を乗せた。
その表情はもう雄に屈服した雌でしかない。
もう誤魔化しきれない。

隠し事もできない。
「あ……」
七瀬は震える声で続ける。
「……赤ちゃん、欲しがってるから……」
神田はさらに言葉を待つ。
七瀬は涙を堪えながら神田の背中に爪を立てた。
「……この逞しいおちんぽで……赤ちゃん作りたがってる、から……」
七瀬はそのあまりに無防備な発言をすぐに後悔する。
それを聞いて、神田の陰茎がドクンと脈を打って膨張した。
そんな些細な変化にも、敏感になっている七瀬は身を捩らせて甲高い嬌声を響かせた。
対照的に神田は汗を流しながらも余裕のある様子で尋ねる。
「おやおや。七瀬君が欲しがっているのは恋人との子供だろう？」
快楽以外は真っ白にさせられていた七瀬が、ハッと気づく。
「……当た……り前……だろ……」
「しかし君は私の男性器で孕みたいと言った」

「……言ってねーよ」
神田が楽しそうに笑う。
「ヘブンズダストを前にして、ここまで意地を張れた女性は君が初めてだよ。誇っていい。君の愛は本物だ」
そう言いながら、ずん、ずんと二回大きくピストンした。
「あひっ♡　ひぃっいん♡」
七瀬はその一回一回で絶頂している。
生の張り詰めた男根によって膣壁をかき乱される快感。
なんなら浮き上がった肉棒の血管だけでも蕩けてしまう。
「だがそろそろ素直になろうか。君はよく頑張った」
ぎり、と七瀬の奥歯が歯ぎしりする。
「……あたしは……平蔵の女だ！」
「心はそうだろうとも。しかし身体は別だ」
その言葉を証明するように、七瀬の膣内がきゅうっと神田の男根に密着するよう吸い付いた。
「ほら。君の本能が欲しがっているものをもう一度言ってごらん」

七瀬は死んでも言うものかと口を噤む。
神田はそんな彼女の必死の形相を見てくつくつと笑う。
「さっきは口を滑らせていたじゃないか」
「……ちょっと……油断、しただけだ……」
七瀬の息遣いは荒く、そして視界もぼんやりとしている。
頭の中はセックスのことだけ。
男の肌。男の手。男の性器。
それらが欲しくて欲しくて堪らない。
それらに包まれ、貫かれている今が幸せで幸せで堪らない。
「さぁ。楽になろうか」
神田がトントントン、と腰を小気味良く揺らしていく。
「あっ、あっ、あっ♡」
七瀬の喘ぎ声は焙られたバターのように甘く蕩けている。
「誰も見てはいない。私と君だけの秘密だ」
悪魔のように優しく囁く。
「でも……でも……」

七瀬はそれでも誘惑を振り払おうとする。
少しでも振り返れば至福のセックスが彼女を祝福しようとしてくる。
禁断症状を耐えた上での法悦。
「素直になりなさい」
そう言うと神田は少し強めに七瀬を上下に揺さぶった。
「あぁっ♡　いっい♡」
彼女はまるで恋人にするように神田に抱き着く。
脳天まで痺れる力強い男根の挿入。
奥を突かれる度に子宮口が柔らかく亀頭を包み込もうとする。
薬が彼女の心と身体を剥離させていく。
心を置き去りに、身体が求めていることを口にする。
「……あ、赤ちゃん……欲しい……♡」
一度弁が壊れると、堰を切ったように溢れ出る。
「この硬い勃起おちんぽで……身体が妊娠したがってる……♡」
「そうだね。具体的には君の身体はどうなってる？」
「……おま○こ、ぎゅうぎゅうにちんぽ締め付けて、絡みついて、いっぱい射精して

もらいたがってる……子宮も入口をパックリ開いて、そこにザー汁びゅうびゅう出して欲しくてウズウズしてる……」

「彼氏との子供じゃなくてもいいのかな？」

「だ、駄目……駄目だけど……でも、でも……」

ビクビクビク、と何度目かわからない絶頂を果たしながら言う。

「……このセックス、気持ち良すぎるんだってば……わけわかんない……もうなんでもいいから、大きいちんぽで妊娠しちゃいたくなる」

「恋人よりも大きいかい？」

「……大きい……平蔵のより大きくて、強いちんぽ……もうこのおちんぽで赤ちゃん作る……」

「じゃあ恋人に謝りながら子作りセックスをしようか」

「ううぅ……」

七瀬の口は躊躇(ためら)うが、腰だけは自ら動かしていた。

艶めかしく、男をねだる娼婦のような腰遣い。

全て薬の所為にしたかった。

実際にはその通りで、七瀬には非がない。

それでも彼女は自分を責めながら謝罪を口にした。
「……平蔵……ごめん……あたし、このちんぽで妊娠する……身体がもう言うこと聞かない……平蔵より大きくて強いこのガッチガチのちんぽで赤ちゃん作りたいってずっと子宮がおねだりしてくるんだ……平蔵を愛してる……この世で一番……でも……でも……」
神田のくつくつと笑う。
「よく言えたね。ご褒美を上げるよ」
七瀬の細い背中を抱きしめて激しく彼女を揺さぶる。
「あっ♡　あっ♡　あっ♡　平蔵っ、平蔵っ」
七瀬は許しを乞うように恋人の名を呼ぶ。
「あぁっ、いっいっいっ♡　イク♡　イってる♡　ちんぽ、あたしのおま○こ妊娠させたくて膨らんでるっ♡」
「そうだよ。わかるかい？」
七瀬は余裕なく、こくこくと頷いた。
「射精寸前のちんぽ、きもちっ♡　もっと、もっと欲しいっ♡　おま○こメチャクチャにしてっ♡」

「この期に及んでまだ締め付けてる。君は本当にじゃじゃ馬だな。しかし乗りこなして孕ませてみせよう」

「あいっ、いっ、ひっ、あひっ♡」

ベッドがギシギシと荒々しく揺れる。その激しさが二人のセックスがただの遊興ではなく、繁殖のそれだと証明している。

「さぁ、そろそろ私も限界だよ」

七瀬は力いっぱい神田を抱きしめる。

「来てっ、来てっ♡　妊娠ザーメン、沢山子宮に注ぎ込んでっ♡」

「あぁ、素敵だ……七瀬君っ！」

神田の動きが止まる。

同時に七瀬の耳には確かに聞こえた。

子宮口とキスする肉棒がビクンと震え、ドピュドピュと射精する音が。

「あぁっ……熱い♡　子作りちんぽから赤ちゃん汁が飛び散ってる♡　イク、イク……妊娠しながらイクっ♡　あああああっ♡」

七瀬は身震いする。

（こんなセックスが……あったなんて……）

神田の唇を甘噛みする七瀬の表情は女の本懐を果たした満足感にあふれていた。
「しっかりと身籠ってくれよ」
射精を続けながらそう口にする神田に対して、甲斐甲斐しく頷く。
「……はい♡」
下腹部の疼きは、まるで動悸のようだった。
精液を注ぎ込まれる度に、子宮がキュンキュンと喘いでいる。
七瀬はそんな自分に驚いていた。
自分は女なんだ。
そう自覚すると少し悲しくなる。
今まで男に負けないように鍛えてきた自分がどこか滑稽のように思えたからだ。
しかしそれ以上に彼女を包み込むのは幸福感。
天にも昇るような性行為で種付けされた。
その事実はひたすら彼女に幸せを運ぶ。
勿論その大部分は化学物質によるものだが、そんな野暮なことを考える余裕は彼女の頭にはない。
射精が収まる。

「どうする？　恋人が待つ家に帰るかね？」
子宮口を押し開くように膣を貫いている陰茎は、射精を終えたのにまだカチカチに勃起していた。
七瀬は下唇を噛むと、上目遣いで神田を見る。
そして七瀬の方から神田の唇をチュッと啄(ついば)むと、やはり彼女の方から腰を前後させるのであった。

◆◆◆◆

それから一時間後。
帰り道。
やたらと寒かった。
身を縮こませて、夜の街を往く。
ずっと地面を見て歩いていた。
人混みを避けて路地裏に入ると、彼女は膝を折ってその場に蹲(うずくま)った。
そして涙を流しながら、頭を雑居ビルの外壁にぶつけた。

どんな顔をして恋人の待つ部屋に戻ればいいのだろうか。
技を磨いて格闘技に精通し、得た強さは今ばかりは何も役には立たない。
ただ一つわかっているのは、きっと平蔵は温かい笑顔でおかえりと言ってくれるのだろうということだけだった。

最終話「開花」

「外回りに行ってきます！」
威勢良く外に飛び出していく平蔵を、彼の同僚達が見送る。
「町田君。最近やけに元気がいいね」
「あら課長。ご存じなかったんですか？　今年入籍した奥さんが妊娠中なんですよ」
「ほう。そうだったのか。道理で張り切っているわけだ」
社用車のハンドルを捌く手つきもどこか軽やかな平蔵。
仕事に対する意欲も高く、それに正比例して成績も順調だった。
目に映る世界の色彩が鮮やかになった気さえする。
毎日が幸せで浮き足立っている。
探偵を辞めて平穏な生活を選んで良かったと心から感じる。
外回りの途中で昼休みに寄ったショッピングモールのフードコート。幼児を連れた家族連れも多い。
平蔵の視線は引き寄せられるように彼らを見つめ、そして頬を緩くさせる。それは

自分達の未来の姿だと信じて疑わない。
昼食を終えると余った昼休みでショッピングモールを歩く。
そこで目についたのはベビー用品専門店。
ウィンドウショッピングさながらに店の外から店先に展示されているベビーカーを見つめる。色とりどりの愛らしい製品に目移りした。
「あの色もいいな。いやでも七瀬ならこっちの色を選ぶか？」
次の休日、七瀬と一緒に見に来よう。
そう決心しながら携帯でメッセージを送った。
『今週末、ベビーカーを見に行かないか？』
返事はすぐに来た。
『先週も見に行ったばかりでしょ』
呆れながらも笑っている顔文字が語尾に付随していた。
『あそこじゃピンと来るものがなかっただろ。新しい店を見つけたんだ』
『わかったわかった。それより平蔵。あんまり張り切りすぎて過労になるなよ。ただでさえ最近残業多いんだから』
『今張り切らなきゃ、いつ張り切るんだよ。ちなみに今日も遅くなる』

『またかよ。たまには有給でも取ってゆっくりしろよな』
『七瀬がそんな優しい奥さんになるとは思ってなかったよ』
『茶化すなよ』
『わかってる。お前も身体に気をつけろよ。もう一人の身体じゃないんだから』
『耳にタコができたよ』
平蔵はメッセージのやりとりをそこで終えると、これから生まれてくるもう一人の家族のためにと早足で仕事に舞い戻った。

◆◆◆◆

同時刻。
七瀬は港にいた。
停泊している船には見覚えがある。
グランド・プリンセス号。
「遊覧や船旅の予定はなくてね、整備も兼ねて一週間は寄港するらしい。特別に客室だけ使わせてもらえることになってね」

七瀬の前を歩く神田は言葉を続けた。
「君にとっても色々と感慨深い場所だろう？」
七瀬は苦虫を噛み潰したような顔で、振り返った神田の視線を切った。
「……趣味の悪いことしやがる」
「喜んでくれると思ったのだがね。まぁとにかく中に入ろう。海風は妊娠している身体に良くない」
神田の背中をついていく。
船の中は二人しかいないかのように静まり返っていた。
見覚えのある通路。そして見覚えのある部屋。
「ほら確か、ここだっただろう」
そう言って神田がドアを開けて、先に七瀬を招き入れる仕草をした。
七瀬は神田に聞こえるよう大袈裟な舌打ちをすると部屋に入る。
「どうせ、もう例のヤツ焚いてんだろ」
「君も手っ取り早い方が好きだろう？」
七瀬は一見普通に喋っているが、ヘブンズダストの禁断症状は相当に辛いものとなっていた。

自律神経が乱れ息苦しく、気が狂いそうな焦燥感がまとわりつく。
こんな心身ではとても出産を万全な状態で迎えられないと判断した彼女は、いつも通り嫌々ながらに神田へと連絡を取った。
ベッドに腰掛けた七瀬に神田がお茶を淹れて差し出す。
「要らねえよ」
そう答える彼女を神田はうっとりするような目で見下ろす。
「それにしても美しい。君が新たな生命を宿している姿は神々しさすら感じるよ」
七瀬は無表情でその賛辞を受け流す。
「勝手に言ってろ」
そして自分から服を脱ぎだした。
「おやおや。やけにせっかちだな」
「どうせその内手足が痺れてくる。てめぇに脱がされるくらいなら自分で脱いだ方がマシだ」
神田は七瀬の隣に腰掛けながら、演技めいたため息をつく。
「つれないねぇ」
そう言いながら七瀬の膨らんだお腹を摩って言葉を続けた。

「二人で赤ちゃんを作った仲なのに」
七瀬は何も言わない。
神田の方も見ずに、険しい表情で脱衣していくのみ。
「それとね、今日は新しい試みがあるんだ」
「どうせ、ろくでもねえことだろ」
「そんなことはないさ。きっと楽しいよ」
神田は自分の服も脱ぎだしていく。
互いが全裸になると七瀬は仰向けに寝そべる。
その所作は無造作で素っ気ない。
これから行うことに特別な感情など抱いていないという彼女なりの意思表示だ。しかし全身は既に汗ばんでおり、喉はカラカラ。
心とは裏腹に身体は男とのまぐわいに期待を寄せていた。
その証拠に陰唇はもう濡れている。殆ど陰毛の生えていないその秘裂は、ひくついて男を待っていた。
神田はそんな七瀬の両脚を開いて、顔を陰部に近づけた。
そして苦しそうな程に勃起したクリトリスを優しく舐める。

「んっ……」
さらにはクリトリスの周辺に円を描くように舐めて焦らし、最後にクリトリスに唇を押し当てる。
七瀬の息遣いが浅くなっていく。
キスしたクリトリスをそのまま吸う。
七瀬の両手がベッドのシーツを握りしめた。
クリトリスとキスしたまま、舌をグリグリと押し付ける。
「やっ、あっ」
七瀬が堪らないといった様子で身を捩る。
「母性愛に溢れた可憐な反応だ」
神田は陰唇を親指で左右に開く。
綺麗な桜色が膣内まで続いていた。
七瀬が弱々しく呟く。
「……じっくり見てんじゃねーよ」
「これは失礼。ただこんな狭いところから私と君の子供が産まれてきてくれるのだなぁと感慨深くなってね」

神田は七瀬の顔色を窺おうと見上げるが、安定期に入った大きなお腹でその表情を見て取ることはできない。
七瀬は胸を痛めていた。
神田に、『私と君の子供』と言われる度に心臓を抉られる思いだった。
よほど『あたしと平蔵の子供だ』と言い返してやりたかった。
しかしそれもできない中、彼女はただ悪態をつくことしかできない。
「……前戯とかいいからヤルならさっさとヤれ。早く帰って夕飯の準備してーんだよ」
神田はその口ぶりにむしろ愉快気に口端を持ち上げた。
「了解した。ほら、こっちに来なさい」
七瀬の上半身を立たせ、座位での挿入に持ち込む神田。七瀬の身体を慮ってか、その腰使いはどこまでも優しい。
それでも七瀬は挿入の時点で絶頂し、生のカリが膣壁を擦る度に連続で果ててみせた。
「あんっ、あんっ、あぁっ、はっ、んんっ、いいっ♡」
顎を引いて淫らに喘ぐ七瀬。
逞しい男と繋がるともう思考もろくにできなくなる。

そんな七瀬に、神田が後ろから乳首を摘まみながら囁く。
「今日は新しい試みをすると言っただろう？　それがなにかわかるかい？」
七瀬は襲い来るアクメの快楽に目と口をぎゅっと閉じて、ただ首を横に振る。
「この部屋はね、今インターネットを通じて全世界にライブ中継されているんだ」
「……は？」
七瀬はその言葉の意味が一瞬わからなかった。
「勿論誰でも閲覧できるわけではない。それなりの地位を持った会員制のサイトに限った放送だ。それでも不特定多数の人間が見ていることに違いはない」
（大勢の人間が見ている？　こんな姿の自分を？）
そう理解すると七瀬は両手で目元を隠した。極度の恥辱に覆われる。しかし同時に身体を芯から火照らせる興奮があった。
「さぁ。夫婦ではないが、この子の父と母のセックスを皆さんにご視聴してもらおう」
そう言うと、神田は腰使いに力を込め始めた。
「やっ、あぁ……ダメっ♡」
七瀬の表情は、目元を隠していても既にトロトロなのが見て取れる。
薬による感度の向上。敗北して犯される屈辱。様々な経験により七瀬の悦びは花開

LIVE

いていった。そしてそこに痴態を人目に晒されるという辱めも加わる。
カメラから多数の視線を感じ取り、それが背中をゾクゾクと震わせる。
「……ッ♡　パパの太いちんぽで、そんなズンズンされたら……」
「ふふ。その調子でお腹の子を紹介してごらん」
「……この赤ちゃんは……夫より大きいパパのおちんぽで種付けしてもらって……で、でも……一番好きなのは夫だから……」
神田がモニターの向こうの視聴客に向かって言う。
「こんな夫一筋の七瀬君だが、今ではもう私の虜です」
「べ、別に、そんなんじゃ……あんっ、あんっ♡　や、赤ちゃんまで響く♡」
「七瀬君にいいことを教えてあげよう」
「？」
「実はね、今日はヘブンズダストを使っていない」
「……は？」
「言葉の通りだ」
「う、嘘だ……だって……この部屋に入ってから頭がボーっとして……身体が言うことを聞かなくて」

「禁断症状から派生したパブロフの犬、いわゆる条件反射だな。私と二人きりになるともうセックスのことしか考えられなくなった」
「でも、でも……こんなわけわからなくなるくらい気持ちいい……平蔵じゃありえないのに……」
「君の身体が私を選んでくれたということだ」
七瀬は頭が真っ白になる。
そんなはずはない。
そう叫びたかった。
しかし声が出ない。
喉から漏れるのは嬌声と、今抱かれている男への賛辞だけ。
(嫌だ……こんなの嫌だ)
胸の中でそう繰り返す。
しかし現実は変わらない。
ギシギシと揺れるベッド。
ぐちゅぐちゅと摩擦する性器と性器。
「やっあっあっ♡　妊娠セックス、すごいっ♡」

「夫は妊娠中にしてくれないのかな？」
七瀬は罪の意識を顔に浮かべて言う。
「……平蔵は……あたしの身体を案じて……」
「勿体ない。こんなにいやらしい妊婦を放置しておくとは」
「い、いやらしくなんか、ない……」
「いいや。君はとても卑猥な女だったんだよ。どれだけ男勝りに振る舞おうがね」
「違う……違う……違う……」
「何も違わない。今も沢山の人に見られて興奮しているじゃないか」
「これは……だって……あっい♡　おま○こ、刺さるっ♡」
「ほら素直になりなさい」
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡　イクっ♡」
何度目の絶頂だろうか。
七瀬の頭の中でなにかがプツンと切れた音がした。
自分を取り巻いているであろう無数のカメラに向かって言う。
「もう……パパのちんぽがあればいい」
神田は満足気に尋ねる。

「夫のは要らないのかな？」
「そういうわけじゃないけど……平蔵は……夫のことは今でも好きだけど、セックスは、この子を孕ませたちんぽがあればいい……」
七瀬はお腹を摩りながら言った。
「夫のことは今でも愛してる……でも……もう心だけじゃ身体が満足できない」
七瀬は背中を神田の胸板に預けると、キスをせがむように首を曲げた。
神田はそれに応えるよう、優しく彼女の唇を吸う。
ちゅ、ちゅ、ちゅ。
会員限定とはいえライブ配信されている中で、恋人のようなキスをする二人。
神田はゆっくりと赤ちゃんを慈しむように七瀬を上下に揺らす。
「あっ、やっ……パパのセックス……優しい……」
「そうだろう？　夫とどちらが優しい？」
七瀬は不満気に唇を尖らす。
「なんでもかんでも比べるなっつうの……パパのセックスがないと生きていけないっつってんだからいいだろう、もう」
「ふふ。私は独占欲が強いんだ」

「そんなんじゃ女にモテねーぜ」
「じゃじゃ馬は一人手懐けられたようだがね」
七瀬は再び唇を尖らすと、今度は自分から神田にキスをした。
「一言余計なんだよ」
そう呟くと、にゅるにゅると舌を絡ませ合った。
「さあ、私達の愛の営みを皆さんにご覧いただこう」
七瀬は呆れ顔で言う。
「愛なんてねーよ。ただ……」
「……ただ？」
「自分を誤魔化すのに、もう疲れた」
そう言うと七瀬は自らも腰を動かした。
肉棒が女陰をほじくる様が映像にもよく映っている。
それを見せつけるように七瀬は腰を突き出す。
「自分より強い男に無理やり犯されるのも、不特定多数の誰かに見られながらヤルのも興奮しちまうような女だってわかった。最初は薬の影響だったけど結局パパのおちんぽにドハマりしちまったわけだし……」

そう宣言する七瀬の目つきは後悔も滲んではいるが、全体としては挑発的で妖艶だ。
「……だから、パパには最後まで責任取ってもらうから」
「というと？」
「あっ、あっ、あっ♡　パパとの孕ませセックス……今までで一番気持ち良かった……」
「また味わいたいと？」
七瀬はとろんとした瞳で頷く。
「次は、バックで犯しながら子種汁注ぎ込んで♡　あっ、いっ、いぃ♡　こんな風に優しくじゃなくて、思いっきりパンパン激しく子作り交尾しながら、あっ、あぁん♡　妊娠ザーメンをパパ専用の赤ちゃん部屋に注ぎ込んで♡　それも、皆が見てる前で」
「いいだろう」
七瀬の全身が歓喜でブルブルと痙攣する。
「あっ、ひっ♡　いっ、いっ♡　イクっ、イクっ……♡　パパと孕ませセックスの約束したら、おま○こ嬉しがってる……ねぇパパ、一緒に来て」
「ああ、勿論だ。君のイキ顔を全世界の友人に見てもらおう」
「あっあっあっ♡　見られてる♡　夫以外と赤ちゃん作っちゃったあたしのボテ腹セ

ックス見られちゃってる……あっ、イク♡　あぁぁっ、イクっ♡　イクイクイクっ♡
イックぅぅぅ♡♡♡」
二人きりの船室に絶叫がこだまする。
七瀬は深い絶頂の中で、きっともう後戻りできないだろうと確信した。
それでも彼女は今日の夕飯のことを考えていた。

リアルドリーム文庫205
海の上に咲いた月下美人
【電子書籍版】

著者
懺悔

装丁
マイクロハウス

発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル1F
●編集部TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Zange 2022
当ファイルは、リアルドリーム文庫『海の上に咲いた月下美人』
〔2022年3月28日　初版発行〕に基づいて作成しております。

https://ktcom.jp/rdb/

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！　読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **https://ktcom.jp/goiken/**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション　リアルドリーム文庫感想係

恋人兼同僚の平蔵と共に違法薬物捜査のため、
バニーガールとして、豪華客船へと潜入した女探偵の七瀬。
だが、悪漢たちに素性を知られてしまい、
恋人の前で屈辱的な性奉仕を強要されてしまう。
（クソ……平蔵相手だとこんな簡単にイかないのに……）
やがて快楽は、勝気な乙女を淫らに染めていき――。

リアルドリーム文庫

二次元ドリームノベルズ
とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー
日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！
「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」から書籍化！
戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な陵辱系ライトノベル！
姫騎士がクラスメート！
リアルドリーム文庫
ビギニングノベルズ
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ
あなたはどのタイプ？
あとみっく文庫
呪詛喰らい師
あの人気作品の外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチノベル！
フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！
二次元ぷち文庫
異世界デキる妹は いかがでしょうか？
ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！
二次元ドリーム文庫
KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3565-3431(表売) FAX:03-3561-1208
▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

Illustration by 夏桜

『海の上に咲いた月下美人』

©Zange 2022